
女王様の言うとおりに！

田中美紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王様の言うとおり！

【Nコード】

N5192U

【作者名】

田中美紗

【あらすじ】

嫁ぐ姫として産まれたハクアは嫁ぎ先の大国への玉の輿を夢見て日夜花嫁修業に勤しんでいた。

大国から王子が視察にやってきた時、運命は変わる。

双子の姉である跡取りの姫に恋した王子はあろうことか姉に求婚し、大国の権限で婚約者を入れ替えたのだった。

画して、「貧乏暇なし」な弱小国家の女王に就任することになったハクアが女王としての自覚を持てるのか！？

泣いたり喚いたり自由気ままなお姫様が君主になるまでのお話で

す。

嫁ぐ姫と継ぐ姫（前書き）

すっ飛んだ話を書こうと思い、筆を執りました。

これを必死に書いていたのは一年半前くらい。

書きたかったのはニコです。何を書こうって考えて、ドSの部下を……と思いました。

でも多分ハクアも本性はS寄り。

Sばかりの濃いキャラ揃いで書いてても読み直しても疲れますが楽しんでいただけたらと思ってます。。。

嫁ぐ姫と継ぐ姫

十三年前

——レイバード王国領国境線周辺。

生まれてこのかた、人に温もりがあるなんて知らなかった。

この世界には、こんなにも目映いものがあるなんて知らなかった。それはもう童話の中の世界から抜け出したような二頭立ての立派な馬車。

妖精のように小さくて愛らしい女の子が出てきて、血だらけで泥だらけで汚かった自分にもお構いなしにその手は差し伸べられた。

幼い顔と反比例してしっかりした口調で彼女は言う。

「あなたは……目がガラス玉みたいに綺麗ですね？髪の色も金糸のようだわ。せっかくそんなに綺麗なのだから身体も綺麗にした方が良いと思うのです」

それは多分、教育が行き届いていて裕福な者だけが許された常識。ただの偽善。貧しき者に手を差し伸べることを当然だと教わり、温室の花のように育てられた者だけの特権。

だが明日食べる物にも困っていた自分にはそんなこと知ったことではなかった。

それに相手は多分十以上離れた幼子なのだ。

年の頃五歳ぐらいだろうか？赤茶のクルクルと巻いた髪の毛には、自分の髪の毛の色に似た金糸で編まれているリボンを付けて、自分の瞳の色と同じ碧いドレスを着ていた。金色の色素の薄い目には邪心が無く、ただ本当に自分のことを褒め讃えている。

無視できないほどの真摯な瞳、意志のある言葉が自分に向いているなんて今まで一度だって無かった。

本当に、もうこのまま野垂れ死んでしまうと思っていたのだ。

大きな動乱の最中、命辛々走って、走っても走っても自分が生きられる場所なんて何処にもなかったから。

彼女のドレスの袖で自分の顔の泥は遠慮無く拭われていく。だが一生懸命に擦る袖が代わりに泥だらけになるのを見て、こちらから反射的に振り解いた。

自分の代わりに彼女が汚れてしまう必要なんて何処にもないのだから。

急に距離を置かれたことにも臆さず、彼女は泥の取れた自分の顔にもう一度触れてこう訊いた。

「私は、ハクア。あなたのことは、どう呼びすればいいかしら？」
簡単に名乗った彼女に驚いたが、直後彼女の方が驚いたように目を見開いた。

「あ……綺麗になったらほら、やっぱり天使様みたいね？」

そう言って彼女は花が咲き誇るように顔を綻ばせた。自分のこの瞳には彼女の方が余程天使のように映っていたというのに。

何も答えられず、彼女の手を取ったままポロポロと涙を流す。

急な自分の涙に彼女は、困った顔をしてキヨロキヨロと周囲を見渡した。

意を決したように彼女の顔が近づいてきて自分の涙を吸るように口付けをしていく。涙一つ一つ、星が降るように口づけをするのは彼女が両親から教えて貰った愛情表現だったのかもしれない。

先ほど顔から突っ込んで転けてしまったから、拭いたと言っても顔も擦り傷まみれだったことを急に思い出した。

こんなに綺麗な子をこれ以上汚してはいけない。身を振って身体を離そうとした。

だがそんな自分の考えもお構いなしに少女は言う。

「これは天使様がもう泣かないように、おまじないです。母様がよくしてくれるの。それ以上泣くと涙と一緒にこんなに綺麗な瞳が落ちてしまいそうだから、もう泣かないでくださいね？」

この瞬間に自分の未来は決まった。

全身全霊を込めてこの小さな主を守り抜く。

そのまじないが呪いのように自分を縛り付け、それだけで満たさ

れる思い。

今、それだけで生きてきた全てが報われる。

―姫は戦場で剣の鞘を落としてしまいました。

―その姿を見初めた王子は鞘を手掛かりに姫を探し出して求婚しました。

メリウス皇国・謁見の間。

その瞬間は、まるで時が止まったように静まりかえっていた。

「貴女が鞘を投げ捨てて剣を振り上げるその勇ましい姿は、そう！
まるで神話の勝利の女神のよう」

白けきった広間の様子にも全く気付かずに、やたら身なりの良い
ぽっちゃり気味の男は……興奮しながら玉座の横に立つ姉姫に語
った。

メリウス皇国始まって以来の珍事に、家臣共々困り果てていたに
違いない。でもこの場で一番動揺してたのは紛れもなく自分だ。

メリウス皇家第二王女、ハクア||リムズ||メリウス。

少し赤毛っぽい髪の毛はメリウス皇家の特徴だ。金色に近い茶色
の瞳はメリウス皇家の中でも特に色素の薄い自分だけのもの。桃色
に色づく艶のある唇もツルツルに磨き上げた綺麗な肌もこの日のた
め。この広間の中でも一番上等なドレスを身に纏い、嫁ぎ先で恥を
かかぬように幼き頃から教育を施され、一番美しく着飾り、今まさ
に婚約者である隣国の王子からの求婚を受ける筈だった。

今まさに人生の急カーブに立っている。

適当な格好でちょっと挨拶に出てきただけの双子の姉であるラキ
ス||リムズ||メリウスが、何かの間違えでその自分に来るはずだっ
た求婚を受け取ってしまった……厳しい現実を突きつけられ
ていた。

渦中のラキスは無表情に男の言葉を聞き、見定めるように上から下まで見つめた。

自分は蚊帳の外に追い出されながらも隣国、レイバード王家の王子を姉と一緒に値踏みした。自分の夫になるはずという欲目フィルターを外して目を懲らしてみれば、聞いていたよりもずっとずっと縦に小柄で、横に脂肪過多…平凡な顔立ち。

吟遊詩人が語る愛しの王子はもっと知的で、もっと繊細で、もっと美しく、もっと筋肉質で、もっともっと……そういえば毎回毎回の語る内容が辻褄が合わないって事にも今の今まで浮かれきっていて気付かなかった自分が憎い。

シンプルな飾りの付かないドレスに、いつでも兵を率いる事が出来るように甲冑を引っ掛けたままここに立つ男勝りな双子の姉を真っ向から憎みきれない自分が憎い。

そしてどんな王子でも一目で見初めてくれるように、自分の好みまで変えて豪華で愛らしく見えるドレスを身に纏い、髪の毛の先、爪の先、つま先まで毎日磨いて、身も心も花嫁修業を欠かさなかったのに……それでいて選ばれない自分が一番憎い。

一卵性の双子である自分達の特徴差は瞳の色の濃さとこの身体の凹凸……特に胸の辺りの厚みの差にある。

発育不良でほぼ無いに等しい平たい胸を見つめて涙ぐんだ。

同じ顔なら凸凹がある方が勝つのか??

それとも自分が代わりに戦場に出て鞘を投げ捨ててたら選ばれたのか??

色々考えてもこの王子は自分に無いところばかりを見初めてここでラキスに求婚していることに気付いたのだ。

(ああ………暗い)

絶望……って本当に目の前が暗くなるんだって初めて思い知った。

『嫁ぐ姫』として隣国の王子から見初められるためだけに生きてきた自分は……敢えなく嫁候補から落選。

代わりに望んでいないのにうちの国の女王様候補として横滑り。

この日、この時、運命全てに裏切られ、盛大にふられたというこ
とだけは理解した。

隣国・レイバード王国。

その地は豊かな国土、安定した気候に恵まれた大国。

対して、我が国・メリウス皇国はそのレイバード王国のある西大陸の最南端。半島の先に存在する世界最小国家として知られている。
一、面積としてレイバードの首都にも満たない大きさしか無い。
二、気候変動こそ安定しているが特に大きい鉱山などがあるわけでは無い。

三、国土の大きさの割に国民が多いため、田畑の土地が確保できないので自給自足が出来無い。

……と『三無い』の揃った弱小国家だ。

日用品、食料品の大半が将来嫁ぐ予定のレイバード産だったのは今まで自分の誇りだった。『平和の象徴』、『この世の楽園』、とまで呼ばれたレイバード王国に嫁ぐ。十八年間その為だけに育てられて来た。

自身の存在意義を突如失ってしまった今、空っぽの器だけ残ってしまったような感覚が身体を支配していた。

正直指一本動かすのだって面倒だ。お陰でふう、とか：はあく、とか：息が漏れる音しか出てこない。

燃え尽き症候群ってこういうのを言うんだろうな、とぼんやり感じた。

「ハクア様あゝっ！開けて下さあゝい！！」

と、部屋付きの侍女すら追い出して自室に立て籠もり中。少しの猶予も待たずにそんなに気持ち切り換えられる程器用でもないし打たれ強くもない。箱入り娘なのだから箱に詰めて放つという貰いたい。

ほんの少しだけ自分のために泣き暮らす事も、黄昏れながら将来を見つめ直すことも、皇族だからって許されないなんて酷過ぎる。

……と言っても、忘れようにも今寝転がっている天蓋付きのベッドはレイバード製の意匠を懲らしたものの。カーテンも、ドレッサーも、チェストも全て揃いも揃って同ブランドが占拠していて、それもこれも白馬の王子様が迎えに来てくれた時に理想のシチュエーションを得る為だ。

毎日庭園から選んで飾る季節の花も、美しく身体を磨く事も、自分の趣味ですら一つ一つ王子に併せて積み重ねた。全てその為だけの人生。

この高級品に溢れた趣味の良い部屋は自分の愚かな人生全てが詰まってるようで見てるとさらに泣けてきた。空っぽの自分を知らしめられているようで余計に気が滅入るのだ。

「こんな所にはダメ！：外に、出ましょう」

シーツをガバツと剥して乱暴にベッドに放った。いつもなら絶対にがさつな動作はしない。でも今はそんな積み重ねを全て壊してやりたかったから。

ボンッ！

そんな自分の気持ちを表しているかのよう、に、寝室の扉が吹っ飛んで粉々に砕け散った。

粉塵爆発……だ。

戦場でも滅多に目にすることができないような見事な爆発っぷり。標的（扉？）だけを粉々にするその見事な技術に発破職人もびっくり。

何事かと思いながらも、護身用に先の尖った燭台を握って入り口にそっと近付いた。

「姫様あゝ！」

燭台を持つ自分の腕を軽快に避けて小さな物体が体当たりしてきた。思わずよろけてベッドに押し戻されるように座り込む。

「っえ、エリシャ？」

何気に突っ込んできた時に溝落ちに一発入れた彼女は、小さな愛らしい見掛けとは真逆でかなり乱暴だ。長く部屋付きの侍女を勤める彼女は自分の扱いが雑過ぎる。

自分の手の中の燭台を見つけると、無理矢理奪い取ってエイッ！と部屋の端に投げやった。ガチャンと金属音を立ててこれまたレイバード製高級燭台が転がる。

なんだか分からないうちに彼女は自分の胸の中で泣きわめくから首を傾げながら頭をなでて宥めた。

一段落したところで、騒動には無関係そうに優雅な笑みを称えて天使の様な奇跡の容姿を持った男が華麗に近付いてきた。

金糸のように美しい白金の髪。それに負けない宝石のような美しい碧の瞳。筋肉質では無い程度の細マッチョ。長身と言って良いレベルの身長。そしてそれらを収めるに値する造形の良さ。恐らく、無駄に美しいこの男こそが扉を爆破した主犯だ。

肩書きこそ自分の『家庭教師』でしか有り得ないこの男はニコ。因みにただの家庭教師ではないらしい。扉も破れる…のはさて置き、世界中のなんでも知ってる『嫁ぐ姫』の自分に最適の家庭教師なのだ。本人は本気で世界一の家庭教師だと自負している。

だがそれも今日まで。御役御免を自ら言い渡されに來たのだろうか？このエンジェルフェイスが今日で見納めだと思うと多少名残惜しい。

エリシャが「自殺はダメだ！」とかなんとか捲し立てるのを……
…ん？自殺？？

「私、死ねません！こんな事で死にませんっ！」
思わず叫んでエリシャの身体を引き剥がした。自分が誰にも悩みを打ち明けずに黙って部屋で塞ぎ込んでいたのが原因だとはいえ、そんな嫌な勘違いでこの部屋は強行突破されたのだ。

自分の叫びをどう解釈したのか、ニコはパチパチとこれまた優雅な動きで手を叩いた。

「素晴らしいです、ハクア様」

コレ、この人の口癖。『生徒は褒めて伸ばそう』っていう教育方針らしい。

続けて流れるような動作で自分の身体を立たせるとカーテンを開けて光を取り入れた。眩しく輝く外をピッと指し示すときも魅力的なことのように彼は語る。ちなみに語りの切り口は「親御さんが泣くぞ!」的なものだ。

「この窓から見える一面、更にその先まで貴女のモノになるのです。人の上に立つと言う事は隣りの国に嫁ぐよりもずっと難しい。これから学ぶことは山程あります。自殺なんて血迷っている場合ではありませんよ」

「えっ!? えええっ?」

「さあ明日からは大手を振って帝王学をお教えしましょう! 今までもあなたの才能を見込んで花嫁修行のフリして結構仕込んできました。すぐにでも貴女は女王に帯冠できますからご安心下さい」

「ニコ、盛り上がってるところ申し訳ありませんが……?」

「なんででしょうか、ハクア様」

「私…今のところ特に女王になるつもりはございませんが」

「素晴らしいです! 女と言う立場に偏らず物を公平に考えるというのはなかなか出来るものではありません。ハクア様はやはりこの国の賢王になる為に生まれついたのです」

「あー…あ、はあ?」

なんだか色々言われてるうちにどうでも良くなってきた。投げやりに戻事をし、開け放たれた窓の外を見つめた。

広い庭園に一人立ち尽くす男を見つけて、窓の側に近寄る。

少し小柄だが、凛々しい顔立ちを持つ彼は国の有力公爵家の息子、キリヤライダール。ただいま自分と同じ境遇を分かち合える唯一の存在だ。つまり、姉姪ラキスの婚約者だった男だ。

窓の外の彼に向かって大きく手を振る。

元々幼馴染みの気安さで安易に考えていたのだとは思う。「やあ、ハクア」っていつも通りに笑ってくれると無条件に信じていた。

だが彼はこちらの方に一度目線を寄越すとすぐに反らして城下の方
向に踵を返して歩き出した。彼の性格を現すように折り目正しく
真直ぐ歩くその姿を見ても見間違いではないし、更にはちゃんと目
も合ったはず。

「キリヤ様！」

自分の声で一度身体が反応したのが見て取れた。それでも振り返
る事なくキリヤは城下へ歩き去って行こうとした。

それを見たエリシャは皮肉るようにため息を吐いた。

「ハクア様、男心は意外と女心よりも複雑なんですよ。元婚約者の、
しかもそっくりな妹の顔なんて見たくないんです」

「元婚約者…って：私だっておなじように裏切られました」

「それでもハクア様はラキス様の妹君でございます」

“ラキスの妹”と言われて今までは何も感じなかったはずなのに
ズキンと胸が痛んだ。比べられることに慣れていない。

ラキスは『継ぐ姫』だ。『嫁ぐ姫』の自分とはちゃんと役割を分
けていた。彼女は彼女なりに女王帯冠に向けてそつなく振る舞って
いたし、国民からの絶大な人気も得ていた。

今の、空っぽの自分と違って…。

「いいやああああああっ！！」

生まれてこの方出した事がないくらい大きな叫び声を上げた。

それにはキリヤが何事かと振り返った。

「キリヤ！！ライダール！今すぐ！こちらに来なさい！！」

キツと睨んで指をさすと彼に命じる。

キリヤは自分の正気とは思えない叫び声と、正気でしか出せない
その命令に複雑そうな表情を浮かべた。

泣けばすすすす飛んで来てくれる幼馴染みの妹分という立場を利
用したからだ。

ニコが今までのやり取りを見て眉を顰めた。

「そういうやり方はダメです。下品ですよ」

「上品に呼んでも振り返らなかったわ」

「彼の立場も察してあげなさい」

「じゃあ…」

自分の気持ちは黙殺されたのにキリヤには優しくしろって？冗談じゃない。そんな余裕があるならこんな所に籠城などしないのだ。

「まあ、良いでしょう。お二人には話があります」

ニコはそうほくそ笑んだ。

すぐにその笑みが何の意味を込められていたのかを目の当たりにさせられた。

「お二人におきましてはご婚約心よりお祝い申し上げます」

キリヤと自分はニコの言った言葉か即座には理解できず、ポカんと口を開ける。

片やエリシャは手を叩いて「おめでとうございます！」と合いの手を入れて興奮した様子。どうやら悪い冗談では済まなさそうだ。

ラキスが隣国に嫁ぐからと言って、「じゃあ代わりにキリヤとハクアが婚約してください」なんて、誰に説得されても納得できない。……多分、自分ではなくキリヤが一番納得できない。

だって彼は婚約者としてのラキスもそうだが、ちゃんと長い間ラキスと恋仲だった。いっぱい彼らは彼らの時間を育んできていた。いきなりの婚約破棄でも傷ついてはいるはずなのにさらにこれ以上傷をえぐるようなことはしたくない。

ちゃんと恥をかかせないように断らなければいけないだろう。理性と感情の狭間で言葉を紡いだ。

「ニコ、それは今考えなければならぬのですか？今の私には無理です。婚約の件もそうですが女王の椅子も重すぎます」

「ハクア様、女王の椅子は長く空位にしておくものではありません。ハクア様のお母様が亡くなってからはお父上が代理を務めてらっしゃいましたが、この国は女王の治める国です。本来ならラキス様は

一ヶ月後の十八歳の誕生日に戴冠予定でしたし」

「じゃあラキス姉様が継げば良いんです」

「レイバードの加護無しでこの国に生き残る術はありません。レイバードの王子があなたを選ばなかったのなら、むしろラキス様を選んで貰わなければなりません。どちらかが嫁いでくれさえするならばどっちでも良かったのです」

「何が良いんですか！？私を馬鹿にしているのなら出て行きなさい！」

「私にはあなたの方がよほどのこの国を愛しているように見えたのでこの国の玉座にふさわしいのは誰よりもハクア様、あなたでしょう」当然のように言い切ったニコに言い返す言葉が出てこなかった。

自分はこの国が大嫌いだ。

だってみんな自分の前ではレイバード王国を褒め称えて、意識がそっちに向くように仕向けていた。このちっぽけな国に残っていても仕方ないって洗脳したのは誰なの？

自分が『嫁ぐ姫』としてこの国に残ることを諦めれば誰もが喜ぶって、小さな頃から本能で分かっていた。

家督争いなんかにならないように、自分達はちゃんと分けて育てられたのだから。

それでも本当はこの国を愛していたのだ。

それを理想の王子を思い描くことで誤魔化していた。そんなの、今このときに気付かせるなんてニコは、ずるい。

それに自分が継ぐことを決めたとしてもキリヤの傷は本当に深いはずだ。

「キリヤ、断っても良いのです」

と彼の俯く横顔に語りかけた。少し頷いたように見えた直後、顔を上げてニコに言った。

「ええ。僕から断らせてください」

「じゃあ、仕方ありませんね」

とニコが微笑んだ。あまりに潔く引き下がるのでキリヤと自分は

少し拍子抜けしたように息を吐いた。

だがそれもつかの間。キリヤが話を終えて立ち上がろうとしたのをニコの合図でエリシャが強引に椅子へ押し戻した。二人とも突如の家臣の奇行に面食らっていると、素早く二人は外に出て代わりに控えていた近衛兵が扉の前に出てきた。

「決心が付くまでお二人で腹を割って話し合うと良いでしょう。私たちはお邪魔なようなので退散します。後はお若い二人で！」

ほっほっほっ……とわざとらしい笑い声を立ててエリシャとニコはニヤニヤしながら部屋から離れていく。扉はさっきの粉塵爆発で木っ端微塵だが代わりに屈強な身体を持つ近衛兵が三人背を向けて扉代わりをするらしい。

もちろん抵抗もしてみせる。

「退きなさい！」

「ハクア様の命令でも退けません。これは次期女王陛下ラキス様の御意志でございます。強いては国民の総意でございます。もちろんハクア様が女王になられる決心が付けばその瞬間からハクア様の命に背くものはおりま……」

自分は、淡々と語っていた隊長らしきその男の話が終わる前に思いつき体当たりした。まさかドレス姿の自分から攻撃を受けると思わなかったのか、男は急襲に倒れたがすぐに警備の数を補充されて無駄に終わった。

こんな、プライバシーも何もあったものじゃない軟禁が……：始まる。

だーかーらーと言って簡単に納得はできないし、キリヤと簡単に腹割って話し合いができるほど冷静になれる状況でもなかった。

無駄に広い部屋のおかげで結局のところ自分とキリヤは部屋の端と端に陣取った。

勝手知ったる自分の部屋だ。幸いこの部屋には上下水道完備だし、お茶もお菓子もたっぷりあるし、……：キリヤは居心地悪そうに暇を持てあましていたが……：自分の最初の望み通り、ここぞとばかり

りにベッドの上でゴロゴロしながら読書に励んだり、お茶を飲んだりした。

…泣き暮らすのを乗り越え、色々有意義に過ごさせてもらいました。

半日が過ぎた頃。

警備兵の方に疲労が見えてきた。何せ狭い入り口にバリケードを組むこと数時間。もうすぐ出られるだろう、と自分もキリヤもほくそ笑んだ。

だがすぐに我が師・ニコは想像を超える悪魔だと思い知らされる。突如として部屋の中を冷気が襲った。まるで真冬の風下にでもいるような感覚に二人とも顔を見合わせた。思えば今日お互いが初めてちゃんと目を合わせたのがこの時だ。

「ハクア、様……大丈夫ですか？」

「キリヤ様こそ」

キリヤが自分と呼ぶのをためらったのが分かったが、今はそれどころじゃない。いつのまにやら警備兵が撤退させられているのに気付く。誰もいなくなった入り口に二人で近づくとそこには通ることを阻んでいる透明の壁が存在していた。

これは『逆結界』と呼ばれる結界魔法だ。

通常は結界が内側のものを守るが、中にあるものを外に出さない事を目的とした場合によってはそのものを封じるための現象を内側にもたらす。

これが世界に向けてメリウス皇国の誇る技術。

そう、この国は輸出できる特産品がない代わりに技術や知恵を他国に売って対価に換えている。

ただし、それは戦争に関わる物ではないことを法とし、『守り』、『癒し』、『治し』、生きる術を様々な形で提供することで国民の生活は支えられていた。

それを他国では守銭奴と罵る者もいる。戦争に関わらないことを明言しているが結果的に利用されてしまうことも多いことから武器

商人と変わらないと蔑む者もいる。

だが法の基礎を作り、技術の基盤を敷いた当時の女王は、今でも民から『賢王』と讃えられ、その血を引く今の自分達皇家を慕ってくれている。

その技術の粋を集めた結界術が曲がりなりにも次期女王候補の行く手を阻んでいるとはどういう事か……。下衆の思惑通りにキリヤは、肩が震えている自分を心配してか、抱き寄せるように手を伸ばしてきた。

でもキリヤの手を無意識にはね除けると結界の外側に身体を向けた。

これは寒くて震えてるのではない。溢れんばかりの怒りで震えてるのだ。

「こんな強い冷氣結界じゃ人が死にますっ！」

逆結界を張っている犯人も知っている。このやり口は自分に結界術を教えた張本人でしかあり得ないのだ。

多分寒ければ二人の距離は縮まるんじゃない？、とかそういう安易な考えでやってると思うと下世話の極み！いいかげんそういうのにはつきあってられない。

こっちは先ほどお墨付きも貰った優秀な弟子なのだ。両の手に法力を点すと、結界術を綻びから切り裂いて瞬時に破ると犯人の名前を呼びつけた。

「ニコ！」

「ハクア様、決心が付きましたか？」

「付くわけがありません！」

「それではもう少し軟禁に付き合ってくださいます」

パチンとニコが指を鳴らすと後ろから交代を遂げた近衛兵達がまたやってきた。

いいかげんにしてほしい。

おとなしく従うほど今更良い子にはなりたくないのだ。第一こっちだってストレスたまってて、メチャクチャ暴れてやりたいぐらい

に色んな事が頭にきてる。

手中に法力を溜めるとニコと近衛兵の周りにこちらから逆結界を張った。それを端から端から中和していくニコと根比べのようになってしまう。というか、これじゃいつもの結界の授業と一緒だ。彼を欺かなければならない。

「ニコ！」

「私はキリヤ様と結婚しなくとも、あなたが王位を継げば問題ありません。でもキリヤ様と結婚した方がこれから先、国内貴族を掌握していく手間が省けます。ラキス様と婚約破棄したのにこの方の『次期女王の婚約者』って言う肩書きだけは残っているんですから。それだけの権力を持つ公爵のご子息なんですよ」

「そんなの身も蓋もないです」

まるでラキスもそれが目的だったというような口振りに眉を顰めた。

横に棒立ちしていたキリヤが顔を背けたのに気付いてニコへの怒りが再燃した。

パチンと指を鳴らすと結界術の中に魔術で劫火を注入した。近衛兵たちがギョツとしてニコの解除魔法を手伝うように手分けを始めたが遅い。逆結界は完成し、一瞬劫火が内側を覆い尽くす。殺すつもりもないので瞬時に結界を解いてニコに宣言する。

「もうあなたのお勉強はおしまいです。私の結界術の方が優れているならあなたから習うことはありません」

白煙立ち上る室内はまだ視界がはつきりしない。だがゲホゲホと咳をする音で彼らの無事は確認できた。

「素晴らしいです。ハクア様」

ニコの悠長なその声、言葉、手をパチパチ叩くところから鎧の焼け焦げた近衛兵たちとは違い、ノードメージであることは予測できた。どうやら内側に更なる結界を張って凌いだらしい。仕留め損なったことが悔やまれる。

……と睨んでいたら周囲の煙に巻かれていた近衛兵たちが立ち上

がり、二個の言葉に乗せられるように手放して賞賛を述べ始めた。

「女王ハクア様、万歳！」

「ニコ將軍に結界術で勝てる方なんて……ラキス様でも結界術はニコ將軍の方がうえだったのに」

「これでメリウス皇国は安泰です！」

口々に言うその言葉にハッと気付いた。

この小競り合いはニコの企てたパフォーマンスだ。周りの人間が自分が跡継ぎになっても納得するように自分の結界術の実力を披露させられたのだ。自分の性格を知るニコならではの半ば強制的に。

更にもっと気掛かりな台詞を耳にした気がした。

「ニコ………？ 貴方………將軍、ってどういうことですか？」

「はい。ハクア様におかれましてはあまり私の正体に興味が無いようでしたから特に今まで名乗りませんでした。元メリウス王国近衛師団將軍ニコⅡマルスⅡディセールでございます。今はただの姫付きの家庭教師ですけどね」

「近衛師団ってラキス姉様の直属の部隊じゃない！」

「私が將軍職に就いていたのはラキス殿下が入隊する前までです。持病の腰痛が酷くなったので退任して姫の教育係にまわして貰ったんですよ」

急にケフンケフンとわざとらしい咳をしながら腰を摩るニコを一同が白い目を向けた。腰痛で咳き込むってなんなんだか……今まで散々自分相手に格闘技やら剣技やら、結界術はもちろん体力アップの筋トレまで仕込んでたくせに……

だが、自分がいかに興味の無いことを見ていなかったのかを思い知らされた。

脱力して床に膝を折るとニコが頭の上から屈辱的な言葉を浴びせる。

「私を出し抜こうなんて百年早いですよ、ハクア様」

アナタが一番女王として敬っていないんじゃないですかっ！？

心の中で叫んだ。

だが今の一暴れのお陰で気分はスッキリしていた。自分にはもうこの道しか選べない。

そして国民たちも、女王を自分以外に選択できる余地が無くなってしまうのだ。せめてガツカリされない程度には取り繕わなければならぬだろう。

それにはやはりニコの言うとおりキリヤの協力は不可欠だった。

キリヤの方を見上げた。

キリヤは自分をずっと観察していたようだが、目が合うとすぐに反らされた。

幼なじみのお兄ちゃん、もうすぐ本当にお兄ちゃんになるはずだった人。

なんだか心の距離はどんどん遠くなっていく。

それでもこの人と一緒に歩まなければいけないのだ。

「キリヤ様、私を支えてはいただけないのでしょうか？」

「ご命令ですか？」

それは、次期女王としての質問かを問われたものだった。

周囲が自分の返事を待って静まりかえる中、地面に顔を向けたままギョツと目を瞑った。

覚悟を……。

「はい。私が女王として、国を治めるのを一緒に支えてください」
キリヤとニコは黙ってそれに頷いていた。

その日のうちに騒ぎは沈静化し、その代わりに次期女王として第二王女のハクアが名乗りを挙げたと城中に知れ渡った。

結局のところその速報のお陰様。

ラキスの抱えていた山ほどの執務一般は全てこちらに回ってきてしまったのだ。何かを悶々と考えられるほどの余裕が無くなったことは嬉しいやら悲しいやら。

本当に本当に、自分の事を軽んじてるのはこの男だと思うのだ。
涼しい顔で執務を仕分けるニコの顔をちらりと見やった。

扉が吹っ飛んだ上に小火を出した元々の自分の部屋は今エリシャによって片付けられている。その為、今は使われていない女王の執務室、実母の部屋に移動してきていた。

この国一番の地位を持つはずの人間の部屋は、決して豪華絢爛ではない。城に住む者は皆知ってるが、前女王は（いや歴代女王が皆右に倣って）かなりの儉約家で身の回り一切を飾らない…ラキスに似た気質の持ち主だった。

自分の部屋よりもずっと質素だが、誰も使わない今でも埃が溜まらないように定期的に掃除がされて行き届いた管理がされている。広いし、だいたいの家具は揃ってるので代用として使う条件はギリギリ揃っていた。

だが、ただ少し使うだけなら客間の方が使いやすいのもまた事実。ニコによってそこに移る手配をされていたのが疎ましい。周りに権力を誇示するためだと、さすがに分かるからだ。

歴代の女王が使った執務机にお飾りで座らされていると正直言ってる居心地が悪い。

それもこれも誰のせいだ！！…と横で腕を組んで次期女王に即位する為の公務を説明するニコの顔を睨みながら見上げた。

と言っても人の上で指揮を取っていたラキスと違って、凄味の無い自分の顔では睨んだとこで効果は薄い。

だいたい双子なんだから同じような顔してた筈なのに生きてきた過程で随分と違う個性が生まれてしまったものだ。身体形、顔形、雰囲気、歩む道筋も…。

『嫁ぐ姫』として外側に意識を向けていた自分と『継ぐ姫』としてこの国と向き合っていたラキス。

どちらがより不幸だったのかしら？

「ハクア様？聞いてらっしゃいますか？」

「集中はしてませんが聞いてます。即位式までは忙しいってことで

しょう？」

「ハクア様：集中出来ない気持ちも分かりますが公務の時間は他の事を忘れていただきたいですね」

「はい」

「ハクア様、この国はあなたに掛かっています。分かっているでしょう？女王が治めている理由」

「『女王結界』ですか？いきなり言われても出来る保証はどこにもありません。やった事ありませんし、これから先やることも無いと思っております」

「じゃあ今、やってみたら如何ですか？出来ないなら私が内々のうちにあなたの即位を止めさせましょう。私には手を抜いても分かれますから、存分にやって下さい」

簡単に言うニコだがその内容が軽々しいものでは無い事はニコだつて知るところだろう。

秘術、『女王結界』はその名の通り女王しか掛ける事が出来ない。正確には王家の女の身体に術式が組み込まれていてその力で最大の守護を産む結界術を作り上げる。その力は主に同盟国への守護と自国の守護に使われている。

戦争をしないという法の基の自衛と、資本を持たない自国が大国から高額な対価を受取る為の手段として、どこの国の攻撃の手も届かない最大の守りを女王自らが提供しているのだ。

ラキスは苦手だと言っていたが母が亡くなった五年前から彼女の『女王結界』がこの国を守っている。

ラキスは女王になる資格をすでに持っていた。でも自分が出来なかったら…？と思った瞬間に意図せず、肩が震えた。

唇を噛んで俯いているとニコは急かすように部屋の中央へ手を差し伸べて来る。

「や、やりませんよ！私が出来なくても手を抜いたとか言い掛かりつけられるんでしょ？」

苦しい言い訳に聞こえないだろうか？

自分は少しだけ怖くなってしまったのだ。

どうしても出来なくて、ニコからも要らないって言われてしまう事が。

まだ、今のままなら、自分に可能性が残っているままなら………彼は自分に構い続けるのだ。

「ハクア様、相変わらずプチお馬鹿ですね」

「なっ!？」

「私は勝算の無い勝負はしません。あなたには絶対にできます」

ニコは机の上に手を付くところらに視線を合わせて真直ぐ見つめてきた。

深い碧の瞳がその真剣さを伝えて来る。

「できるか…できないかじゃ、ありません」

「じゃあなんなんですか？」

真直ぐな視線に追い詰められてか、気付けばついこう怒鳴っていた。

「や、やりたくないんですってば!!」

「ほゝお？」

ニコは少し口許を引きつらせながらも微笑んだ。無理矢理の笑顔が余計に怖い。

この人に逆らって今まで勝てた試しが無いから。

(に、逃げなきゃ…)

形振り構っている場合では無くなった。ドレスの裾に引っかかってガタガタと椅子から転がり落ちるように地べたを這いつくばると耳元を切裂くような音が聞こえた。

執務机の上に置いてあった先の尖っている付けペンが壁にめり込むように刺さっていたのだ。せっかく移動してきたこの部屋も彼によって破壊される未来を確信する。

壁に刺さったそれを確認したニコは仕留め損なったとばかりに舌打ちをする始末。

(こ、こ、こここ殺されるう!?)

なんでニコに対しては自分の拒否権が全く無いんだろうか??

すごく不格好にドレスの裾を踏み付け、転がるように部屋の角に逃げ込んだ。

「お行儀が悪いですね、ハクア様。これまでもちゃんとスマートに動くように教えてきたでしょう?」

こんな時でも優雅なのを忘れない余裕と、不適な笑いが余計に恐怖をそそる。

その瞬間に自分の周りには意図せずに結界が作動した。自己防衛反応で勝手に張られたモノだ。

だがそれはさすが我が師匠。『元祖・結界破り』の手際の良さで自分がニコの結界にやったのと同じように綻びを無理矢理切裂いて無効化させる。

何もシールドの無くなった自分の身体を無理矢理立たせると下顎と後頭部をガツシリ掴み、ドS家庭教師は目の全く笑っていない笑顔で尋ねた。

「ハクア様は『女王結界』、すごくやりたいですよね?」

「やりたつにゃ…ひいつ!」

言い掛けた言葉は完全に無視されて強制的に彼の手によって頷かせられた。

喋ってる最中だったので少し舌を噛んでしまい涙目になっている自分をよそ目にいつもの彼のセリフが炸裂する。これを聞いて抵抗する気力が失せた。

「素晴らしいです!さすが私の姫君でいらっしゃる。難題にも屈せずに立ち向かうその姿勢は家庭教師としても鼻が高いです」

難題に屈する以前に家庭教師に屈してしまった。

先程の考えも改めて、ちゃちゃっと結界が張れずにこの男から見放されたいと本気で思った。

ニコは胸元から小さな石を取り出して自分の目の前に差し出す。小指の先くらいの魔力を帯びた碧い石。それはニコの瞳の色に良

く似ていた。石の奇妙な光り方に見惚れて、つい何も考えずに素直に手を伸ばした。

触れたその瞬間、身体力が抜けてまた膝を付いてしまう。息が上がって思考が低下していくのが分かった。ぼやっとした淡い白色光が身体から抜けて、石を通ってニコを包み込んでいく。

力の抜けた自分の身体を、代わりに力を得たように艶やかに笑う男が支えた。

ただ、その腕は思ってるよりもずっと自分を大切に扱っていた。

漠然と、掠れて行く意識の奥底でこの腕が好きだと、心地好いと思う……

コトっと何かにぶつかる音がして現実に戻された。

キリヤがいつの間にか呆然と立ち尽くしていた。

力が抜けきって石から手を離れると光は徐々に収まった。ニコは邪魔されたとばかり不服そうな顔で石をしまい込み、キリヤの方に踵をただして向き直る。

「何かご用ですか？キリヤ様」

ニコが口許だけ微笑んでそう声を掛けた。キリヤを歓迎していないという態度は伝わってくる。

「ハクア様は私の婚約者なんでしょう？用が無いと来てはいけませんですか？」

「今は執務中ですので遠慮して下さい。彼女はあなたの妻になる前に女王になるのです」

「執務中には到底見えません。それにあなたの今の地位は執務に係無いはずだ」

カツカツと足音を立てて自分の前に立つと手を差し伸べられた。キリヤの手を取るとまるで汚いものにでも触れたような嫌な顔される。

泣きそうだ。どうしてここまで嫌われなければならぬのか……。嫌ならこんな風に手を貸さなければ良いのに。自分は一人でも立ち上がれるのだから。

「ニコ、少し休憩をさせて下さい」

小さな声でそう言うと、ニコは意外にも簡単に了承し部屋を出た。三竦み状態から開放されて助かった、と感じたのはほんの束の間。二人で残されても、自分から何を言っているのかワカラナイ。その上キリヤから押しかけてきたくせに一向に話を切り出そうとはしなかった。

「キリヤ様、お茶を召し上がって下さい。今し方煎れてもらったばかりなので」

「ハクア様、私がやりますから座して下さい」

難しい表情を崩さない彼は手ずから応接セットにその一式を移動した。

エリシャが用意していったお茶は、すでに『今し方』ではなく温くなっていてポットに触れたキリヤももれなくそれに気付いていたハズだ。

温く、出過ぎた茶葉から出た濃い色の汁が彼の手でサーブされる。「あ、あのあ…私お茶煎れるの得意なんです。花嫁修行の中でも一番自信がありました！ぜひ煎れ直すのでお味見してただけませんか？」

彼に、精一杯気を遣った。

正直言って王族の端くれなりに、気を遣うなんて得意じゃない。それでも自分よりもキリヤが傷付いてそうだったから…その好意を彼は溜め息混じりに打ち返した。

「憐れですね」

瞬間的に自分の腕は温いお茶を…カップの方ではなく、ポットの方を彼の頭の上にぶちまけていた。それでも自分のふつつつと湧く怒りは止まず、追い打ちを掛けるように厭味を口にした。

「親しき仲にも礼儀です。キリヤ様、温くて…良かったですね？」

「頭を、冷やすならもっと冷たい方が良かったです」

空ろな目で彼は返した。何か彼の態度にゾクとする冷たいものを感じるのだ。

自分の傷心が犬に噛まれた程度にすら思えてくる彼の目の暗さ。
今にもここから消えてしまいそうで怖かった。自分の言葉一つで、
彼が戻らなくなる気がして…。

「憐れとは？」

「ハクア様と僕です。余りもの同士をくつつけて」

「…王族の、結婚に愛とかそんな感情は要りません」

「あなたの言葉とは思えませんね」

「はい。本心ではありませんが自分の甘い考えを反省はし始めてます。私の人生、結婚がゴールではなかったですから」

「良いんじゃないですか？女性なんですからそういう家庭に入って幸せになることを夢見たって」

「そう。私結婚相手におんぶに抱っこで食わせて貰って一生樂して暮らす事を夢見てたんですけどね、それはもう夢でもイイヤって思ってたんです。今でも懂れますけど」

「はあ？」

「なんだか自分の中でも整理がついてない事を人に説明するのは難しい。」

「だが『政治』の世界に入るならこの人を説き伏せるくらいはしなければ。」

「私は私の場所が欲しただけです。今までこの国に私の居場所が無かったんです。今の今までレイバードの王子に『嫁ぐ姫』だったので。そうでは無くなった今、私は私の道を探します。だからあんな王子の為に長々と泣き暮らすわけには参りません！」

「じゃあ、復讐でもなさるんですか？」

「光を映さないその瞳が自分の取り戻しつつあった元気を呑み込んでいくようだった。暗い闇に引き摺り込まれてしまいそうになる。」

でも一緒に堕ちてやるわけにはいかない。立ち上がり、彼の顔を両手で上に向けた。

「馬鹿な事を言わないで下さい！私は私で幸せになることにしたんです！アナタはアナタで幸せになるために立ち上がりなさい！！」

下ばかり向いてるから暗い考えに至る。

上を向きなさい！前を向きなさい！

ニコが窓の外を指した時、自分はすっかり光の前に引き摺り戻されたのだ。

「ハアちゃんは変わらないね？」

自分の両手の平に包まれたままのキリヤがこちらに少し体重預けた。幼き頃の呼び名で呼ばれてこちらも緊張を解く。

これから語られる事実の中に彼がこんな頑な理由が隠されていた。「真直ぐ事態に向き合う姿勢は美しいよ。でも僕が君と婚約するのを拒否してるのは…もう女性を信じられないからだ。ラキスが自分を利用していたのは知ってる。何人も愛人がいて…それでも僕の事を利用価値があると思ってる。くれたんだろうし」

「愛人？ラキスに？？やだあ！キイちゃん、あんな武闘派な人にそんなワケ…」

「ラキスの愛人は女性だ」

「は…あ？」

「愛人たちとは戦う舞台が違うから今まで気にしないようにしてきた。いつか国のためにラキスは僕の子を産んでくれるだろうし、男の中では僕を一番に愛してくれると信じていたのに…」

ラキスはそう信じていたキリヤをあっさりと裏切り、もっと大きな他の権力に追随したわけだ。

こちらは呆気にとられて口が開きっ放し。

それでも、それでもキリヤはラキスが好きだと、そう言うのだから姉は偉大だな…と変に感心してしまう。

ポロポロと涙を零して打ち拉がれるキリヤの頭を優しく撫でて必死に答えを探した。

彼に、何かしてあげたい。希望の光を与えたい…。

「分かりました」

「ハアちゃん……？」

「キイちゃん、私は復讐に参加してあげます」

「えっ!？」

「うちの国にラキスから頭を下げて貰いましょう? それくらいの価値のある国にしましょう」

大国に嫁ぐラキスに対してひれ伏させることが如何に難しい事か…。

国内外の貴族は全員知っている。

もちろん自分もキリヤも。

出来るハズは無い、あり得てはならない。

そう知っていて二人はそれを糧に笑って立ち上がった。

同じ方向を向いて歩いて行くために。

「そうですか。キリヤ様を説得できましたか」

「はい、ニコ。キイチちゃん：キリヤ様は婚約者として支えてくれる約束をしてくれました」

「キリヤ様は頼りないですが本人と違ってライダー家はとても有力な貴族です。きっとハクア様の力になってくれますよ」

「ニコ：それは少しキリヤ様に失礼です」

「そうですか? でもちゃんと自覚なさった方が欠点は治しやすいです」

ニコは淡々と公務の説明を終えると、いつもと同じ口調でいつもと違う事を口にした。

「ハクア様、これで私の仕事もお終いです。これからはエリシャが即位式に必要なドレスや身の回りの品々の選定をしてくれます」

「ようやくデスクワーク終了ですか? さすがに慣れない事だから疲れしました」

「ええ。胸を張って即位式をお務め下さい。その姿を見られない事が非常に残念です」

「えっ!?! なんて?？」

「なんで…って私の仕事は『姫の家庭教師』です。女王に家庭教師が付くなんて聞いた事ありません。もう御役御免でしょう？」

ニコは少し寂しそうに微笑んだ。

ずっと厳しい師匠だったのが楽しく学んで来たし、急にいなくなる覚悟が出来ていなかった。

だってこの人が女王になれって、御輿に担ぎあげたのに。こんな風に即位の時にいなくなるなんて有り得ない。

力が抜ける感覚がした。

ライダール家のバックアップを付けさせて城で孤独にならないように手配したんだ。ニコがすんなりと揉めずに自分の側から離れられるように…。

「軍に、戻られるのですか？」

「いえ、ラキス様に付いてレイバード王国へ行きます」

「は？ え？ なんで？？」

「そういう約束だったので。本当ならレイバードに嫁ぐハクア姫に付いて補佐官を勤める約束でしたが…」

予定が狂ったと笑い飛ばすニコに自分はただ呆然とした。

それは自分ではどうしようも無い予定で愕然としてしまったのだ。多分その命令は王家からだ。腕が良く、教養もあるニコは『嫁ぐ姫』に最後に渡される贈り物なのだ。

ラキスに立場が変わってもそれは同じ事。『行くな』と言う事はラキスに一人で行けと言う事と同じ。

ドクンドクンと身体の血液が脈打つのが聞こえてくる。

自分の未来に何らかの形で必ず居るはずだと思っていた人間が居なくなるのは血肉を引き剥がされるような感覚だった。

「ハクア様？ 顔色が優れませんね…疲れが出ましたか？」

「だ、大丈夫です」

「…エリシャを呼びましょう」

彼は言いながら席を立とうとする。

逃がしてたまるかとはかりに、必死でその腕にしがみついた。

「ハクア様、お達者で」

こんな時ばかり本当に優しい声。いつもの皮肉るようにきれいなだけの言葉じゃなく自分の未来を案ずる柔らかな声が降って来て、自分の強張った手を長い指がするりと解く。

陰らない極上の笑みはまるで自分と離れられることを喜ぶようにも見える。

小さい頃にでも戻ってしまったように自分は涙を流して声をあげて泣いた。

まるで親に捨てられた子供のようにしゃくり上げた。

それでもニコは自分を慰める事なく部屋を後にした。

ニコが部屋を出た後も呻くように泣きながら扉の前で蹲っていたら、扉が急に開いて額を強く打ち付けた。

当たった方も当たられた方も予想しない衝撃に静まりかえった室内を扉を開けた主がそおと覗く。それがニコでは無い事は分かっている、それでも愚かにも戻ってくる期待をしていた。

だからエリシャが入ってきた時にはまた火が付いたように泣いた。

「う…うわぁーんっ！！」

「は、ハクア様あ？扉に当たったんですか！？痛かったんですか！？…っていうか、なんでこんなところに転がってるんですかあ？？」

痛いし、哀しいし、悔しいし、の三重苦。

ピーピー泣きわめき続けているうちに自分でもなんで泣いてるのかよく分からなくなってきた。

気付くとエリシャの胸の中で髪の毛を梳かれていた。

鼻を吸いながら涙を拭うとエリシャも頭から手を放し、身体が自由になった。人に抱き締めて貰う事って偉大だ。その温もりは哀しみを半分にしてくれるから。自由になった身体でエリシャの胸の中にもう一度えいと飛び込んだ。

「エリシャは胸が大きくて良いなあ」

「…ハクア様、それはセクハラですよ」

「だって同性ですら癒されるもんね」

「ハクア様胸無いですもんね？薄っぺらいですもんね？」

「う…う…っ！」

「あー！泣かないで下さいっ！大きな目が涙と一緒にこぼれ落ちちゃいそうです。女の子の胸は大きさに関係無く人を癒す効果があるんですよ！」

下を…自分の胸元を見つめてエリシャをもう一度見つめる。

「全く無い胸でも？」

「…小さいのが好きな方もいらっしやいます」

「魅力的？」

「ハクア様の魅力は胸ではありません」

とドキッパリ断言したエリシャの胸元で鼻をズビーツとかんでやった。

全く主を主と思っていないエリシャは「汚いっ！」と頭に拳骨を落とし淡々と用事を片付け始める。自分を立たせて応接セツトに着くとテーブルの上にドレスやら装飾品のカタログを並べながら簡単に説明をしていった。

泣きながらそれを聞いていると溜め息混じりに姉代わりの侍女は尋ねてきた。

「頭の打ち所が悪かったんですか？」

「違いますうーっ」

「じゃあどうしましたか？ハクア様、この間より泣いてますよ」

「…ニコが、ラキス姉様とレイバードに赴任する…って」

「はあっ!？」

「だからもうここには来ないと言われました」

「………そんな…ズルイ！許せない！」

「は??:」

「ラキス様ファンクラブ、城内メイド支部長としてはあの方に男が付き添うなんて有り得ない!!!」

「ファンクラブ??」

「そうですよ！あの立ち居振る舞い、存在の全てが我々を引きつけ

るのです。そこら辺の男性なんて似合いません。確かにニコ様はなかなかあり得ないくらいの容姿の持ち主ですが男性は駄目です！政略結婚なら許しましょう。それ以外は断固拒否です！」

「…エリシャも…ラキス派なの？私のことは？」

「ハクア様は可愛い妹！ラキス様は心の恋人！」

「…エリシャはなんで私の侍女なの？」

「ラキス様の侍女になったら緊張しちゃって仕事になりません。顔が似てるくらいがちょうど良いんです」

そうですね。夢ばかり見てられないですよ？

なんかもう色々どうでも良くなってきた。

人それぞれの違う思惑と言うものが交差して世の中は作られている。建て前しか見ていなかった自分がいきなり本音塗れぶつけられて圧死しそうだ。

きれいで精密だったお仮ごとの世界が崩れて、張りぼてがバレバレのボロボロお城に迷い混んだよう。

人間は上辺で美しく笑ってても何を考えてるのかは全く分かりません。

「エリシャ…、用事は明日でも良いですか？私頭が痛い」

「そうですね！ドレスなんて悠長に選んでる場合ではありません！

！取り敢えずハクア様は今すぐニコ様を説得しにいらしてください」

「へ？？」

あんまりに色々ショックなことが多くてニコの事も忘れ掛けていたというのはナイシヨの話。

怒濤の勢いに負けて無理矢理頷いて話を合わせている。エリシャはそれを受けて、主従関係が逆転したように扉を指さして自分に命じた。

「そうと決まったら早く引き止めて来てください、ハクア様！」

「は…はい！今行きます」

「あなたはもう女王に就任するんですからこの城で一番偉いんですよ！！！しっかりちゃんと女王らしく命じてらっしゃい！返事は？」

「はいっ!!」

ニコに自分が言ったところでできくかワカラナイし、ラキスや色々な政局を考えると自分のわがままだけを押し通すわけにはいかない。だが今のエリシャに逆らうには気合いも体力も足りなかった。

取り敢えずドレスの裾をたくしあげて部屋から逃げるように出てきた。

周りをキョロキョロと見渡してニコの行きそうな場所を考えてみる。

あの根回し大王の性格なら古巣に挨拶が終われば次に向かうのはラキスの部屋だ。

少し離れたラキスの部屋にトボトボと向った。

途中ラキスの部屋付きの侍女に声を掛けてラキスの在室を確認するとやはり今しがたニコも入って行って、部屋は人払いしていると女性好きなラキスがニコに迫る事はないと思うので正直言つてエリシャの危惧する事態はこれから先もほぼ有り得ないと思う。だがニコだって男性だ。二人きりで部屋に入って人払いは良くない。扉の前でギュッと唇を噛んだ。

悶々と考えてるよりは乗り込んで勝負を付けた方が良い。決心をつけて扉を開けようとした。慌てて止めにはいる侍女たちを振り切り、そのまま強引に扉をぶち破る。

すぐに目に飛び込んできたのはゆったりと優雅にお茶を飲んでいた渦中の二人。その手を止めて入口の侵入者（自分）に身体を向けた。

その時の勝ち誇るようなラキスの顔は今でも忘れない。

ラキスがニコに向けて言った。

「ほら、将軍。私の言ったとおりでしょう？ 飼い主のお迎えが来ましたよ」

「そうみたいです。ではラキス様、私は戻らせていただきます」苦笑しながら立ち上がると自分の横まで歩いてきてラキスに礼をする。ニコの美しい仕草、美しい顔はいつも通り。

呆けるように彼の顔を見つめていたらクスクスとラキスが笑いな
がら説明した。

「ハクア、その男は拗ねていたんだよ」

「へ？」

「まんまと勝手にキリヤと和解してちゃっかり味方につけたりして
…自分が支えなきゃと思ってた姫様が意外に政治に向いていたのが
気に食わなかったんだろう？だから昨日まで諸手を挙げてハクアの
補佐官に立候補してたのに一夜にしてレイバードに着いて行くとか
言い出したんだ。そんなの迷惑だからハクアが迎えに来たら…」

ゲホゲホと大きく咳払いしてニコは会話を中断させた。

すっごく大人だと思っていた師匠が案外可愛くて、恥ずかしがっ
てそっぽ向くのをジツと見つめる。耳がものすごい赤い。

「ラキス、ごめんなさい。ニコを返して」

「もともとそんなオッサン要らないよ。私はがさつだから女官を送
ってくれた方が全然役に立つ」

カラツと笑った姉に本当に感謝して、未だにそっぽ向く長身の男
を見上げた。

高い位置にある頭に両手を伸ばして強制的にこちらに向かせる。

「ニコⅡマルスⅡディセル、私の補佐官を命じる」

「はい。承知いたしました」

ニコは迷わず返事をして本当にうれしそうに顔を綻ばせた。

一瞬、抱きしめられるのかと思うくらい強引な力で彼の腕が肩に
回った。だが一瞬後には身体を引き離されて片手を取ると忠誠を誓
うように手の甲に口付けた。

即位式に先立ち姉姫の旅立ちが決まった。

ちなみに今日ばかりはいつも公務を手伝ってくれるキリヤも欠席
している。好きな女が嫁ぐところは見たくないそうだ。気持ちに区

切りを付けるためにも見といった方が良いと思うけど。

だってレイバードからあのおとぼけ王子が迎えに現れた時には、本当に自分が嫁がなく良かったなあ、と再認識したから。同時にラキスに向けて心の中で何度も謝罪した。

それでも自分は重度の面食いなのだ。こんな目と口と鼻と耳がちゃんと付いてます的な顔立ちには用がない。容姿については及第点でキリヤ、満点合格でニコ！

次期女王として挨拶を済ませるとラキスが準備を終えるのを待った。

双子で生まれたときから将来は分かつと知っていたが、こんな形とは誰も予想していなかっただろう。

玉座の横に立ち即位を待つ立場になるとは全く思っていなかったし、周りの者も自分が仕事をこなせるとも思っていなかったようですぐに次期女王として仕事を始めたのが不思議らしい。

だがニコだけはずっと以前から本当に自分を女王に据えるつもりで玉座を狙っていたようだ。最近、彼によってなんでも一人で出来るコに育てられていた自分を自覚する。

ファンファールが鳴り、扉が開かれた。

ラキスが入場する。

あの地味姫がどれだけ着飾ってくるか、自分も楽しみだった。同じような顔だが自分の顔はカワイイ系でラキスは美人系。女性ファンが付くのも頷けるから、なおさら化けるのをここに集まった者は楽しみに待っていた。

期待は良い意味で裏切られた。

ファンファールの音をかき消すぐらいの響めきを背負って入場行進してきたのは、髪を肩口までバツサリ切り落とし、いつも通りのシンプルな（と言えばまだ聞こえは良いが安っぽい）ドレスにメリウス皇家の印の入った黒い甲冑を着けたラキス。それに女性ばかりで編成された十人程度の見目麗しい近衛部隊だった。

これはさすがにあの馬鹿王子だって恥をかかされたと怒るだろう

と、彼を見ると目を潤ませて「カッコイイ」とつぶやく始末。

（馬鹿なの…？本物の馬鹿なの…？）

双方納得の事なら自分達の口出すところではないのかもしれないが、何せ王族の婚姻だ。嫁ぎ先のレイバード王室で姉が苦勞するのではないかと不安げな視線を送った。すぐにそれに気付いた姉はいつも通りの調子で笑う。

「大丈夫だよ、ハクア」

「ラキス……」

「それより悪かったね」

「え？」

「この国を押しつけるような形になってしまった。はっきり言ってこの国は財政が安定しているわけでもないし、特産物があるわけでもない。女王自らが戦地に赴かなければならないことだって多々発生する」

「それは……大丈夫。ニコがいるし、キリヤ様もいるわ」

「私はね、昔からレイバードに嫁ぎたかったんだ」

「え？」

「ハクア、私はこんな小国の女王で満足はしない。だからといって大国の王妃なんてもっと御免だ。レイバードを乗っ取って来るよ」

カラッと笑って、聞き逃せないほどの滑舌の良さで超野心家ラキスは言った。

簡単に嫁ぎ先を変えたラキスのことだ。

すぐく色々納得してしまっただけで、ついでにレイバードの民もきつとこの馬鹿王子よりも余程この美しき女帝を愛するようになるだろうと確信してしまった。

女性ばかりのその部隊は少し気になるが…

…勇ましく美しい姉を、心から誇りに思う。

彼女の野心が果たされることをこの地より願う。

嫁ぐ姫と継ぐ姫（後書き）

ラキスが意外と好きなんです。

ニコは置いておくとして、早い内にキャラを確立させていたのが彼女。

いつまでも、いつつまでもキャラがふわふわしていたのはキリヤです。

二人とも実在のモデルがいるんですが、キリヤのモデルの方は10年異常お付き合っていて未だにキャラが掴めません。

そのままが文章に出ている………自分の未熟さを思い知りました。そのままを書くんじゃない創作しなきゃなあ………と。

良い意味で創作できたのはラキスです。嫌いな人をモデルにした割にはあんまり嫌なキャラではない（笑）

即位式と結婚式（前書き）

セールのシーズンですね。

ネットでマークダウンしてるブランドをチェックしながら投稿作業。

即位式と結婚式

即位式典の朝、緊張も吹っ飛ぶ自分の詰め甘さを思い知らされた。

うちの姉君がろくでもない出立をしたせいで、レイバード王国への根回しやらなんやらは連日連夜に及んだ。お陰でバタバタしていて全てに気が回らなかった………というのはただの言い訳にしか過ぎない。それでも執務はニコとキリヤと手分けしてギリギリなりにしっかりと準備をしてきていたつもりだった。

だが先ほど式典用だと言われてエリシャに渡された衣装を手にして愕然としてしまったのだ。

「エリシャ：衣装は任せるって言ったけどこれは…」

「はい！苦勞しましたよ」
「なににーにー？」

動きやすいシンプルなドレス（普通に民衆に流通している部屋着）に甲冑を着けるこのセンスは完全に我が姉君を模していた。

「いや：常識的にこれは式典用にダメでしょ？」

「巷で流行ってるんですよ？ラキコスって言うんです。顔は似てるんですからハクア様にも絶対似合いますよ！！」

キャハッ☆と、はっちゃけちゃって下さった侍女に後ろで聞いていたニコも呆れながら横に首を振った。彼はすでに式典用の騎士の衣装を身に纏っていてすっかり準備万端だ。軍の正装は一定階級以上なら白地の正騎士の正装を持っている。ニコは軍部に復帰したわけでは無いがその姿に身を包んでいた。

すっかり直前まで衣装の事を忘れていた自分とは違い抜け目の無い師匠を怨めしそうに見つめていると、渋々エリシャに一言物申し始めた。

「エリシャ、ハクア様にはラキス様とは違う印象を持たせたいのでこの衣装では駄目です。チェックしなかった我々も悪いですが正式

な式典にこれでは悪ふざけが過ぎますよ」

「でもニコ様だってハクア様のいつものお色気ブリブリリアントドレスよりもこっちの方が民衆の受けが良いって分かってますよね？」

「我が女王に人真似をさせるつもりはありません。我々はラキス様の模造品に仕えてるわけではありませんから」

二人の間に火花が散ってるようにすら感じた。自分の衣装の事なのに全く意見を訊かれないのも哀しい。

ニコの言ってる事は最もだし、エリシャの言ってる内容はかなりぶっちゃけてるがラキスの人気を利用するのは合理的だとは思う。

自分の持つワードローブには嫁入り用の高級レースがふんだんに用いられたドレスがいっぱいある、が女王としてはどうなのか……。動きにくそうな背中を開いたドレスやら胸に大量の詰め物をしてナイスバディを装うセクシードレス達は『どんな王子もイチコロ！』の……。色仕掛けするためにレイバードの老舗ブランドから取り寄せたものばかり。はっきり言って色気とかは必要のないキツチリしなければいけない正式な式典には不向きなドレスばかりを持っていた。

ニコが壁側にずらっと掛けられてるドレスを見渡して溜め息混じりに一番露出が少なくて質の良さそうなものを渡してきた。

「無難でしょう？」

「無難……ですネ」

押しつけられたドレスを見やって、それでも違和感を覚えた。

こんなずりずり裾を引きずっていてメリウス皇国の働く女王なんかになれるのかしら？

うちの国の財政を考えたら高級なドレスなんかさっさと売っ払ってしまったほうが良い。

チラッと軍服を身に纏うニコを見やって考えた。

「ニコ……あなたの着てる上着を貸してください」

「え？」

「私ドレスはもう要りません」

「ハクア様：女性の正装はやはり…」

「女性とか男性の垣根を超えて…とかなんとか私に言いくるめてきたのは貴方です。時間も無い事ですしニコ、貴方の上着で出ます。下もパンツの方が動きやすいですよ？エリシャ」

パタパタとエリシャが乗馬用のパンツを持って来た。

それを受け取ると身ぐるみ剥かれたニコが呆気に取られた様子でこちらを見つめている。

「まだ駄目ですか？」

「これも正装なんで、駄目じゃ…ありませんがハクア様、ドレスがお好きでしたよね？」

「別に好きじゃないです。隣の国で流行ってるって聞いたから着てただけです」

「………こんな軍服で良いんですか？新しいものを用意させましよう」

「これはニコが今までメリウスの為に仕えて使い込んできた物でしょう？だったらこれが良いです」

そう言いながらクンと上着の匂いを嗅いだ。少し甘いような香りは彼の身体に塗られた乳香の残り香だろう。ニコが超絶嫌そうな顔をした。

「嗅がないでください」

「えー？私はニコの匂い、好きなんです」

「やめてください。変な誤解を受けます」

「メンドクサイですねえ」

問答無用で上着に腕を通すと少しサイズの大きいそれはまだ少し温もりが残っている。

今までで一番大きな溜め息がすぐ近くから聞こえてきて顔をあげた。着慣れない軍服にボタンを留める手をもたつかせているとニコが襟元に手を回して代わりに整えた。そのまま胸の階級章を外し、代わりに毛皮の使ったマントを取り付ける。

「階級章はさすがに返して下さい。あなたは將軍じゃなく女王なんですから」

「はい。ニコ」

「私は着替えて参ります。会場でハクア様のご勇姿を心待ちにしておりますので」

ニコはそう言って部屋を出て行った。

彼は昔から自分から選んだ道を否定しない。彼の口癖の『素晴らしいです』と、その言葉の通りに自分が決めたことをちゃんと褒めてくれる。そんな彼の上着に包まれてこの門出を迎えられるならばこれ以上ない礼服となるだろう。

エリシャがそれに併せて髪を凛々しく結ってくれた。

さすがに緊張している自分を感じて無意識に上着を抱きしめてる。

「…………ハクア様、間違っていたら笑い飛ばしてくださいね」

「え？」

「ニコ様のこと、好きですか？」

「好きよ。当たり前じゃない。私の先生だもん」

「違います。恋愛の意味です」

「えっ!？」

考えたこともない恐ろしい事を言われて固まってしまった。

だが納得してしまう部分も大いにあるのだ。

実に五年ほど前、父王が自分の家庭教師として彼を紹介した。その時に自分の美の基準は彼となり、超面食いの根源となったに違いない。顔は大好きだ。

でもニコの良い面ばかり見てきたわけではない。凄いスパルタだと思ふし、期待に応えられなかったときの彼の対応は酷いで済まされるものではない。とりあえず口の利き方だけは自分を敬ってる風だが絶対に小馬鹿にしているし。

「あり得ないでしょ？」

首を傾げて疑問系の結論を口にした。エリシャはそんな自分を見つめて勝手に納得したように頷く。

「エリシャ、言いたいことは口に出して」

「今日女王に成られる方に失礼かと思いました」

「言いなさい」

「つまり、ハクア様はウブなんです。可愛いなあと思いました」

「は？」

言い返そうと立ち上がると扉がノックが聞こえてキリヤが迎えにきたことを知らせた。

エリシャは「おっとっと」とからかうようにニヤニヤして後ろに下がる。

釈然としないまま立ち上がり、宝剣を手取る。

ズッシリと重みのあるソレは歴代の女王の血と汗の滲む一品だ。重みに負けて落としてしまいそうになるのを必死に堪えた。

こっちは気持ちを切り替えようとしているのに嘗めるような視線を寄越す侍女を睨む。

「エリシャ、からかうのはやめて」

「ハクア様にこんなこと言ってあげられるのは今までもこれから私だけです。だからやめません。きつとハクア様自身が私に泣きついてきます」

「泣きつきません！」

「じゃあ一つだけ。恋か親愛かは知りませんがニコ様の事をすごく思っているのはハクア様です。ちゃんとその部分を認めてあげた方が色々楽ですよ」

ニコがラキスについて行くと言った時に大泣きしたことがフラッシュバックした。エリシャにあの姿を見られているのだから言い訳無用だ。

「……っく分かりました！ニコは大事です」

「よろしい。ハクア様は素直なところが良いところです。胸を張って行ってらっしゃいませ」

そう言ってトンと胸を小突かれた。

姉のように慕っているとは言え、エリシャは身分が低いいため式典

には出られない。そんなエリシャは自分を氣遣ってくれたのだろう。これは緊張している自分への励みだ。

エリシャがいなくても、ニコがいるよってちゃんと教えてくれたんだ。

頷いて大きく深呼吸した。

「女王に、なつてきます」

扉を開けて王族にのみ許された黒い正騎士の格好に身を包むキリヤに「行きましょう」と声をかけた。彼は自分の姿に一瞬面食らった顔をしたが、すぐに手を差し伸べてエスコートをしてくれた。

この日、黒の騎士が白の女王を連れて祭壇に上がり女王に就任した。

式典後のパレードは新女王の姿を目にしようとメリウス皇国中の民が参道を囲み声援を送った。

本来はこの声援を受けるはずではなかった自分は複雑な心中ではあったが自分を祝福してくれる民衆に応えられるような女王になると自分に誓った。

即位式も終えて、メリウス皇国新体制の基に本格的に執務室に詰めるようになっていた。

執務室は相変わらず自分とニコが駐留して、時折キリヤが顔を出す。

大臣達はニコに將軍復帰を持ちかけていたみたいだが彼はそれを断り、女王付きの文官に本当に修まってしまったのだ。しかも歴代女王の文官は片手では足りないくらいの人数がいたはずなのにすべて人件費カットの名の下に一人でやると豪語したというのは後で聞いた話。

実際に彼は出来てしまっているのだから申し分ないだろう。女王付きの文官は一人でも構わないのだ。執務のまとめ役のようなも

のだから何人もでやっている方が効率は悪いと思う。

怒られるので判子を付く手を止めずに、涼しい顔で仕事する有能な文官をチラ見した。

今日の諸外国からの文書を仕分けしている彼は顔を顰めて一枚紙を超越す。

「なんです？」

「レイバードへの招待状ですね」

「あ！ラキスの結婚式？」

「ハクア様の即位式典には顔出さなかったのに横柄ですね。うちの国を格下に見ている」

「実際格下だしね、レイバードに行ったばかりですぐに戻れとは言えないわ」

「即位を待ってからレイバードに行くことだって出来たはずです」

「うーん……でも自分が『嫁ぐ姫』だったとしたら同じ事してたと思う」

レイバードから迎えがきたら自国のことなんか気にせず喜んで片道切符を用意しただろう。で、その割に結婚式の招待状もウキウキしながら出しただろうし。

そんな自分を思い描いて苦笑しながら、嫌な顔をしているニコから文書を受け取った。

自分の心の傷はすっかり癒えて、彼らをちゃんと祝福する気力もあった。もちろん双子の姉の晴れ姿を一目見たいから出席するつもりだが、大国の招待というのは強制招集令状のようなものだ。自分に断る権限は無いだろう。

だが文書に目を通して唸ってしまった。

「これは……ニコ……」

「パートナー同伴ですね」

パートナー、つまりはキリヤを指しているのだ。自分と違って全く心の傷が癒えた様子のないキリヤを伴えと。

招待状はあのボンクラ王子から。もしかしたらキリヤを元婚約者

と知っていてこういう招待状を出してきたのかもしれない。見せつけてやる、的な？

全く女々しい……。嫁に行かずに済んで本当に良かった。

「キリヤ様は……付いてきてくれるかしら？」

「まだ名ばかりの婚約者とは言えそれが彼の仕事です。張り倒しても、一服盛ってでも連れて行きましょう」

「そうねえ……外交だって執務だもの。今回逃げたっていずれ行かなきゃいけないことも出てくるだろうし」

「そうです。第一ハクア様はキリヤ様に少し甘いですよ」

「キリヤ様があんなに傷ついたのがラキスのせいだと思うとつい……」

本当なら文官が少ないこともあって執務室には張り付いててほしいくらいだがキリヤは自分の用事を済ませる以外でここに立ち寄りほしくない。それではいけないと思いつつも彼に強く言えないのは……。

（なんでだろう？）

可哀想だから……とかはそろそろ通用しない頃だろうし。

手を止めて考えているとニコはさらにもう一枚紙を置いた。

「うわ」

「本当にタイミング悪いですが、キリヤ様にはお一人で女王代行としてレイバードに行って頂くことになりそうです」

もう一枚の紙は国の結界の定期点検に関する報告書だ。

女王が担当する国レベルの結界は、メリウス皇国立保安委員会の結界士達が定期点検を行い、その術の安全を確認している。なんでもないなら五年に一回の更新時期にちよつと修復すれば済む程度なのだが『要掛直し』にいったい丸の付いた報告書が事態の深刻さを示していた。しかも場所がレイバード王国と冷戦状態にあるフェーン帝国との国境を記していて、これはレイバードとしてもきつと結婚式に出ている場合じゃないと判断するだろう。

因みにこれもこれも前回の結界を施したレイバードの嫁であるラ

キスが元凶だ。

あんまりそういう話もしたことがなかったが…………。

「ラキスってもしかして結界…………」

「普通の結界魔法も苦手だったと思いますよ。『女王結界』に関しても本当に駄目だったんでしょね」

ニコは報告書をもう一度見やった。一緒に載っている性能評価表がラキスの能力を表している。耐火性能が標準値ぐらいで他の魔法に対するシールド効果は全て基準値以下。しかも問題のフェーン帝国国境沿いの報告は本当にどうしようもない事項が記載されていた。「ニコ、これって…………この要石がとられてるって事よね？」

「国境線が変わってしまっているならそういうことですね」

『女王結界』は自分自身がそこに行かなくても本来は掛け直しが可能なのだ。要石と呼ばれる石が要所要所に設置されていてそれに力を送ることになっているから。

だが最新の報告書は国境線が分からなくなってしまっている箇所を示していた。その要石の安置場所がフェーン帝国領になってしまっている可能性が高い。直にそこへおもむき、ちゃんと設置してこなければならないだろう。

（ラキス…………あなたがこの国の女王になっていたら確実に三年で滅びたわ）

…………自分だって『女王結界』を掛けたことがないのだからなんとも言い難いが、恐らく女王じゃないうちの国の名うての術士が掛けたらもう少しちゃんとしたモノが張れる。国同士の取引にこの低レベルな結界を使うのは拙いって…………。

そこでふと気付いた。

（まさかラキス…………逃げた？）

結界の才能が乏しいことに気付いて自分に女王を押しつけたんじゃないか？あの勇ましい姉に限ってそんなことはないと思いたい…………。いや、あの姉なら女王に就任したと同時に『女王結界』を廃止し他国への侵略を始めるだろう。取りあえずフェーン帝国領辺

りに無理矢理イチャモン付けて宣戦布告……………。

そこまで思い至ってこのボロボロの結界達がある程度わざとであることに気付いた。ラキスは間違いなく向こうから戦争を吹っ掛けてくるのを待っていたのだ。

頭を掻きむしってあの自由奔放すぎる姉をに恨みの念を飛ばす。

そういうことはせめてちゃんと引き継いでくれ！

タイミング良く扉がノックされ、エリシャがお茶の用意と一緒にキリヤの来訪を告げる。

ニコと目を合わせて頷き応接セットの方へキリヤを通した。横でエリシャがお茶の準備をしながら不穏な空気に首を傾げていた。

「キリヤ様、ラキスの結婚式の招待状が来ています」

ゴクンと生唾をのみ込んだのがそこにいた全員に聞こえた。あからさまに引きつるキリヤに望みは薄そうだ。

「出て、くれますか……………？」

「そりゃあ……………外交なんだから仕方ないですね。奨んで行きたくはないですけど」

渋々そう言ったキリヤにニコと自分はニヤリと心の中で笑った。

「招待状がギリギリだったのもう明日には出立しなければなりませんね。執務は大丈夫ですからキリヤ様も今日は準備をして下さい」

と柔和な笑みをキリヤに向けた。ニコも気味が悪いくらいに愛想良く微笑んだ。彼も思うところは同じようだ。このままキリヤには一人で行くと勘付かれないうちに旅立って貰う！旅程は途中まで一緒だから簡単な話だ。

ゴタゴタ言われる前に国を挙げて追い出してしまえばさすがに断れないだろう。

頭の中ではキリヤに付ける文官や輿の手配を計算しつつ、自分がフェーン帝国領との国境に向かう算段もしていた。

いつもは全く余計な話をしていかないキリヤも気を紛らわそうとしてかエリシャのお茶に口を付けて無理矢理作った笑顔でこちらに話しかけてきた。正直言って一分一秒が惜しいこの時だが、キリヤ

の機嫌を損ねるわけにもいかない。

「ハクア様は最近ドレスはめっきり着られなくなりましたが、姉上の結婚式なら極上の物を設えなければなりませんね」

「……………あ。いやドレスは時間がないので間に合わせの物を……………」

「それでは姉上とレイバードの王子に失礼でしょう？ハクア様におかれましては以前からレイバードのドレスを好まれていましたが、メリウスの意匠を懲らした物を一枚お持ちになった方が良いです」

「いえキリヤ様……………」

“私は行かないので全く必要有りません”と言いかけてニコに思いつき足を踏まれた。痛くて涙目になりながらなんとかひねり出した感謝の言葉にニコがウンウンと頷く。

「でも準備の期間も短いことですし今回は持ち合わせのもので……………」

「本当は即位式に間に合わせようと思っていたんですが……………」

「え？」

「作っておいたんです。後で届けさせます」

「えっ？……………あ、あ、ありがとうございます？」

「なんで疑問系？」

「……………突然のことで」

引きつっているとニコが横から小突いた。いちいち五月蠅い。

「すごくうれしいです。絶対着ます」

次の訪問の機会にでも……………と思ったことはキリヤには伝わらなかったようで自分の言葉をそのまま受け取り、久しぶりに彼が陰りもなく笑ったのを見てしまった。

今更自分の嘘が彼の心の傷をさらに抉っているという事実気付いてしまった。でももう取り返しが付かない。

執務室に淡い緑色のドレスが届けられたのはその日の夕方過ぎだった。

切りが良いので今日の執務も終わりにしようとしていたところだ。箱からドレスを出して当ててみるとどこから自分のサイズを調べたのかちゃんと身体に合う。色も自分好みで、形はキリヤが言っていたようにメリウス独特の袖口の広がった法衣のようなデザイン。一目で素晴らしい物だと分かる作りで、確かにコレなら即位式典で着ててもおかしくなかった。

ラキスが好むような色やサイズの物を仕立ててたのなら問答無用で単身レイバードに送り込んでいたのだが明らかに自分を氣遣う贈り物にそれが出来なくなってしまうそうだった。

「どうしたら良いんだろう…」

「放っておけば良いんです。こちらだって遊びでやってるわけじゃないじゃない」

ニコはチラッとドレスを見やってそう冷たく言った。

正直言って自分だってキリヤは甘ったれてると思う。でも悪意のない細やかな心遣いに感謝しないほど冷徹にはなれないのだ。放っておく、その行為が自分には出来なかった。

立ち上がって執務机の方から応接セットに移動するとお茶を用意しようとしていたエリシャの手を止めた。

テーブルにメリウス皇国とフェーン帝国領とレイバード王国の載ってる地図を広げてニコを手招きする。

彼は物凄くめんどくさそうな顔をしたが渋々地図の前に座った。

「ニコ、私だって姉様の結婚式に出たいわ。そう！キリヤ様のためだけじゃないのよ」

……と、でも言わなきゃ協力してくれそうにもなかった。

「で？何ですか？」

いつもより少し低い声がニコの不機嫌さを表している。元々身内しかいない場所では自分を敬わない威圧的な態度を取ることが多いニコだが、殊キリヤの関わる問題は増して厳しい。

少したじろぎながらも地図を指さした。

「メリウス城下からレイバード城までは馬車で一週間。結婚式まで残された猶予は十日です。早めに発つので明日出立になりましたね？」

「そうですね」

「結界の崩れている部分に向かうにはレイバード城下を超えて更に三日……」

「はい」

「これは全部輿に乗ってですよね？」

「何が言いたいんですか？」

「私一人で馬に乗っていけばもっと早く着けますよね？」

「駄目です。女王が護衛無しで行けるわけ無いでしょう？小隊クラスの護衛兵を連れてレイバードとフェーンを通行したらどちらに対しても戦争を吹っ掛けていると思われるもおかしくありません。あなたはそういう意識が薄いかもしれませんが、政治というものは……」

「別に女王として通ろうなんて私は一言も言ってません」

ニコは自分の言わんとしていることを瞬時に理解して首を横に振った。それは臣下として正しい判断だろう。無謀なことを言っている。

でも出来ない相談ではないはずだ。特に、それを叶えてくれるのは他でもない今ここにいるニコなのだから。役者は初めから揃っている。

「二人で行きましょう」

と微笑んで言った。ちよつとそこに散歩に誘うくらいのノリで。

ニコは今までで一番大きくて長〜い溜息を吐く。

「ハクア様、向こうで作業する時間だってあるんです。幾ら行程を省いたところでレイバード領からフェーン帝国領に入れば片道五日。帰路は馬も疲れるので一日多めに考えて取ります。レイバード首都に直行するとしても三日。作業がスムーズに行けば足りるでしょう」

があまりにギリギリすぎる」

「もう少し短縮します。私、往路はフェーン帝国領から回りますから」

地図で経路を指さして言った。海路で短縮させる作戦だ。

我が国は半島の小さな国。レイバード首都を越えてフェーン帝国領に入るよりも今回の要石の場所は海路で帝国領の港から馬を使うのが一番早い。多分片道三日と掛からない。

もちろん敵国内を長く抜けるというリスクは大きい。だが自分とニコがお忍びで向かえば外交トラブルだって避けられるはずだ。

ニコはテーブルにダンッ！と拳を落とした。貴重な世界地図がグシャッと潰れるのを見て彼の怒りを感じ取った。

(まずい……怒らせたかしら？)

当然と言えば当然だ。強行軍を組む理由がキリヤだとしても自分の我が儘だとしても、それはどっちにしろ『個人的我が儘』なのだ。個人的我が儘で片やニコには命を掛けろと言うのはあまりにも彼を軽視しているのかもしれない。でも自分の師匠でもある彼なら容易く出来ると踏んでいたのだ。

テーブル叩いたきり何も言わずに睨むニコにこちらも何も言えなくなつて落ち込んだ。

馬鹿なことを言ってしまった、と。

「輿には……乗らないと駄目です。レイバード城に入る時は、我が国の代表なんですから」

「え？」

すっごく怒っていることはその低い声で伝わってくる。でもニコはそのグシャグシャになった地図を伸ばして自分の作戦の補足をした。レイバード首都直前にある宿場町を指さして。

「ここから輿に乗るので復路は一日多く、四日取って下さい。ハクア様、作業は三日以内です。出来ますか？要石を探したりしていたら本当にギリギリですよ」

「はい」

「全く……あなたは初めて『女王結界』を挑戦するのでしょう？
他のところに気を取られて甘い仕事をしたら即座に結婚式参加は諦めて頂きますよ」

「ニコ！ありがとう」

「宿場町の方に輿を手配して貰うのはキリヤ様と一緒に同行する文官に依頼しておきます。ドレスや必要な荷物はキリヤ様に預けて先にレイバード城に持って行って貰いましょう」

テキパキと指示するニコはいつも通りだ。最後にエリシャに平服の準備を頼むと立ち上がる。

「ハクア様、私は許しましたが……明日の出立前にキリヤ様にごねられたら諦めて下さい。この作戦内容ではキリヤ様が協力して下さいと成功しません。向こうで先達て行う王への挨拶も一人でやって頂かなければなりませんし、ハクア様の荷物や女官やその他一切をキリヤ様が預かる形になるのですから」

そのキリヤの行軍に同行予定のエリシャがそれを聞いてうめき声を上げた。

心配そうな表情をする自分の女官頭と、無理と決めつけたように鼻で笑うのニコ、交互に見た。

「いや……さすがにキリヤにも仕事して貰いましょうよ。貴族の……しかもかなり高位の貴族なんだから私の婚約者では無くとも大臣職とかに就いてておかしくないんです。ちゃんと合流するって言ってるんですから逃げずにやって頂かないと」

「まあ、当然ですね。でもヘタレ坊ちゃんなのであんまり期待してないです」

ニコの毒舌にエリシャが深く頷いた。

ここの二人はヘタレっぷりばかり見てるからそう言うが、キリヤはそうとう優秀なはずだ。軍部でもその才能を欲しがっていると最近国防大臣が言っていたし。

ポロポロと涙を流して泣いていた姿を思い浮かべると……ただのお世辞じゃないかと疑いたくはなるが。

三人とも不安げに空笑いした。笑うしかなかった………というか。一頻り笑ってからエリシャが言った。

「だーいじょうぶです。私がちゃんと蹴っ飛ばしてでも、縛り上げてでも、一服盛ってでも連れて行きますから！ご安心下さい」

そう胸を張る小柄な彼女に、今度は本当に笑い声を上げて笑った。ニコは真顔で盛る薬の小瓶を彼女に渡していたが、更にそれが可笑しくて自分はもう一度笑った。

急に決まった遠征とは言え女王陛下の遠征軍だ。

しかも行き先は大国レイバード王国。国中の名だたる貴族が自分達を見送りに参道に集まっていた。

天気は良好。

キリヤの様子も落ち着いて見える。

遠巻きに遠征軍を見やってウンウンと頷いた。

実に出発の門出に相応しい日だ。

今からケンカを売りに行くようなことをしなければいけない、なんて事がなければ本当に心から晴れ晴れ出発していたのに……。

女王らしからぬ物陰に隠れているとニコに早く行けと小突かれた。確かに時間もないことだしちゃっちゃと済ませてしまおう。

参道に馬を走らせ、キリヤの目の前に行き行った。

輿で出てくると思っていた諸貴族は驚きの声を上げ、キリヤも目を丸くしていた。多分自分の格好に一番驚いたのだろう。

馬は軍馬ではあるからかなり体格が良いし早い、馬具に関しては平民が使うそれに変えていた。

何よりも自分の格好。旅人の軽装に身を包んでいたからだ。更に白金髪のカツラを被り、更に長い髪の毛を隠して少年のような格好に扮して性別まで偽った。

これが敵国を通るといふ作戦を通すにあたり、ニコが出した条件

だ。治安が悪い場所を女性と同行するのは厄介ごとを増やすからフエーン帝国で珍しくない髪の毛の色のカツラを被る……とのこと。

「ハクア様……ですよね？」

「キリヤ、預かって下さい」

馬上から昨晚渡されたドレスを投げやった。キリヤが慌てて両手を出しそれを受け取る。

「どういことですか!？」

「私はフエーン帝国へ『女王結界』の修復に向かいます。修復したらずぐにそちらに向かうので先に行つて下さい」

キリヤ以外の臣下達は全員その言葉で状況を理解した。外交的にレイバードに赴くことは大事だが、それ以上にこの国における『女王結界』というものが自分達の飯の種になると言うことを国民全員が知っているのだ。

仕方ないだろうと言うように彼らは口々に旅を祝福する言葉を手向けた。

だが一人、キリヤに限ってはニコの予想通りの反応を示し、ガツカリした。

ギリギリと歯ぎしりしながら自分のマントを引っ張ると恨めしそうにこちらを見上げた。その目が置いてかれる子供のように……同じ年代の男性としてはそうとう頼りない。

マントに掛ける手を振り払うと一言言い捨てられた。

「裏切り者」

頼りないだけではなく……大人げない……。

姉の婚約者だった頃は温厚で素晴らしい人物に見えていたのに……隣の芝生は青く見えていただけか。

ちゃんと『姉の婚約者』でもなく『自分の婚約者』でもなく『貴族の息子』でもない、ただのキリヤだって自分は知っている。何のしがらみの無かった幼き頃からの友人として言おう。

「キイチちゃん! 私が信じられないのですか? 私は絶対にそちらへ行きます」

「ハアちゃん……………」

「しっかりと遠征軍をまとめ上げて連れて行って下さい」

そう告げるとキリヤも渋々頷いた。

もう一度マントを翻し、宝剣を抜いて民の声援を受けると馬を走らせた。ニコが文官たちに資料を渡すと後に続く。

かなり後ろ髪引くような視線を感じたが、なんとか言い切ることに成功した。正直言って気の重さに掛けてはこの旅ナンバーワンのイベント。

少し離れた場所まで掛けると、自分達は馬の上で固く握手をし互いに胸を撫で下ろした。

城から馬を全力で飛ばして半日たらず。

我が国屈指の貿易量を誇る港に到着する。すぐにニコが手を回していた船に飛び乗った。

東の大陸、シール王国の貿易船。

スピード勝負の生鮮貿易が盛んな東の大陸。金銭の巡りの良い国の最新鋭の船はどの国のモノより早く自分達をフェーン帝国領に運ぶ。

その日の一番遅い便として入港し、下ろすものを下ろせば彼らは滞在せずに出港する。それは治安の悪いフェーン帝国領ならではで、船上の取引を主とするから。

それに目をつけて町に降りない船員の旅券証を金で買い取り、自分達は別人に成り済ますことに成功した。

メリウスよりも北に位置するフェーン帝国領は少し肌寒い風に包まれている。それが風のせいだけでは無い事も薄々勘付いていた。

街に入ると人は多いのに活気が無いのだ。

フェーン帝国特有の白金の髪に碧い瞳を持つ人種が持つ独特の印象なのかもしれないが……………。

『ラキスは内政、ハクアは外交』

と、幼少時代から勝手に役目が振り分けられていたおかげでかなり諸外国を訪問、慰問させて貰ってきたから分かる。敗戦国でもないのに人の目が死んでいる。

十数年前に革命が起き、前王朝時代の王家の人間が全員虐殺されてからこの国は滅亡への途を歩んでいるように見える。正しき統治者の居なくなったこの国は、軍が率いている軍事国家に変貌を遂げた。

王が統治すれば良いって訳ではないが武力が全てだと思う者に統治されることほど近隣もその民自身も迷惑なことはないだろう。

戦は金になる。だが戦は金をも使うのだ。

明らかに何かに圧迫されている人の目。街に無駄に立ち呆ける子供と年若い女性は特に印象的だった。

無意識にゴクリと生唾を飲み込んだ。

ニコはそんな自分の様子を見て呆れ顔。自分がここを通るって言い出したのに入口で後込みしてどうするんだか…。

「ほ、ほら行きますよ」

「ハクア様、今なら戻りの船に乗れます」

「要らない気遣いです」

「分かりました。…じゃあハク、しっかり胸を張って歩きなさい」

「ハク…って無礼です」

「こんな場所で様付けで呼んだら身ぐるみ剥されますよ。少しはなりきって下さい。貴方は私の弟・ハク」

と言われても呼び付けられて顔が熱くなるのを抑えられない。呼ばれる度に動揺している場合じゃないことも分かっているのだ。

ニコの後ろをできる限り乱暴そうに歩いた。これは歩き姿が美しい過ぎて船上で他の船員に駄目出されたから。

「ハク、手綱を…」

「はい、ニ…おにに兄さん」

なんとか捻り出した『兄さん』にニコは吹き出すように笑って手

綱を自分の手に持たせた。満面の笑みで腕を組むと偉そうに頷きながら言う。

「よろしい」

「兄さん、予定は？」

「宿に。夜営は困るので」

自分が馬に跨がったのを確認するとニコは知った道のように港町の奥へとスイスイ進んだ。：とか知った道なんだろう。

彼は退役して数年は経っているが、遠くない過去に軍部で兵を率いていたんだ。来た事が無くとも街の地理くらい把握していておかしくない。

だからこそこの人がいればフェーン帝国領を渡れると思ったわけだし。

でも真顔で街を見つめる彼を少し怖いとすら感じた。街の人を観察している自分とは視点が違う。人の顔なんかきつと一つも見えない。どこにどれだけの戦力があるか、抜け道、陣形、武力を必死に叩き込んでいるのだ。

分かってはいたが、彼はラキス寄りの人間だ。女王が結界を張れなくなればきつとニコは軍部に戦争に勝つ方法を提案する。しかもかなり強引な方法を。

今はまだ、結界の方がフェーン帝国の力に勝ってるから彼は何も言わずに力を貸してくれるが結界が役に立たないと分かったら自分を利用して革命者となってもおかしくないのだ。

「ニコ：」

「兄さんと呼びなさい」

「にに、兄、さん」

「なんだそりゃ」

彼が無邪気に笑うのを見てホッとした。だが自分の次の質問にまた暗い顔に戻っていく。

「ここに来た事ある、の？」

「：昔、退役前に」

「退役前：」

「もう、昔の話です。軍の守秘義務で任務の内容は秘密です」

ニコは茶化すように人差し指を唇の前に当てて笑った。

その誤魔化し方を見て嫌な予感が拭えなくなった。きっとニコはこの街に来たくなかったんだ。

「軍の守秘義務は国の最高責任者である私にも話せなくなるんですか？」

「今のハクには話せません。後で女王として話せと私に命じなさい」
なんて言うか、珍しい…。

どうにもできない事実と軍規の狭間で辛い顔を見せるニコの弱気な部分。「聞いてくれー！」って彼の心の声が喚き散らしてる。

驚いたが本音が見えて嬉しく感じた。

「わざわざ訊いてあげませんよ。ニコが凹む内容でしょう？私ではどうにもできませんから。でもニコが話したくなったらいつでも私は聞きます。ちゃんと聞いてあげますから、お忘れなく！」

そりゃあもう芝居掛かったぐらい偉そうに言い放った。

ニコはその様子を見て少し考えたように黙る。しばらくして肩を震わせながら我慢できないとばかりに笑った。

馬は、ゆっくりと煉瓦造りの建物の前で停まる。この港町で一番立派な宿と思われるそこは街の人々とは少し違った印象があった。

国の窓口となる港町らしい、格式のある宿なのだろう。入口に出迎えた係りの者が馬を預かり、ドアマンが扉を開く。

「宿泊の手続きをして来ます。ロビーで待って下さい。一人で大丈夫ですね？」

「当たり前です！」

「じゃあ良い子で待っていて下さい」

すっかり小馬鹿にした調子が戻ってきたニコは慣れた様子で宿泊手続きに向った。

係りの者がロビーのソファを親切に案内してくれたのでそこで待つ事にした。そのソファは見掛けもアンティークだが座ってみると

更にアンティーク臭のする：つまり埃とカビに塗れていた。よく見ると、ごてごてと飾られたロビーは貴族階級（かなり勘違いされているだろうが）のためのものか、それとも商談に現われた成金商人の趣味なのか…。

置物や絵が高名な作家のものなのは分かるが統一性に欠ける。で？何？ってカンジ。

高価な金品を飾り立てる事に優越感を覚えているのだとしたら悪趣味極まりない。

美術品を愛でるのは裕福な経済環境のあるもの達の特権って誰かが嫌味で言ってたけど…多分安らげる場所が与えてくれるものなんだ。剣に怯え、魔術に平伏し、圧政に耐えている民にこんな物は必要としない。

だからこんな何でもかんでも積み上げて古美術品のトータルポールみたいなのが出来上がるんだろう。ソファに触れてる部分がむず痒くなって立ち上がり地団駄踏んだ。

手入れしないとただの古家具です。ただの虫食う中古品なんです。

「ハク？どうした？？」

「二：兄さん」

「行くよ」

ベルボーイに荷物を預けようとしたらニコに横から奪われた。ボーイを片手で払い除け、チップを差し出して構うなとばかりに睨む。

「自分で運べるから大丈夫だ」

「そう：ですね」

ニコは軋む廊下をやはり知ったような足取りで進む。ここにも来たんだろう。

一番上の階の部屋に入ると、少しゆとりのある造りに応接セットとベッドが二つ見えた。

「ニコ：ここで二人で寝るんですか？」

「ハクア様、警備に人を連れて来てませんのでご無礼をお許し下さい。お嫌でしたら私は扉の外にあります」

「…大丈夫です。ベッドは別々なんですからそれくらいは我慢できます」

「キリヤ様より先にハクア様と同じ部屋で休めるなんて光栄ですね」

「最近ニコはヤなことばかり言います」

「それはお互い様です」

彼が家庭教師を改め、自分付きの文官になってからはずいぶん我が儘放題言っている自覚があった。だからその怒った風に言われると何も言えなくなってしまう。

静かにベッドの上に自分の荷物を置き、地図を取り出した。

我が儘は言わないように………と思いつつも口について出てしま

う。

「埃臭い……」

こんなところが生まれついての姫育ちなんだろう。言ってしまったから口を押さえたって全然遅いのだ。

ニコは口元を緩めて、仕方ないなあって……呆れた顔で微笑んだ。「この部屋は一番高い部屋なんですけどきっと普段はあまり客が入らないのでしょう。私達の常識では良いゲストルームの掃除は欠かさないんですが、使わない部屋の掃除をするほどこの人たちの暮らしは裕福ではありません。メリウスはそういう点では恵まれているのです」

「そう……ですな。私もそう思いました」

あまりにも衛生的に良くない環境………戦争ばかりをして国内に設備投資をして来なかった軍事国家に住む民達に同情してしまう。

自分の国でもないのにこんな風に哀れむのはただのエゴだ。神様でもない限り全ての人々を救うことは出来ない。うちの国では財政的援助も出来ないし（むしろ援助して貰いたいぐらいだし）、統治者と戦争してうちの領土化することもかなわない。ただ成り行きを見守っていくそれしかできない。

それが悔しくて………なんとも言えない気持ちがわき起こる。

自分の中に溢れたこの気持ちに名前を付けられなくて、思いの端

を少しずつ零した。

「無知と無力な私ではどうすることも出来ません」

「いきなり……………なんですか？」

「道ばたに子供達が……………」

「物乞いはメリウスに少ないだけでレイバードにもおります。でも小さい子供が娼婦の真似事をしているのは些か見苦しいですね」

「男の子でしたよ」

「お稚児趣味なんでしょう？軍人様達は色々ストレスがあるんです」「買うのは軍人なんですか……………」

「この国の富裕層は軍人ですからね」

「軍人は……………お稚児趣味なんですか……………」

「いや……………ハクア様？全員ではありませんからね！でも……………ハクア様が気をつけて下さい。あなたは今お稚児趣味のタイプと真ん中な格好をしています」

育ちの良いお坊ちゃま的な服はエリシヤの選んだものだがそれが一番危険なのだ、と示した。

女性の格好で行軍するよりはマシで選んだ服だろうがこの姿も、結局危険がいっぱいということだ。

「色々メンドクサイですね」

「ともかく明日の進路を決めましょう。天気は良いようですので明日中に目的地まで一気に進みますから」
慌ててテーブルの上に地図を広げた。

「はい。街道を通っても良いですか？」

「街道でも構いませんが一度だけこちら側の迂回路を……………ここは検問があるので避けます」

すらすらと言うニコの顔をマジマジと見つめた。

「……………仕方ないでしょう？来たことあるんですから」

「ハイ。ソウデシタ」

「でももう十年以上前のことです。変わっていたら後は知りません」
「ニコって……………年は幾つなんですか？」

「…………最近私のことによく興味を持って下さいますね？でも私は詮索されるのが大嫌いです」

そりゃあもう氷の微笑というのが一番近い表現で、真っ向からそれ以上訊くのを拒否された。さっきは「訊いて訊いて！」って目でこちらを見てたくせに少しの隙に完全復活してしまったらしい。やっぱりさつきちゃんと問い質しておけば良かった。

「別に…………。ニコがどんなお爺ちゃんでも良いですよ」

「おじい…………」

「大丈夫です。ニコの方が先に寿命が来るくらいの年齢差だって事は知ってます。安心して下さいね？骨くらい拾ってあげますから」

「そんな…………恐れ多いですよ。主より先には死ねません」

と言って彼は破顔する。先ほどの微笑とは違う種類、彼の本気の笑顔に息を吞むくらい見惚れてしまう一瞬。

どこまで本気が分からない軽口を鵜呑みするほどのお馬鹿ちゃんではない（と思う）がニコのこの言葉は寿命が尽きるその日まで信じていたいと思っていた。

国境線の街・エルラド。

常にフェーン帝国領とレイバード王国の国境線の曖昧な位置にあり、どちらの軍も駐留し一触即発の状態を長く保ってきた安住の存在しない場所。軍人以外は武器商人とごく少数の、鉱山で働く者達しかない。

この場所は貴重なの鉱石の取れる鉱山があるお陰で、もともとはレイバード領だったものをフェーン帝国領にしようと彼らが仕掛けてきたのだ。崩れ始めている関係を考えてもここの守りは特に強化しなければならなかった。

今は辛うじて鉱山だけはレイバード領にある状態。結界が壊れそうなことをフェーン帝国側に知られたら間違はなく鉱山は取られて

しまう。

(…………なのに、ラキス…………これは非道い)

国境線に来て結界そのものを見てみると報告書通り、いや報告書を通り越して非道すぎる。結界は今にも破けそうな薄さで誰がどう見ても無きに等しい。呆然と眺めているとレイバード領から不審そうにジロジロと見られた。警戒されているのだろう。

しかし結界がメリウス専売特許だからってうっかり信じすぎ。ここまでボロボロだったらクレームが付いてもおかしくないのに……余程ラキスの結界に対する口上が巧かったのか？

ニコが肩を叩いた。ジロジロ見るのは同盟国レイバードとはいえ今はフェーン側から来ているのだから気をつけないといけない。

馬を引いて街中に出るとニコは宿の場所まで一気に駆けた。

色々見て回リたかったが、ここの治安の悪さは折り紙付きらしくブラブラしているのも危ないという判断だ。

程なくして宿に着いた。

ここだ、とニコに言われて言葉に詰まってしまった。

服が無闇やたらにはだけた女の人が周りをうろついているのが見える。入って行くのはほとんど男女二人組、もしくは同性カップル。汚いとかボロボロとかそんな言葉で納まらない嫌悪感を覚えた。顔面蒼白でプルプルと小刻みに首を振っているとニコは色々意味を含んだ長めの溜め息を吐く。

きつと色々呆れられているのだろう！生理的に理解するのは無理だ。

「野宿とどっちが良いんですか？」

耳打ちされて反射的に野宿と答えてしまいそうになったが、森の方で男の歓喜に満ちた声や女の色香に満ちた呻き声のようなものを耳にしてまだ壁がある方が收拾付くと思ひ直す。

両方嫌っ！という言葉が無理矢理呑み込んで、涙目になりながらも宿を指さした。

「ハク」

扉の前でニコから手を差し伸べられて、首を傾げながらも右手を預けた。

すると身体ごとすぐ近くに引き寄せられて肩を抱かれると彼の手は宿屋の門を乱暴に開ける。

暗めの受付はお互いの顔を認識させないためのものか……。

キョロキョロしようとする自分を抑え込むとニコは慣れた様子で金を置いた。

「一部屋空いてるか？」

「ああ、ちょうど今空いたよ」

すぐに鍵を手にするると自分を抱いたまま奥に進む。

どうやら受付に顔を隠してくれてるみたいだ。

女だとバレたら面倒なのか、素性がバレないように用心なのか……。部屋に入ると埃の匂いと湿気の独特の匂いが鼻に付く。

何もかも汚い気がして座る事にも臆病になっていた。

眉を潜めて立ち尽くしているとニコがベッドの上に大きめの布を敷く。

「ほら、ここにお座りなさい」

「ニコ……？」

「きつとここら辺まで来たらあなたはそういう反応をすると思ってたんです。エリシャに用意してもらったんできれいですよ。潔癖……とは言わないですが年頃の娘さんにこれはキツイでしょう？」

情けなくて消えなくなった。

結局自分はニコの想像の範疇で行動している。彼は自分が手が掛かるのも全て込み込みでこのお守りを引き受けたのだ。

足手まといにはなりたくないのに……これじゃ本当にただのわがままだ。

ギョツと目を瞑って決心を付けると振り切るように微笑んだ。

「ありがとうございます。もう大丈夫です。屋根も壁もあるのにこれ以上わがまま言えません」

「王族のお姫様に対して、このくらいをわがままだとは思いません

よ」

「でもこれくらいでも手間になるでしょう？ 私が気付かずに変わらなければ確かにニコは簡単に甘やかし続けるでしょうが、それは国民のためにならないのです。私は姫じゃなく、メリウスを背負ってのですから」

「素晴らしいお考えです、が……」

ニコは困ったように笑いながらベッドに座り、自分を呼ぶように横を空けた。隣りに腰掛けるとニコは言いあぐねてるのか頭をかきむしる。

言葉は慎重に選ぶように一つずつ紡がれた。

「私が、嫌なんです。綺麗であるモノがわざわざ汚れてしまう必要は無い。汚したくないモノはあるんです。そのために汚れる覚悟はできてますから」

「ニコ……………」

「ハクア様……………せっかく良い話っぽくムード作っただけから嫌そうな顔しないで下さい」

「だってそれ『世間知らずの方が扱い易い』って言ってるように聞こえます」

「だいたい当たりです」

……………いつも打算的で……………こういう人なのです。

そして焦らなくて良いってことなのだろう。

布の上を失礼して、隣に座るニコの背中に寄り掛かり羽根を休めた。

「ハクア様、休めましたか？」

「ええ、満足です」

「じゃあ要石を探しに行きましょうか？」

「えっ！？ 陽が落ちたのに？」

「陽が落ちるのを待ってたんです。全く……あなたは女王になるための授業一般どこかに吹き飛ばして来たんですか？」

「興味が無かったので右から左です」

「今度からは左に詰め物して授業しますか？」

笑顔が怖くてすぐ謝ってしまう。

「もう忘れません。教えて下さい、先生」

「よろしい。『女王結界』に使う要石は蛍光性です」

「蛍光？」

「夜光ります。だから夜の方が見つけやすいです」

「それは見つけやすいけど敵にもバレバレじゃ？」

「何度も授業をしてきましたが、一番良い反応しますね」

すっかり呆れ顔だ。一応、見直して貰いたくて一生懸命授業の内容を思い出そうとするが全く欠片も頭に残っていなかった。代わりに思い出したのはレイバードの歴史。：女王関連の授業の時はレイバード史を内職してたんだ。

こんな二人きりの場所でそんな事言おうものなら、フェーン帝国のせいにして暗殺され兼ねない。

「エヘッ」

と上目遣いに笑って誤魔化そうとしたら笑い方が下品だと拳が降って来た。拳で済むならその方がマシってものです。

「良いですか？光るのは条件があります。結界力を有する者が近付いた時だけ、その石は光を帯びます」

「つまり？」

「ハクア様はこの前、小石に触って光ったでしょ？」

「えっ？」

「メイリス鉱石って言って、メリウス皇国でしか採れません。鉱山の場所も精製方法も門外不出の結界鉱石です。この石が要石の原料になります」

そう言い、ニコは自分の前にこの間の碧い小石を出して見せた。

この前は自分が触れて光り出した。今はすでに薄暗い室内で、自分の波動と反応してその石自身が光りを帯びている。

「え？…まさかニコ…すでに私が『女王結界』が張れるか検証済み？」

「当然でしょう。国民の未来を歩き当たりばったりで決められません。あなたはちゃんと出来ますよ。私じゃなくこの石が証明してくれました」

「ひ…ヒドい…色々悩んだのに………無条件でニコに私の力を信じて貰えて…」

嬉しかったのに…、とは悔しかったから言わなかった。涙ぐみながら立ち上がるとニコの頭にエルボーをかまして走って逃げた。

「っっ…子供ですかっ!？」

不意打ち食らった上に主人に逃げられたニコは部屋で一人頭を抑えて呻いた。

もう手加減なんかしてやらないんだから。

街は既に陽を落とし、代わりに繁華街の様相に変化を遂げていた。治安の悪さはニコにもここに到着するまで口酸っぱくレクチャーされてきたが、肌で感じると内側に入ることすら嫌悪感を感じてしまう。

気候として寒いわけでもないのにずっと無意識に自分の身体を摩り続けていた。

それでも「じゃあちょっと戻って保護者連れてこよう」って気にならないのはあのニコにしてしまった行為の恐ろしさ故だ。

こんなところに一人で飛び出してきてしまったことも後悔しているが、何よりもニコにエルボーをかまして出てきてしまった事が一番後悔している。後でどんな仕返しを待っているかと考えるとその先の思考をフリーズさせてしまうのだ。

仕方なく選んだ場所は国境線に引かれてる煉瓦造りの塀だった。脆い結界の外側だが二つの国の兵が立っているため自分に変な構いを掛ける人間はいなかった。

ようやく落ち着いてこの街を、この国を、見渡した。誰も幸せそ

うな顔をしていない。こんな辺境地にいるのはきつと下民ばかりなのだろうが……みんな同じ目をしている。

統治者が愚かなのだろうか？ごく少数の市民だと思われる人間の顔色は生きているのが不思議なほど悪かった。きつと国から食料や燃料もろくに届いていない。それでも強制労働のように税は重いのだろう。

女王に就任する前に来ていたら「まあ、可哀想」でそれ以上の思考を展開させることもしなかったのかもしれない。今まで外交で他国を回っていてもそういう風に考えたことがなかったから、この短期間で自分自身が変わったことを思い知らされた。

それでもメリウス皇国は自国をギリギリ運営している貧しい国家だ。他国を思いやってあげられるほどの器量が無い。きつとラキスが隣国に嫁ぎたかった理由ってこういう事なんだろう。

（仕方ない……）

禅問答のような思考にケリを付けて立ち上がった。自国を繁栄させるため、敷いては世界平和の為にもやはりここはしっかりと働かなければいけないのだ。

……なんて大きな事を考えても小心者。ニコのところに戻る勇氣もなく、取りあえず自分自身で石を探すことにした。

国境線上にある要石の本来安置してあった場所を目視で確認する。爆発のような痕跡があり、それが本来安置されていた台座だと分かった。脆い結界のせいで砲撃が入ってしまい、吹き飛ばされたその場所からたまたま要石が外れてフェーン側に入ってしまったのだろう。レイバード側からの搜索は調査隊が済ませている。

しかしずいぶん狙い定めてやったものだと感じてしまった。

ここの要石の大きさは手のひらに収まるぐらいだ。距離のある場所から攻撃して当ててくるにはずいぶんコントロールが必要だ。メリウスが守りに命を掛けているように、フェーンは文字通り『戦』に命を張っている。切磋琢磨……と言えば聞こえは良いがこちらでも何か対抗手段を取らないといつか結界全てが打ち消されるような

解除魔法を発明してくるかもしれない。

とは言っても今のフェーンに結界術のノウハウが伝わっているわけではないのだから要石が吹き飛んで安心しきっているだろう。砦落としてももう少しか思っちゃってるだろう。

首都から本隊が乗り込んできて宣戦布告か？……それまでに結界を復活させてこちら側に何か仕掛けさせないのが世界平和の為なんです。迅速に修復しなければ。

……と言っても自分が出来ることと言えば地面に這いつくばって要石を探すことだけ。あそこから吹き飛んだとして、爆発の規模から言って町中にまで飛んだと言うことは無いはず。だが……自分が近寄りたくない喘ぎ声の上がるあの森の中には有り得るのだ。要石をうまく見つければニコも先ほどのことを不問にしてくれるかもしれないがニコに制裁受けるの以上にあの森に入るのがイヤ！

「うー……結局謝った方が良いよねえ」

分かっては、いる。

結局、保護者不在じゃ作業も進まない。いずれは合流するし。

幼い子供が親に叱られるのを怖がって家に帰らないのと何ら変わらないのだ。自分自身に失望する。自分にとってニコに怒られることと、結界が破壊されてしまうことがどっちも同じくらいイヤっていう身勝手さに呆れてしまう。

（やっぱり謝ろう。時間も無いのに遊んでられないし）

冷静に（なったふり）考えてニコは必要なのだ。立ち上がり踵を返すと街の中に戻った。徒歩で戻るのは少し抵抗あったが（行きは勢いで走ってきてしまったので）護身用に持たされた短剣の柄を握りながら歩いた。

繁華街は酔っ払いで溢れていた。結界の一部が崩れそうなことで既に勝ち戦のつもりなのだろう。街の真ん中で突然演説ぶって打倒レイバードを叫び雄叫びを上げる者達は異様なノリで血を欲した。

（狂っている……）

国民性で纏めてしまっても良いものかは分からない。でもああいう

人間はメリウスにいない。寒気のようなモノを感じてずっと身体を摩ることを止められずにいた。

「寒いのか？」

気配を感じず急に耳元で聞こえた声に身を振った。振り返ると軍人のような格好をした男が血の滴っている抜き身の剣を肩口に振り上げて立っていた。

（き、き、斬られる………！？）

その男が人懐っこくニツと笑った。

「あーワリイ。さっきそこで揉めてたら鞘をどっかに落としちゃってさ、取りあえず剣だけ持って帰ってる最中」

「そ………ですか」

「そー、なんですすよ？ボク、綺麗な顔してるねえ。どっから来たの？」

男が覗き込むように自分の顔に近づいた。その男、黒髪、黒目の容姿はフェーン帝国の人間の特徴とは外れていて、どちらかと言えばレイバードの人間のような顔をしていた。

軍人ならではの実践で鍛え抜かれた筋肉質の男は豪快に笑う。瞬間、腕力で敵わないことを理解してしまったからだろうか？

『軍人』お稚児趣味』という方程式が頭を駆け抜けていく。

声に成らない悲鳴をあげて後ろに尻餅をついた。

「おいお前………」

急に彼の語調が強くなる。それは自分の周りに勝手に出てきてしまった自己防衛の守護結界のせいだったと………知るのは………この後ぶち込まれる牢屋の中で、だった。

世界憲法34条、捕虜の市民権。捕虜はその罪罰が決まるまで人間として最低限の権利を保障する。

自己防衛の結界なんて瞬間的なもので、収まってしまえば自分の小さい身体でどれほど暴れても抵抗のテの字にも成らなかった。握っていた短剣は取り上げられてそのまま牢屋にぶち込まれると先ほどの男が何人かの兵と一緒に話をし、その後はこちらに向き直った。身分証、パスポート代わりになる首に提げたネームタグをこちらに寄越すと先ほどの人懐っこい笑顔とは異質の笑みを浮かべた。

「ハク……って読むのか？お前何者だ？フェーン人じゃないよな？目の色が違う」

「……………」

言うわけ無いじゃん、と思いながら睨んでると顔に殴打された。あまりの出来事に口の中に血が滲むまで状況を把握できなかった。

「そろそろ結界の修復に来るとは思ってたけど、まさかうちの国側から来るとはねえ」

悦の入ったように自分の血が付いた拳を彼は嘗め取った。恐怖で頭がどうにかなくなってしまいそうだ。時々報告のように兵士達が部屋に入ってくる。話の内容から運が悪いことに彼はこの軍の最高責任者であることが分かった。

いや、運が良いのかもしれない。高官なら世界憲法だって理解しているだろう。

「34条……守って下さい」

「ん？…………じゃあお前どこの国のモノだよ」

「……………」

しまったああああっ！パスポート偽造してたら捕虜にすらなれない！

自分の浅はかさに力が抜けた。

分かり易いくらい表情が変わっていたのだろう。男はプツと吹き出し、「頭を冷やせ」とそのまま外に出てしまった。

「あれ？」

なんにも訊かれてない。ただ一発殴られただけ。

短剣は取られたけど服とかはがされてない。手首には手錠がはま

つてるが足は自由だ。頬は痛いし、牢屋の中にはいるが……これはある種の捕虜扱いなのかもしれない。

(ニコ……心配してるかな)

誰もいなくなったところで手首にはまっている手錠を解除魔法で簡単に外し、その場に丁寧に置いてお返しした。

自分の国が攻撃魔法以外の先進国であった事をこんなに感謝した事は無い。そしてメリウス皇国って……ある意味最強？

牢屋すら解除魔法で開けてしまえるのだから。

脱獄したらこの国に長く滞在することは叶わないだろうが、さすがに就任したばかりの女王が他国の牢屋に長居するのは色々問題になる。

「さて……と」

屈伸しながら牢屋の外の扉に立つ警備兵の様子を見つつ手の中に法力を練る。

逃げるより最適な兵法は我が国に存在せず。(残りの兵法は守備に関するモノばかりだし)そして働かざる者食うべからずとは先人の言った 国風を表す諺です。

待っていても誰も来ない。結界術の応用でニコが自分の部屋の扉を吹き飛ばしたのと同じ要領。入り口と反対方向の壁に自分の身体が通るギリギリくらいの風穴を物音させず開通させた。

こう考えてみるとうちの国は敵に回すと怖いなく、とか他人事のように考えた。だって別に軍部でトレーニング受けたわけでもない自分が、敵国の真ん中で簡単に脱獄謀れるわけだ。ちゃんとその気になったら世界征服も可能かも……。

現女王が興味ないのでやりませんけどね。

取りあえずこの状況下で要石を探すことは無理そうなのでそのままレイバードに逃げてしまうのが一番良いだろう。

本当は先ほどの男が上に連絡して本隊を連れて来てしまわれる前に完全に結界を張り直してしまいたかったが、これは取りあえずニコの持つるメイリス鉱石を使って簡易的にでも結界を修復するの

が良い。あとで時間と手間が掛かってもちやんとメイリス鉱石を精製して新たな要石を設置しよう。楽しそうとするところくな事が起きない気がする。

そうと決まったらニコの元に急がなければ。

牢の壁を破った先は丁度建物の真裏に当たる場所なのだろう。異常時でも無いこの時に特に警備兵も見当たらない。そのまま不格好に扉をよじ登り、一目散に繁華街の中を掛けだした。

考えてみると顔を殴打されたのだから腫れ上がっていたのだろう。だが街の人間はそれを特に気にする者はいない。暗いせいもあるかもしれないが金で買われた少年が主人のもとを逃げ出すことなんて、よくある事なのだろう。

必死に走って宿の前に立つ見慣れた美形を見つけた時は、これ以上無いほど嬉しかった。

「ニコっ！」

と抱きつこうと手を伸ばし駆け寄ると、辿り着く寸前で容赦無い拳が落ちてきた。すぐに両側の頬を抓られて引っ張られる。

「い、いひゃい」

「どこをほつつき歩いてたのかなあ？」

美しい笑顔には眉間にくっきり怒りジワが浮かび上がっていた。抓られたまま口をパクパクさせていると急に解放されて右側の頬に優しく触れた。

殴られた方の頬は口元に少し血が滲んでいて、明らかに殴られたことが分かるぐらいに腫れているからだろう。

（マズイ………また怒られる？）

って殴られる覚悟を決めて目を瞑った。だがそれは杞憂に終わる。ニコの腕は自分の身体を優しく包み込み、他に怪我がないか確認するように身体に触れた。

必死な表情の彼を見て思った以上に心配掛けてしまった事に気付いた。危険だった………と言うことに今更気付いた。

そしてニコの腕の中で、彼が汗ばんでいることに気付いた。いつ

も汗一つかかない涼しい顔がきつと町中を走り回ったのだろう。

「ごめん………なさい、ニコ」

「良かった」

届くか届かないかくらいの掠れる声。

腕はすぐに離されて、いつもの距離に戻ると中に入るように促された。だがここに長居できないことも事実。すぐにこんな宿には軍部のガサ入れが入ってしまう。

「ニコ、ここの駐留軍の基地から脱走してきたんです」

「はあ？」

あり得ないとばかりに聞き返された。だが彼も馬鹿じゃない。右頬の殴打の痕が拷問の痕だとすぐに気付いたようだ。

「女性であることは？………誰かあなたの正体に気付かれましたか？」

小声でそう問われた。真剣な表情のニコに事の重大さが伝わってくる。

自分が首を横に振るのを確認すると、そのまま宿の中に戻らずに厩に向かった。荷物は部屋に置きっぱなしだったが取りに戻る猶予も無いと言うことだろう。

自分達の馬を引き上げてほぼ口を交わすことなくレイバード領に向けて走り始めた。自分が先ほど考えたこととニコの考えることはほぼ一致している。

「取りあえず今ある結界を修復させて下さい」

ニコの言う言葉に頷くとメイリス鉱石を受け取った。

国境線の要石近くの結界の裂け目からニコと自分達の馬は先にレイバード領に入る。自分自身は外側から術の掛け直しをして出入りも可能だが術者以外は通ることは出来ない。

ニコが国境を越えたとすぐにレイバード側の兵士達が大事とばかりに駆けつけてきたがニコはすぐに身分証を取り出して自分がメリウス皇国の結界修復士一団だと証明した。

自分はその間にメイリス鉱石と自分の波長を合わせるようにチュ

ーニングしていく。

ニコが目を離れた一瞬だったのだろう。

そして自分は一度ならず二度までも彼の気配を読めなかった。

冷たい金属の感触が頬を伝う。自分が取り上げられた短剣の感触だと気付いた。

深い深い黒を宿す目が近付いて自分の身体を拘束する。最初に会ったときの印象と少し違う、何かを憎むように見えるその瞳。だが彼は間違いなく初めから自分のことを軍に引き渡すつもりでも無かった。引き渡すつもりならあんな簡易的な牢に入れることはしない。そして周囲に兵を隠してきたのならさすがの自分も気付くが、彼は単身でやってきたからここまで自分に悟られなかったのだ。

まだ結界は閉じていない。ここで不利なのは彼の方だ。

ニコが気づき、結界の境を越えてフェーン側に走ってきた。ニコがいる限り自分の安全は保証されている。全く動じずに引導を渡した。

「離して下さい。今ここであなたが何をしたらって不利なことは分かりますね？」

「悪いけど、ボク。結界を張るにしても俺がレイバードに行っただらだ」

「は？」

身体が触れた瞬間、恐ろしい量の光が自分達を包み込んだ。その光が自分の持っていたメイリス鉱石と、彼の胸元から………発せられてることに気付いてハッとした。

彼は紛失していた要石を………持っている、と。

気付けばしっかりと握っていたはずのメイリス鉱石は手の中から消失していた。

メイリス鉱石が失われたのか、自分が消失してしまったのか、理

解に苦しむような状況で我に返ってしまった。

四方が真っ白な世界。

影すら存在せず、それが現実化も区別が付きにくい。そこには自分と先ほどの男だけが存在していた。

意識がないその男が生きているのか、口元に手を当てて呼吸を確かめる。断続的に続く呼吸を確認して少しホッとした。

それと同時に自分とこの男だけが囚われてしまったことに気付かされた。他の音がしない。この小さな呼吸音ですらしっかりとこの耳に捉えてしまえるほどに。

(やってしまった………)

自分があの小石を無くしているところから見てもこれは間違いなく簡易的に封じ込める為の逆結界を張ってしまったのだろう。外に自分の持っていた精製前のメイリズ鉱石を要石代わりに。内側に多分この男が持っている本物の要石を軸に。

精製中だったメイリズ鉱石は基本パターンがまだ刻まれる前だったせいで普通通りに解除したところでそれが効くかも定かではない。でもこの結界術は時間が経つにつれて石の奥深くに閉じ込められてしまうので出るのが難しくなるはずだ。

術式が完成してしまつて本当に封じられてしまえば内側も外側も要石を破壊しなければいけなくなる。どちらか一つでも残さないと今回の修復が出来なくなってしまうのだから早い解除でなんとか収めていくしかないのだろう。

結界の解析を早速始めようと、男の持つ要石を胸元をまさぐり取り出そうとした。

「いゃん」

と、気の抜けた声で彼も覚醒してしまう。正直言って、もう少し寝ててほしかった。

「石を、出して下さい。貴方持ってますよね？」

「石？ ああ………結界石か」

要石をそう呼んで胸元から取り出した。彼はきつとその石がなん

なのかも分かっている回収していたのだ。

「それは私のです。返して下さい」

「ボク……妙な喋り方だねえ。『私』って……」

未だ少年だと信じて疑わない彼は不思議そうに首を捻りながらも、絶対に石を渡さないように手を払った。簡単にかわされてしまう自分が情けないが、この人に腕力で敵う気はしない。

「あのね！元の世界に戻りたかったら大人しく見てなさい！」

「えっ！？見てて良いの？」

門外不出の結果術を……敵国の人間に見せちゃ駄目だろう。

自分の考え無しの台詞に凹んだ。だが「目を瞑って下さいね！」というワケにもいかないのだからこの場合は不可抗力ってやつだ。

仕方なしに……本当に仕方なしにコソコソと解除を始めた。

どんどん深みに填っていく術式との鬼ごっこを始める。空中に三次元になる魔方陣を展開させ、奥へ奥へと進んでいく石の軌跡を追った。

集中しきりたいのも山々だが、国の重要機密を堂々全公開は出来ない。その解除方法をじっと見つめる男の気を反らそうとぼつりぼつりと会話を振った。

「……なんでレイバードに行きたいの？亡命したいってこと？」

「取りあえず亡命は選択肢。内側からじゃこの国は変わらないことが分かった。いずれフェーン帝国に戻って統一するけどね」

「統一？」

「この国は十数年前に革命が起きたの知ってる？」

「まだ……小さかったので覚えてはおりませんが知ってますよ」

「今、国を治めてるのは当時の軍の最高責任者だった連中なんだけど、戦しか出来ない馬鹿な連中でさっ♪」

「……ええ。戦争を吹っ掛けられるのが怖くなった他の国々はみんなこぞってフェーン帝国の傘下に入るか、メリウスの取引国家になるか……。破れない守護結界で周囲を囲まれましたったフェーン

帝国は今やケンカを売ることが出来ない状態になりつつあり、食い
倦ねているんですよね？」

「そーそー。戦ばかりで何かを自分達で産み出すことが出来なくな
ってしまったフェーンは戦勝金無しでは生きられなくなっている。
誰かが変えなければこのまま漠然とした兵糧攻めで白旗挙げなけれ
ばならないだろう？」

「貴方一人で何か起こしたところで変わらないと思います」

「俺一人の力じゃ出来なくても、亡命先で力を借りることだって出
来る」

今のフェーン帝国がおかしい事と知っているから亡命したい。そ
して外側からフェーン帝国を統治し直すと彼は言っているのだ。ず
いぶんと大きな野望だがそんな風に言う人間があゝの軍部にいると思
わなかった。国民全てが悪いとは言わないが、軍に好き好んで入っ
ている人間がわざわざ亡命って……。

「ハクはメリウスの人間か？平和な国は良いな。こんな風に仕事で
家を空けても家族が殺されたりする心配はしないだろう？」

「……普通は家に残ってる方が、旅の安否を心配しますね」
「俺は何処にいたって大丈夫だけど、家族は弱いから外に出ること
もままならなかった。弱い人間だけで残っていたら襲われることも
ある。だから長く家を空けるのは心配で、家族ごと預けられる軍に
入ったんだ」

「なら……」

どうして家族を置いて亡命を？訊こうとして、やめた。

多分彼の家族はもういない。

亡命を考える際に一番ネックになるのは血縁者だ。残された家族
は拷問に掛けられたり処刑されたりするから。だからこそ天涯孤独
になったときには、可能性を考えてしまうのだろう。

「メリウスだって、レイバードだって、当然のように平和が与えら
れているわけじゃない。衣食住を生産するための努力は武力で奪う
ことよりも大変だから……楽園なんて、本当は何処にもないと思

う」

何処に行ったって戦いは続く。心に平穏を作らずに、彼のように何かと戦い続けているうちは本当の幸せなんて訪れっこない。

横でパチパチと手を叩く音が聞こえて訝しげにそれを見た。

すごく感動したとばかりにウンウン頷きながら手を叩いている。

すぐく馬鹿にされているように思えて頬を膨らます。

だが彼はそんな自分を見つめて破顔する。

「いや、最もだね。うちの国のお偉いさんに聞かせてやりたいよ」

「じゃあぜひフェーンの皇帝陛下に宜しく言っておいてクダサイ」

「今は無理だな。母親に何の権力も持たない王子はこうやって辺境の地を領土に与えられて島流しが良いとこナンデスヨ。謁見なんてトンデモナイ。寝首かくときにでも伝えとくよ」

ハハハと彼はあっさり笑った。なんか凄いことを聞いた気がするがつかれて笑った。

……………王子？

「えっ？誰が？？」

「そー、そー。俺一応王子なの。でも王位継承権持ってないぐらい身分低い王子なんだよね。でも母親は前王権の王族の血を引いてるから絶対血統的には最高だと思うわけ！現実には辺境の地に領土ポンと与えられて島流しされちゃったんだけどさあ」

とても王子には見えない無骨な男がそう言った。まだ若そうではあるが……………二十代半ばぐらいだろうか？何十人もの側室を持つと言われているフェーン帝国皇帝の子種が領地の一つを治めていてもおかしくないと思うが……………王族が亡命ってすごい大問題なのでは？ちょっとした親子ゲンカじゃ済まないと思うし。

（どどど、どうしよう……………）

と言っても相談しようにもニコはいない。でも選択肢もあまりないのだ。

不慮の事故って事にして、聞かなかったことにして自分だけ結界の外に出て彼を結界ごと引き渡しちゃうか……………、二人で外に出て

亡命の手伝いをしてあげる。

(まあ、前者に決定ですね)

そんな内部事情は知った事じゃない、と簡単に結論づけて頷くと本格的に結界を解こうとした。

「しかしハクは可愛いなあ。少年に欲情する奴の気持ちは全然理解できなかったけどお前相手なら分かるかも」

そう言っただけの手が自分のうなじに触れた。思わず甲高い悲鳴を上げてしまい、自分も男も固まった。

「お、おおお前……ずいぶん声が可愛いな」

「そ……そっかな？ボク、まだ声変わりしてないんだ……よね？」

「……………」

「……………」

「ウソツケっ！」

そう言っただけ男は自分の胸ぐらを掴んだ。乱暴にされてはだけてしまった胸元からレースの付いた下着が覗く。

「いやっ！」

マジマジと見つめて男はホッとした顔をした。そして哀れんだように服を正してくれるとこう呟く。

「なんだ。お前アレか……身体は男、心は女……………」

どうせ胸がありません！女物の下着を着けた変態趣味の少年だと彼は思い込んだらしい。

手は離せないで必然的に自分の踵が彼の頭に物凄い速度で落下した。

「怒るなよお」

「邪魔しないでクダサイ」

「怒るなよってえ。ハク、人それぞれ色々な個性があるモノだからな？」

「貴方の名前はなんて言うんですか？」

「おっ？俺のことに興味もってくれちゃったカンジ？？嬉しいねえ」
「結界の外に出たら、貴方の墓票を作らないといけませんから」

「うわっ……可愛い顔してコワっ」

ちゃらちゃらしてて軽薄そうに喋るこの男がこの国を変えるなんてあり得ない。さっきまんまと信じてこの人を亡命させる手伝いしようとしてしまった自分を恥じた。

「レイドⅡハワードって言うんだ」

ニヤニヤ（これは主観が入っているが）と気味の悪い笑顔で男はそう名乗った。

ハワードっていうファミリーネームがこの国で何を示しているのか……外交の多い自分に分らないはずがなかった。

『隷属する』って意味。彼の母親は元王族だって言った。十数年前の革命で貴族位を剥奪されて奴隷にされたのだろう。婚姻もなく、無理矢理犯された奴隷の子供が認知されて、国の外れとはいえ領土を与えられるに至るまでどれだけの苦労があっただろうか……。それでも、一生を掛けたって玉座には届かないって彼は気付いてしまったのだ。愚かになりきれずにまだ足掻くこの男を誰が止められよう？

「なんでこの国を変えたいのですか？」

「俺が、これから家族と暮らすのに相応しい場所をここに作りたいと思うのは変なことか？」

その答えを聞いて、この人はきつと：フェーン帝国を変えることが出来る。ただそう感じ、期待をすることにした。

結界を解除する寸前で一度手を止めると、彼に再確認する。

「レイド、ここから脱出します。一緒に来ますか？」

「置いてく気だったのかよ！？」

「はい。足手まといなんで」

「連れられてくってよう」

「だから気が変わったんで連れて行きますって。でも一人増えると結構大変なんです。無理にこじ開けて戻るので二人が離れないように手を拘束して良いですか？」

「真顔で変態プレイの相手させないで！俺以外とノーマルなの」

「じゃあここで野垂れ死んでクダサイ。お別れです」

「冗談です。はい、ゴメンナサイ」

「手を出して下さい」

彼の右手と自分の左手を結界術で離れないように固く封じた。解除魔法が掛かる一瞬の間、自分達には色々な負荷が掛かる。その瞬間に結界術の遣えない彼が自分と離れてしまえば、一生逆結界の結界陣に取り込まれてしまうのだろう。それを防ぐためにも強固に結びつけなければならなかった。絶対にお互いを辿れるように……。

少し離れても平気にするためゴムのように伸縮する拘束結界を良い遊び道具のようにレイドは引っ張った。それが命綱だって事を分かっているのだろうか？

「ハク、お礼に俺が王になったらお前も雇ってやるよ。フエーンに
来い！」

「結構です」

パチンと指を鳴らし、結界を解除した。手のひら大の要石が耐えきれないとばかりに少しすり減り、力を吸い取られるように縮んでいく。それを慌てて回収すると、今度は負荷の波に巻き込まれた。

ストームのように方向感覚すら失わされる術力のぶつかり合いに抵抗できる人間はいない。自分自身は術者だから波動を合わせてるのでそう感じはしないがレイドはきつと負荷に気を失ってしまうだろう。

と、レイドを見ると苦しそうではあったがしっかりと両の足で立ち、その様子を捉えていた。強固に鍛え抜いた身体はその術力にも負けずに耐えたのだ。

（凄いモノを見てしまった……）

魔法に勝つ生身の人間。魔力の大小はあるが、その魔法に対応策無くぶつかっていつて無事でいられる人間なんて聞いたことがなかった。傷の一つも付く様子は見られないのだ。

やがて嵐も収まり、外に出られた。要石は無事で地面に落ちるとそのまま取り込まれて国境の結界を修復させた。

自分の姿を確認したニコは駆け寄ってきてそこで止まる。

そう、彼はフェーン側に立っているのだ。そのまま彼を取り残して結界を自動修復させてしまっていた。もうこちら側に侵入する隙間がない。

「ニコ!ど、どうしよう………一回結界を全部解除させて………いや、私がそっち行けばいいのかしら?」

「落ち着いて!あなたが無事なら大丈夫です。こんなに苦労したのですから結界を解くなんて不吉なこと言わないで下さい」

「ごめん………な、さい」

「このまま同じルートで私はメリウスに戻りますから。あなたはレイバード城に向かってキリヤ様と合流なさい」

「でも………ニコは?」

「足手まといがいなければ半分の時間で戻れます。先に帰って、待ってますよ」

あっさり足手まとい扱いされてしまうと寂しいとか心細いとか……敵陣を一人で旅させるのが不安だとか………そういう類のものが全て吹き飛んでいく。天下のニコ様に対しては余計なお世話なのだったか。

結界内でどれほどの時間が経っていたのだろうか?空は完全に白じんでいた。

ニコは結界越しに安否を確認するようにじっと見つめた。気恥ずかしかったが彼が真剣だったからそれを止めはしなかった。

程なくして腕の拘束結界をニコが見つけて指さした。その先に繋がる例の男を指さして問われる。

「コレは何ですか?」

「あ、レイドが……あの人……」

ニコに言おうとしたらレイドが馬鹿にしたような調子で「ハイ」と手を振った。多分この軽薄そうな感じは彼の本質だと思う。

「あの………ニコ」

「変なモノが付いてますよ。取って差し上げましょうか?」

と……微笑む彼の口元。射るような視線に結界越しなのに本気で身の危険を感じた。

ふるふるとレイドと二人で怯えて首を振るとニコから早く術を解くように言われ、恐る恐る解除に取りかかった。

自分としても早くこの男から解放されたかったし。ニコもその様子をマジマジと見つめる。

女王しか解くことも修復することも、もちろん掛けることも敵わない結界……それが『女王結界』。

……とは言っても自分は女王だし要石が無ければ一般的な結界と何ら変わらない。簡単に考えて解除呪文を呟き、拘束部分を解こうとした。

だが自分達の目にはそこに有ってはならないモノが映った。

腕には精製中だったメイリス鉱石が取り込まれていて、『不完全に絡まり合った女王にすら解けない完全結界』の形で填って………。

「うあああああっ！」

と自分が叫んだせいでニコが結界に張り付いて叩いた。腕を……石の取り込まれている部分をニコに向けると顔色が変わった。

「ハクア様、これ……メイリス鉱石が……」

「解けないいい、解けませええん」

「冗談じゃありません！こんな危なそうな変な男とずっと拘束されたまま過ぎす気ですか？」

「でも冗談じゃなく解けないですうう」

半べそでニコに伝えた。顔面蒼白で色々な解除方法を伝えるニコの姿を半ば放心気味に見つめる。

お荷物背負わされて城にたどり着けるのか？とか……このまま一生繋がれてたらどうしたら良いのか？とか……あのまま結界内に放置するのが正解だったとか……色々な後悔やら反省やら心配やらの思考が占拠されていた。

そんな自分にひどく嬉しそうに繋がれた男が声を掛けた。

「ナニナニいゝ？解けないの？じゃあ仕方ないよね？このまま俺もレイバードに仕方なく行くしかないよね？ね？ね？」

どさくさにまんまと亡命が決まったレイドに二人は重度の頭痛を覚えながら……それでもタイムリミットが迫っていることに気付き、予定通りにレイバード城下を目指すことに決めた。

この状態はやはり女王付きの部下であるニコの失態ということになるのだろうか？かなり落ち込んだ様子の彼に何か言えなくて自分も俯いた。

「下を向くのはやめて、前を向いて下さい。今は……慰められないんです」

そう言いながらニコは結界の透明な壁を思いつき叩く。びくともしないその壁に、ニコは泣きそうな顔で笑った。

「『女王結界』……うまく出来てるじゃないですか？お流石ですね」

手を伸ばせないのは……ニコだけで、自分は通過できる。レイドと繋がっているせいで完全にそちら側に行くことは叶わなかったが、結界に接触しているニコの手を掴むことはできた。

不安を打ち消すように、いや……この旅の成功を祈るように、ニコの手に口付けをしてそっと離して呟く。

「メリウスで……」

彼の解放されたはずの手はそのまま自分の唇をなぞって、離れた。触れる一瞬はお互いの思いが交差するようでクラクラと目眩がする。何も言わずに、そのままお互い背を向けた。

即位式と結婚式（後書き）

なかなかコメントしづらい場所で切ったんだな……と。
もともと章を作って書いてなかったので今更思います（困）

しかし二章めまではまだマシです。

この作品……ラストなんてとこで終わらせるのっ！？

……と思います。

そんなこんな本編最終章の三章目もぜひご覧下さいませ。

一応ハッピーエンドで終わらせているつもりですから（大団円では無いけどね）

女王と家臣（前書き）

読み直して……本当にドエライとこむで切れてるなあ………と半分感心。

女王ハクアのハチャメチャっぷりはここからです。

………というか多分話を構築していくのがめんどくさくなったのだから。

女王と家臣

だが多分この男は未だに自分のことを少年だと思っているのでそう言った意味では安心だし、治安が劇的に良くなるレイバード領に入り先ほどまでのような不安（寒気）は取れ始めていた。

ゴム状の拘束具のお陰で多少の距離は確保できたため、別々の馬に乗れるのでスピードも落とさずに走らせることが出来たのは不幸中の幸い。だがニコの馬をそのまま使っているレイドには困った。こちらに構わずはしゃいで駆け出したり、あちこち見て回ってプチ迷子になったり……。正直言って自分の馬よりも速い脚を持つのであんまり無茶な行軍はしてほしくない。実は彼との旅も半日ほどで辟易していた。

ともかくフエーン帝国にはこういう盛り場が少ないのだろう。街道に出る出店を興味津々で見つめる様はお子ちゃまそのもの。帝国内で剣を突きつけたり、殴ったりした人間と同一人物に思えなくなんだか警戒心も薄れてきていた。

自分も世間知らずではあると思うが、外交生活が長かった分だけ彼より余程旅慣れているのかもしれない。

そんな道中、何より一番困ったのがコレだ。

「レイド……………えっと……………えっと」

「なんだ？モジモシしていると本当に女の子みたいだからやめてくれ」

「ええーっと……………ちょ……………手水に行きたいです」

「はあ？ちようず？」

遠回しに言っても、「何言ってるんだ？」と意味すら伝わらなかったように訝しげに首を捻られてしまった。女性として下品も承知でストレートにもう一度言う。

「お手洗いに行きたいです。次の街で寄って下さい」

「あぁーん？便所お？そこら辺ですればいいじゃないか」

レイドは隣に流れる小川を指さして言った。

その瞬間、頭の中で拘束具を着けたまま二人で並んで川に放尿する姿を思い浮かべた。

それだけはいただけない！自分は女王だし、まして女の子なんですっ！

完全にゴシップ記事に面白可笑しく書かれちゃうような出来事だし、うまく誤魔化せても後で正体がばれたら弱み握られたも同然だ。首を横に振って「もう少し、うん。大丈夫みたい」と空笑い、我慢することを決めた。病気になっちゃうかもしれないけど、この男の目の前で用を足さなければならぬ事態より余程マシだ。

程なくして、城下目前の宿場町・ターシャ。

予定通り馬を走らせてその街に入り、城までの旅最後の宿をとることにした。

メリウスによく似た雰囲気のある穏やかな街並にはホッとする。ここに着くと疲れたのかレイドもさすがに静かになった。明らかにそれまでののはしやぎすぎによるものだ。

宿屋は入り口近くの出発しやすい場所に有り、その宿の前には多分明日自分が乗るための二頭立ての立派な軍馬の付いた馬車が用意されていた。入り口に立つ男が自分達を見つけると即座に頭を垂れて手綱を預かってくれた。

あまりの歓待ぶりにレイドが警戒するように少し抵抗する。

ただの隣国の結界修復士の元にこんな歓迎を寄越してたら官官接待も良いとこだが自分は仮にも（よく扱き使われると自分でも感じるが）女王陛下なのだ。こんなに働いてるんだし労をねぎらってくれるのは当然だ。

自分の国の近衛師団と合流も果たしたことだし、そろそろ手の内をばらすのにも良い頃合いだろう。

「レイド、紹介します。うちの国の近衛師団の皆さんです」

ニコが聞いたら絶対に怒るような紹介の仕方をした。控えていた数名の近衛師団の方が得体の知れない男に後退る。

どういう状況であってもここまで来たら自分が今一番優先したい

のはレイバード城に入ってラキスの結婚式に出ること。

ゴム状の拘束具とは言え彼にも城のどこかで一緒にいて貰わなければならぬのだらう。ついでに言えばもう色々、本当に色々我慢できないのだ。

どうせばらすなら全部早めにばらして、少しでも楽に旅を進めた方がよい。ここから一時間ぐらいで城下町に着くとはいえ、馬車にも一緒に乗らなければならないのだから。

そして彼もちゃんと亡命をするならば彼の身分を考えてもレイバード城で王達に謁見せざるおえない。

「レイド、私はハクア・リムズ・メリウス。偽造の旅券証と偽造のネームタグで入国していて申し訳ありませんでした」

「ハク？」

「ハ・ク・アです。メリウスの女王をしております。こちらの都合で申し訳ありませんが、もう少しこのままおつきあい下さい」

「どういふことだ？女王自らがあんな辺境の地にまで：護衛もろくに付けずに赴いたって言うのか？」

「うちのお国柄、働かざる者食うべからずです。女王でも働きますよ。多少危険でも国民総意で『いつてらっしゃい』って送り出されちゃいました。この後もレイバード城で王太子夫妻の結婚式に国賓として出席するため、とろとろしている時間ありません。まあ、時間があるなら貴方と二人で強行軍組むこともなかったと思います」

淡々と、他の国の人間にはなかなか理解して貰えない国民性を交えてここまで来た理由を説明した。レイドは初めこそ驚いていたがすぐに彼にとって好都合であることに気付いたらしい。ちゃんと亡命し、戸籍を得るためにはその国の王に早く謁見するのがよい。それには自分に大人しくついて行くのが一番だ。

「明日、朝一でレイバード城に入ります。王太子の結婚式を終えたらメリウスに一度来て下さい。拘束具をちゃんとうちの国の結界士達に診て貰って解きますから。その後もう一度レイバードに送りましょう。それまで長くなりますが、このままお付き合い下さい」

「亡命先……別にメリウスでも良いけど」

「駄目です。我が国に他人を受け入れられるような豊かな財政はございません。特に貴方のように軍部にいたような……戦争屋さんは絶対駄目です」

「メリウス憲法か……『戦に関わることを全て禁ず』？」

「ご存知なら話は早いです。あなたはいつかフェーンを治めに戻るのでしょう？さすがに今のあの国を武力無くして統治すること不可能です。それには我がメリウスではお役に立てませんから」

「きれいな事だな。関わりたくないんだろう？」

「はい。できるだけ有事には関わりたくありません。上に立つ者として当然です。せっかくフェーン帝国は自分の国と接点がないのだから穏便に済ませます」

と言い捨てるとレイドは吹き出して笑った。

「良いよ、ハク。協力してやる。でもちゃんと俺を亡命させろよ」

「貴方こそ結婚式でマナー違反とかしないで下さいね！」

「大丈夫よくん！俺様仮にも王子なんだ・か・ら」

とレイドは軽いノリで言っただけで余計なくらいハジバシとウインクした。些か不安も残るが相棒の契約を取り付けたわけだから及第点だろう。

「しっかし……ハクが女王ねえ？女あ？あの胸で？……有り得ねえええ」

と口にしたレイドの頬に自分の拳がクリーンヒットした。

「普通高貴な女性が拳で殴るかっ！？」

「メリウスでは普通です。あと、命が惜しかったらそのことはもう二度と仰らないで下さいね？」

凄味をきかせて微笑むとレイドは右頬を摩りながらウンウンと頷く。

宿の中に入ってすぐに、頼むから少し離れてくれとレイドに泣きついてお手洗いに行かせて貰う。我慢もかなり限界だったので終えたときには「助かったあ……」と思わず一人で呟いた。

だが直後自分の身体に異変が起こる。拘束結界を最大限に伸ばして今までで一番距離をとっている状態だった。

(ち……………力……………入らない?)

こんな……………お手洗いで気をつ失ってたまるかっ! 末代までの恥!

精神力と忍耐力だけで無理矢理身体を動かし、怠いのを振り切ると、外に出てレイドの側へ駆け寄った。

はあはあ、と息を乱して現れた自分にレイドは片手をあげて下品な挨拶を口にする。

「よっ!ちゃんと手洗ったか?」

「……………洗って……………ない」

つつい正直に答えてしまってハツとした。レイドが身体をくねらせて「いや〜ん、ばっちいわ」と揶揄する。

恥ずかしくなって顔を赤らめながら女官がいそいそと渡してきたおしぼりで手を拭いた。

「レイド、私今倒れそうになりました」

「ん?」

「多分この拘束結界のせいです。レイドの身体には何も起きてないのですね?」

「うん。俺元気い」

と両腕に力こぶを作ってみせる暢気さに少し気が抜けた。

「この拘束結界は私の法力を使って伸縮しているみたいなので、あんまり遠くに離れられません」

「へえ。でも男に近くについてって言われるよりえぐれ胸でもよっぱどマシ。あっ!ベッドの中で揉んでやろうか?少し大きくなるかもしれないぞ」

「死にますか?」

「ウツソデース」

近くにいて貰うことは簡単に了承してくれたが……………困った事態だ。

結婚式には参加させずに控え室にいて貰おうと思っていたが、この距離で気を失いかけたのだからレイバード城のどんな近い部屋に待機させていても……きっと長時間は保たない。

従って彼には自分の従者になりすましてでも出席して貰うしかないのだ。

ヘラヘラとおちやらかした彼を見つめると不安は色濃く残る。だがもう仕方ない。式にも隅っここで構わないので中に入って貰う。

………本当はこころで結婚式の参加を諦めるって選択肢もあった、と………気づければ良かったんだ。

一方、エリシヤは大変困り果てていた。

部屋で口をポカンと開けて放心している時があるかと思えば、突然何かを思い出したようにカタカタと震え出す奇妙な貴公子を見張っていないなければならないせいだ。

百歩譲って手を煩わせない分レイバードまでの道程は良かった。

彼がそうなってしまったのはラキスとの対面の瞬間から…。

どうやら彼は色々面倒な事実に気付いてしまったらしい。

レイバードに到着して王への挨拶は素晴らしい出来だった。臣下共々礼節弁えて後から合流する女王に恥をかかさぬように勤めた。

次に各大臣たちへ。すぐく嫌々だったが彼の王子へ、と各主要ポストへ挨拶に回り、最後に結婚式の準備でなかなか時間の取れなかったラキスとの面会が回ってきた。

それはそれは大層心待ちにしていたキリヤは髪の毛を整え、手荷物ワードローブの中から『自然にカッコヨク見える』コーディネートをし、乙女顔負けの準備の長さで本番に挑んだ。

場所は城の貴賓室。レイバードの人間は遠慮してくれた為、メリウスの身分の低い者も立ち会う事が許可された。

みんなラキスとキリヤが逢う事で焼けぼっくり状態になってもら

っては困ると、邪魔をするために特に立ち会う必要の無い者まで自分の仕事を置いて駆け付けた。

この直情型貴公子・キリヤが何かの間違いでラキスに何かしてしまっただけでは遅いので一同皆身体を張って止める決心を付けていた。

……と国を出る前にニコから特に注意を受けていた事項らしい。だがそういう心配は無用だと、ラキス達を良く知る側近質は気付いていた。多分ニコもむしろ面会時の暴走の為ではなく、この後のこの状態の始末のために揃えられていたのだろう。

問題のキリヤを一撃必殺した件はコレだ。

「ハクア！」

と開口一番ラキスはすんごく嬉しそうに笑顔で呼びかけた。

ファンクラブの面々はこの笑顔が見たくてここまで志願して付いてきたのだ。凜々しいいつもの姿に加えて、双子の妹と話すときの可愛さがギャップ萌え。キラキラした笑顔にキリヤも含めてファンクラブ一同キュンと致しました。

キリヤはこの時まで何も気付いていなかったのだろう。『胸キュン』状態から回復すると、すぐに格好付けて振る舞い、「ただいま参上いたしました」とかなんとか……内容はあんまり覚えていないが口上を述べていた。

そんなキリヤを華麗に無視したラキスは、女官達が控えているこちらへ向けて不思議そうに尋ねる。

「ハクアは？」

「今ニコ様とレイバードとフェーンの間にある結界の修復に向かっておいでです。結婚式までには間に合う予定でございますが……」
自分が代表して答えるとラキスは明らかにシュンと萎んだように肩を落とした。

ここでやめておけばいいのに空気の読めないアホ貴公子はリトライする。

「ラキス様は……更にお綺麗になられましたね。でも少しおやせに

なりましたか？レイバードの水があわないのでは？」

哀愁ビームを送り何かを期待していたようだが、そんなものが効果があるラキスならばレイバードのセレブ王子に打算的くら替えなんてしない。

一同頭を抱えたがやつぱり気付かないボケっぷり。つらつらと愛の賛辞を立て並べ、ラキスの機嫌はみるみるうちに悪くなり、とうとうこの台詞を引き出した。

「キリヤは別に来なくて良かったのに」

その言葉によって、彼をなんとか宥めながら連れてきた家臣一同は大切に育ててきた収穫間近の熟れた実を惜しげもなく握りつぶされたような絶望感を味わった。そしてその場で灰となったキリヤはようやくある事実気付く。

ラキスの本命は他でもないハクアなんだ、と言うこと。その事実

に。
あわあわと口籠もり、白目を剥いて倒れかけたところをみんなで必死に支えようと、どさくさに紛れて撤収させた。

それ以来、彼の風が吹けば飛ぶんじやないかってぐらの精気の無さと、時折やってくる自殺衝動を交代制で見張っている始末。

今度こそハクアがなんと言おうと、ニコが何を企もうと、キリヤとハクアの縁談は破談だろう。たつて自分の恋敵と結婚するなんて、ラキス命のキリヤにはあり得ない。

諦めムードの漂う室内で、だが一言言つてやりたい衝動に駆られるのは自分だけだろうか？いやニコも相当嫌っていたし、みんなも相当困っていた。みんな同じ気持ちに違いない。

無理矢理理由をこじつけたって身分の差は弁えなければいけないのだろう……………が自分の仕えるハクアのためにも一言物申すことを決めて立ち上がった。

「キリヤ様！」

「……………なに？何か用？」

「貴方が失恋したのはもうずいぶん前なんです。いいかげん引き摺

るのは迷惑です！あとここで死なれるのもさうとうメーワクです！止めませんか山の中に一人で行って下さい！」

独りで死ねと。

キリヤの表情が凍り付いたのは言うまでもない。

（ハクア様ゴメンナサイ。でもこんな男に貴女様の手を汚すまでもありません。私が代わりにトドメ刺しておきました）

結婚式にはパートナーを同伴させないと主が恥をかく。

遠征軍の中でも一番身分の高いニコの分の礼服は手配しておこう。それが彼女のために自分が出来る唯一の仕事だ、と……エリシャは独りごちた。

祭の前日で賑わう、レイバード城下街。

国境を渡って二日。夜になってようやく見えたレイバード城は小高い陸にそびえ建ち、その建物の荘厳さは世界中で吟遊詩人も語り継ぐ。

美しい白色の壁面は常時ツヤツヤに磨かれており、財政の厳しいメリウスには真似出来ない代物だった。

（うちの城は手入れ不要の煉瓦造りだもの……そういうところが貧乏臭くて嫌なんです）

馬車の窓から城を見上げて溜め息を吐く。今更ながらこの国に嫁ぐ一斉一大のチャンス逃してしまった事実を再認識してしまった。もっと魅力があったなら自分が見初められていて、今頃この城でラキスがお祝いに来てくれるのを待っていたのだろうか？正直あの王子は『ナイ』と思うが……あれはやはり人生が変わった日だった。

取りあえずは明日の式に間に合って少し物思いにも耽れたわけで。深夜、とは言え前日に来られたのだから良し。

予定よりは時間食ってしまったのでエリシャやキリヤは心配して

いるだろう。一刻も早く入城して、出来れば今日中にラキスぐらいは挨拶しておきたかった。

因みに例の男は隣りで爆睡中だ。

『得体の知れない男と女王を密室に二人きりにするのは言語道断！』と、いちいち口煩い古参の文官が束になって説得に來たので面倒だったからレイドには一服盛り、お寝んねして頂いたのだ。彼は普段からあまり葉なんて飲んでいないのだろう。思いの外効き過ぎて、未だに大きないびきをかいて横で寝ている。

意識のない者を運ぶのはなかなか難しいものだが、更に筋肉質で身長もあるレイドはバランスが取れず苦労した。

不精髭を生やして大きな口を開けているところを見ると覚醒はまだ先のようなだ。寝ていれば憎めないヤツなんだが、起きていると相手にするのが怠い。でも本当にそろそろ起きて貰わねばならないので渋々身体を揺すり起こした。

「レイド、起きて」

彼は声に反応して自分の身体を思いっきり抱き締めた。急な強い力に抵抗出来なくて身を竦めていると突然腕の力が緩む。

覚醒したのかと思って身体を放そうとした瞬間彼が呟いた言葉は自分の琴線に触れた。

「ん？……胸無い、間違えた」

ドカッと蹴り、馬車の外に突き飛ばすと、大物のその男は寝ぼけ眼で欠伸をした。

「お・は・よ・うございます」

「ん？なんで俺は外に居るんだ？？」

「起きたなら少し身なりを正して馬車に戻って！城に入りますから」「ん？……ああ……ここが……」

とレイドは険しい表情で城を見上げた。彼はここで全てが決まるのだ。思いもひとしおだろう。

「行きましょう」

と呼び掛けると、不適な笑いを浮かべる。まるで天下でも取ろう

といったような野心家の瞳……この男の表情はラキスにそっくりなのだ。

自分の連れである間はまだハメを外してほしくない……等という自分の日和見思考は、きつと黙殺されているのだろう。どれだけ口うるさく言ったってこの男はやる。片時も目を離せない状態にあることを再確認してしまった。

頼りのニコはフェーン帝国領に居るし、自分自身が一番信じられる状態なのだ。

二人が馬車に戻っても一向に走り出さなかったので、身を乗り出して外に座る御者に尋ねた。

「何かあったのですか？」

「橋に……人だかりが……」

と深夜なのに大渋滞しているいる城までの道を指さした。

そこにはまるでラキスの模造品のような格好をした少女達がいっぱい。そしてあのボケ王子と同じような面構えの男達がいっぱい列を作っていたのだ。

近衛兵達がかき分けて道を作ろうとすると「列を割り込むな！」と牙を剥いたようにこちらにヒステリックに掛かってくる始末の悪さ。つまりこの人だかりは明日結婚を控えた二人のファン……いや、ラキスの追っ掛け……いやラキヲタ達だ。

バリケード張りに押し問答をするが一向に通して貰えず時間だけが過ぎていく。

実姉はこの短期間で何をしたのか？

何をされれば国民達は他国の姫に対してこんなに熱をあげられるのか？

血が繋がったとは思えない要らぬカリスマ性に毎度頭を抱えている気がする。

「道は……他にないのですか？」

「あるにはあるのですが……少し遠い上に馬車が通れません。馬だけならなんとか……」

「そちらに行って下さい」

そう指示すると、馬車の中でヒラヒラのドレスをおもむろに脱ぎ、直前まで着ていた小姓のような格好に着替えた。下着姿にレイドがピュッとからかうように口笛を吹く。

「貴方も行くんですよ。早く用意して下さい」

「カーッコイイねえい。男前だわ」

「お姫様でいることはやめたんで……それは褒め言葉として貰っておきます」

獣道のような浅瀬と泥炭地が混ざった場所で馬車は止まった。つまりちゃんとした橋はあそこがただ一つで、後は泥まみれになりながらなら川を渡るしかないようだ。ドレスから着替えて大正解だ。申し訳ないが近衛兵から馬を借りるとレイドと二人で馬を思いっきり走らせた。

城は見えている。だが表側の参道に続く大きな道は、先ほどのような人々がひしめき合っていて前に進むことが困難になっていた。何度も何度もコンパスと市街地の地図を確認し、右へ左へ小径に馬を走らせた。

ここまで来て城に入らないわけにはいかないのだ。

ラキスが待っている。キリヤが待っている。約束したのだから。

息が上がり、汗と泥まみれになりながらも、二人はようやく城の裏側に辿り着いた。

門番の兵士たちは自分達の格好を見て素直に通してくれず、（ニコの言うとおり輿に乗らずに入国してくる国賓なんてあり得ないだろう）審査をするために門の前で待たされることになった。

メリウスの人間に取り次いで貰えたら、きっとすぐにキリヤが半べそかいてやってくる。「遅い！」って怒られるのだ。

安心して力が抜けたのか……それとも不完全な結果を張り続けている負担からか、馬上からそのままバランスを崩した。

「おっ、これ便利！」

レイドは軽々と拘束具を引き上げるのに使った。拘束具と彼の手

でそのままゆっくり馬から降ろして貰う。

「ありがとう」

「ドウイタシマシテ」

そうこうやっているうちに城壁に朝日が当たり始めた。美しく輝くその城を見つめて式の前に少しも休めなかった事実を知る。このまま式に出たら最中に爆睡しそうだ。馬車の中で爆睡していたこの男が羨ましい。

「一時間でも寝たい……………」

「なかなか入れないのね？ハク、本当にメリウスの女王なの？？」

「失礼です！」

「百歩譲ってお忍びでうちの国に来てたことは目を瞑りましょう。でも馬に乗って泥だらけで街中走り回るし、兵士に信じて貰えないで待ちぼうけ食らう女王なんて聞いたことないし」

「うゝ……………良いんです。私は自分の足がありますから行ける場所にはちゃんと歩いて参ります」

「ふゝん……………しっかり良い女だね」

レイドはそう言って笑ったように見えた。日の光の角度が変わり、丁度逆光になってしまったのであまり表情が見えなかったが……………。

城門の方に動きがあったので会話は中断される。

出てきたのはキリヤではなく予想に反してエリシャと数名の文官だけだった。エリシャは自分の顔を見るなり泣きそうな顔で跪いて、地面に付くぐらいの勢いで頭を下げた。

「ご報告いたします」

「エリシャ、どうしたの？キリヤ様に何かあったの？？」

「私が付いていながら申し訳ございません」

「え？ちよ……………エリシャ？」

「キリヤ様はもう式に出られるような状態ではございません。朝からずっとアルコールを召されて部屋から出てこれなくなりました」

「何言ってるの？ここ……………メリウスじゃないのよ？」

「私が……………余計なことを言いました。罰は国に戻ってから受けま

す。取り急ぎ一緒に出席されるパートナーとしてニコ様をご同伴下さい。その為の衣装は用意しておきました……………あれ?? ニコ様は?」

チーン!

鎮魂の鐘の音が頭の中に鳴り響いた気がした。

八方塞がりとはこの事か!?

初めから強行軍で来ようなんて計画しなければ良かったのに。だが同時にキリヤだけで来させなくて良かったと……………今自分がレイバードに着けたことを感謝し、自分を褒めた。多分メリウスからの従者全員が女王が間に合ったことを神に感謝している。

「私は約束……………守ったのに」

と苦虫を噛み潰すように呟いた。エリシャはそれを聞いて一瞬頷き掛けたが、すぐにキリヤにフォローを入れる。

「でもキリヤ様はともにご立派に挨拶を済ませておいででした。ハクア様との約束通りに……………でもラキス様と面会してからちよつと……………」

「そう……………そうよね。分かった。後はなんとかする。ニコね……………ニコはここには来ないの。ちよつとした事故でフェーン帝国領からそのまま帰国したわ」

参ったとばかりに頭をかきながらそう言った。それを聞いていたレイドが自分の肩をツンツンと人差し指で突く。振り返るとニコニコしながら「オレオレ」と自己主張される。すっかり忘れてたので目から鱗状態。マジマジと彼を見つめた。

「エリシャ……………ニコの服を用意したのよね?」

「はい……………ってかこの人誰ですか?」

「フェーンの王子様らしいです」

「はあ?」

首を傾げるエリシャを尻目にレイドの身体をぽんぽんと触って確かめた。多少レイドの方が大きいがこれぐらいなら大丈夫だと確信する。

うんうんと頷いてエリシャに告げる。

「何を言ってしまったかは知りませんが、私はキリヤの弱さを知っています。エリシャ、この男はレイド。ニコの服を着られると思うので、今の小汚い格好を見られる状態に仕上げて下さい。うまく仕上げてたらこの件は免罪と言うことにします」

「ハクア様、そんな……私許されにくいくらい本当に非道いことを言いました」

「キリヤが本当に打たれ弱くてヘナチョコだって言うことも分かって、みんなに押しつけたんですから。こちらがお礼を言わなければいけないくらいでしょう？」

「で、でも……」

「私に悪いと思うなら、キリヤに負けないような同伴者に相応しいちゃんとした身なりに、仕立てて下さい。あっ！この男も相当セクハラでメンドクサイですから十分刑罰です」

「ハクア様あゝ！ラキス様の次に大好きです！！一生付いていきますから！」

「時間もないことだし。さっ、準備をしましょう」

強気に笑うことは自分も周りも勇気付けると言うことを知った。

ここまで来たら弱いままではいられない。それを本当はキリヤにだって分かって欲しかったんだ。

ここに出席せずに逃げ出したキリヤの贈ってくれたドレスに腕を通すのは、まだ多少の違和感があった。きっと未だにラキスが他の男のモノになることを受け入れられないのだろう。それでも無情に式のまでの時間は迫っていく。

隣の控え室ではエリシャがレイドの着せ替えをしている。拘束具をみつめて溜息を漏らした。準備を頼んだとは言え、平民のそれに限りなく近い生活を送っていた彼に、生粋の貴族であるキリヤの代

わりが務まるとはとても思えない。そして未だにキリヤを信じたい自分が居た。

祈るように手を組み合わせて目を瞑る。神にではなく、人に……だ。今ここにキリヤをつかわして下さい、と。

ゆつくりと目を開くと背の高い男が颯爽と自分の前に現れて跪いた。誰だか一瞬判別が付かないほどその姿勢は綺麗なもので、体格からも、服装からも、ニコが歩いてきているのかと錯覚した。

「……………レイド!？」

「お迎えに上がりましたよおん、お嬢ちゃん」

と人を嘗めた口の利き方は健在。後ろに隠れてたエリシャが辞書のように分厚い本でスパンツと良い音立てて殴り飛ばした。

「ハクア様、少しだけマナーもレクチャーしておきました。いかがですかあ? 私良い腕でしょお?褒めて?褒めて!」

「うん! エリシャ、ありがとう! これで無罪放免よ」

式の始まりを告げる鐘の音がタイムリミットを知らせた。最後まで、キリヤは現れず……………自分の希望は叶えられることはなかった。城の隣に立つ神殿を使った結婚式は厳かに執り行われた。

いつも男勝りの姉もさすがに白のドレスを身に纏い、お淑やかに歩く。

でも王子を見つめるときの顔は主従関係がはっきりしているように勝ち気表情をしていて少し笑えた。

レイドもかなり自分の思っていたよりもマナーを知っていて、ちゃんとエスコートしてくれた。

時々仕草がニコに被るようで、なんだか得も言われぬ気持ちかわき起こる。

多分その礼服のせいなんだろう。

彼の身体の乳香の香りが染みついている、一緒にいるような感覚。でも横を見てしまうとその黒髪・黒目に一緒にいないことを強制的に自覚させられてしまう。ちゃんとレイバードでみんなと合流できているのに不安で胸が波立つのは何故だろうか。ニコにはメリウス

でちゃんと会えるというのに。

いつまでも感傷的になるなんて許されないのに……………。

小一時間の結婚式が終了した。

こんなに関が儘言い通してまでここへ来たのに、ほとんど考え事をしていて終わってしまった。

キリヤに、レイドに、ニコに……………。もしここに来ない選択をしていたなら何一つ悩まなかった事態。

自分は来るべきじゃ、なかったのかもしれない。

「レイド、次は披露宴です」

そう告げて立ち上がるとレイドは自分のドレスの袖口をつかみ取った。

少し広がった独特の袖口には微細な刺繍で美しい花が象られている。

「刺繍糸の色、ハクの髪の毛と同じ色で綺麗だな」

「え？」

「ドレス、似合ってるよ」

レイドに言われて、ついポロポロと涙を流してしまった。

その言葉は彼の口からではなく、キリヤの口から聞きたかった。

このドレスを自分のために用意してくれたのなら、彼に一番に見せたかったのだ。

「おい…………ハク」

レイドは頭の上に手を置くとそれ以上何も言わなかった。泣き出した女を前に慌てる素振りもないこの男はやっぱり自分より大人なのだ。涙はすぐに自分で引っ込めた。

今はまだ、大丈夫。

この男の腕は自分の泣いて良い場所ではない。敵国の人間に弱みを見せてる場合じゃない。

こんな時は、ドレスを自慢げに笑ってみせる誇りを持とう。

「私のために逃げて貰ったドレスなんですよ」

「そう、か」

「レイド、そろそろ行きましょう」

「ああ」

立ち上がり、腕を組み、優雅に歩き始めた。

実は昔からちゃんと教育を受けていたのかと疑いたくなるぐらい、彼は完璧に勤め上げてくれている。ここでの彼は、初めて会ったときの無骨な印象はかき消されていた。

でも時折面白いくらい失敗してるので、間違いなくこれが社交界デビュー。名前を呼ばれてもいないのに自分で扉を開けて入ろうとしてみたり、腕を組んで歩くスピードが異常に速かったり……。なんかホッとしてしまう。だからこそ彼から発せられている優美さや高貴さは彼自身の本来のモノ。彼はきっと生まれながらに王族だったのだろう。

それでもダンスパーティーで踊ることは付け焼き刃の講習では無理だと意見が一致し、自分達は諸侯達への挨拶回りをすることに決めた。

「ハクア！」

知った声が自分を呼びかける。

振り向き様に抱きしめられて、豊満な胸に窒息するかと思った。ラキスだ。

「遅い！」

「ラキス………誰のせいだと思ってるの？」

「あんな辺境の地の結界なんて放つとけば良いのに。どうせ攻めてきたところでレイバードは勝てるよ」

「無茶苦茶を言わないで？ちゃんとレイバードを守る…不可侵という約束は違えませんか。ちゃんと修復してきました」

「うん。エライエライ」

そう言ってラキスは自分の頭を撫でた。

幼い子供のような扱いに不服を覚えるが彼女はそれを正そうとはしない。いつまでたっても自分は妹なのだ。同じ年なのに……。

ラキスはふと気がついたようにキョロキョロして首を傾げた。

やばい……………気付かれたか。

「今日はキリヤは？ エスコート役じゃないの？」

「あ……………彼は風邪をこじらせました。皆様にうつしてしまつては申し訳が立たないので今日は代理を……………」

と決めていた言い訳を口にしてレイドを紹介する。ラキスは少し怪しむような顔をしたがヨロシク、と凄味を効かせて言つて、微笑んだ。

「レイドⅡハワードです。このたびはご結婚おめでとうございます」
「ありがとうございます。メリウスの人間じゃなさそうだな？ レイバードの血が入ってるのか？」

「母方にレイバード系の移民の血が入つてるとか聞きました。髪の色は隔世遺伝みたいです。父は……………現フェーン皇帝です。顔はそつちに似てるらしいですよ」

とカラツと笑つた。ラキスとその周囲の人間がざわつく。まさかこんな場所で正体を暴露すると思わなかった。

文句を言おうと自分が振り返ると、彼は自分の肩を掴んで優雅に微笑んだ。

あまりにも手慣れた仕草に抗うことができず、そのまま誘導されて踊り場に出た。

周囲の注目の的になりながら、マズイという気持ちだけが先走る。手を振り払おうとする度に彼の腕の力は強くなり、身体が密着した。そして決め台詞には頭が真っ白になる。

「こんな自分ですがメリウス皇家との……………ハクア様との婚姻の機会を頂けて光栄です。ラキス様とはこれから親戚になるのですから、長く良いお付き合いをしていきたいと存じ上げます」

「はゝあ？」

自分の下品な声は大きくその場に響いた。

だがその響き以上に、彼の事実上の『婚約しちゃいました』発言は勝手に独り歩き始める。

メリウスまでの帰路は文官達からとくとお説教漬け。

終わるとエリシャにからかわれ、メリウスを出た時ぶりに顔を合わせたキリヤからは白い目で見られた。

百歩譲って文官達からのお小言とエリシャの揶揄は受け止めよう。キリヤからさげすむような視線を浴びる覚えは無い。

さすがにこの行為を良い方に転換出来るほど脳天気では無いのだ。喻え自分が本当に二股掛けていたとしても、今のキリヤが文句を言えた義理ではない。

馬車を別にされて、かなり念入りに避けられてるのは承知していた。(こちらはレイドとくつついていたせいだろうがちゃんとその理由もみんなに話してあるのだ) だからメリウス領に入る直前の宿場町では、宿を取る事が決まると一番高貴な者らしからぬスピードで我先にと馬車から飛び出した。

御者の手を止めて、自らがキリヤの乗る馬車の扉を開ける。従者が開けたと思っていたキリヤは、自分の姿を認識してビクリと身体を強張らせた。

「キリヤ様！話があります！」

「僕にはありません」

「キリヤ＝ライダー！！」

「あなたの顔、しばらく見たくないんです。いいかげん放っておいて下さい」

怒りの…いや、もうそれは憎しみの籠った目だった。

もう…

あんまりな態度に自分はただ黙るしかなかったから。

せっかく解り合えてき始めた関係も、一瞬でラキスにひっくり返されてしまう。

脆い絆だ。自分では駄目なんだということをまざまざと見せつけられて、それでもこの結婚は進めなければならぬのだろうか？

トンと軽く突き飛ばされて後ろに踡踞めいた。その隙にキリヤは馬車を出て宿屋の中に入っていく。彼の後ろ姿に自分の言いたいことを纏めきれず焦って声掛けた。

「私は……ドレスを見て貰いたかったのです。私のためにありがとうって言いたかった。それだけです」

キリヤは自分の言葉を耳にして振り返る。言いながら、泣く事も出来ずに……泣きそうな笑顔を作った。

後ろでずっと見ていたレイドが自分の身体を隠してさらってくれるまで、女王らしく微笑んでいた。

大きな身体が自分を包み込んで覆い隠し、射るような瞳でキリヤを貫く。キリヤはそれを受けて直ぐさま宿の方に入ってしまった。あからさまにホッとした顔をしていた彼にもう何かを期待する気は起きなかった。

「レイド……ありがとう。もう大丈夫ですよ」

「どう致しまして。ハクはよい子だなあ。もっとわがまま言っちゃった方が女としては魅力的だよ？」

いつもの軽口が少し心地好いのは、それだけ傷ついているからだ。

もう少し放っておいてくれたらお望み通りの醜態をキリヤに見せていたと思うのだが……分かって止めたのはこの男。本音を吐けるチャンスを失ってストレスだけ溜まった気がする。怨めしうに見上げると舌を出してイタズラっ子のように笑った。

「これからは俺だけにわがまま言いなよ？せっかく婚約したんだし」

「婚約、してませんし」

「したじゃん？レイバード王家の皆様の前で！」

「あれは無効ですよ。ちゃんとラキスが気付いてたわ。誤解だって執り成すって言うてくれた！」

「俺の嫁になれば苦労させないよ？」

「すでに気苦労させられてますから！第一、天地がひっくり返されても嫁には行きません。我がメリウスは婿養子のみ受付中です」

「じゃあ婿になってあげる！」

「結構です。既に仮予約入ってます」

「でもマジでさく、あんな男と結婚するよりは俺のが余程良いと思う。俺の嫁になっちゃいなよ」

目線を合わせてそう語りかけられると、心も揺れる。彼は彼なりに本気なんだろうけど。

婚約者と痴話喧嘩してる独身女王なんて一番付け込みやすいだろうし。この人はラキスと同じタイプの野心家なのだから。

「間に合ってます」

キッパリと言った。

確かにレイドは敵国とは言えフェーンの王族なのだからメリウスの諸侯達を納得させるのは楽だろう。だかしかし！こんな狂犬を飼っていられるほどメリウスは豊かな国では無いんです。

言い寄られて悪い気はしない。ラキスと並べて見比べても、なお自分の方が好きだと言ってくれてるのだからすごく好印象。顔形も別段悪くはない（容姿は未だにニコ基準）。

でも恋はそうやってするものではないし、条件だけで選ぶなら、やはりまだキリヤが上だ。

「だってレイドは私のことを好きではないでしょ？考えがあまりいと言われますが、私まだ若いので道を踏み外すなら本気の恋にしますし」

「俺はハクがメリウスの女王じゃなくても口説いたよ」

「なんで？」

「本気で自分の魅力が肩書きにしかないと思ってるのか？ハク、メリウス皇家なんてものは俺には重たいだけだ。それを踏まえても俺は自分の国の王妃にしたい女を口説いてるのさ。長丁場になっても必ず手に入れるつもりだからそこそこヨロシク」

とレイドの指が自分の額を弾いた。言いたい事を好き放題言われなくても、あんな頑なな態度のキリヤを見られてからでは言い返す言葉もみつからない。

宿に入るとエリシャがレイドとの間に割って入ってくれたおかげで、なんとなく距離が取れた。

この男はちゃんと雄なのだ。安心していると頭からパクリと全部食べられちゃいそう。そんな危機感を自分が抱いていることも有能な侍女はちゃんと分かっている。

このままキリヤのことも、レイドのことも、うやむやに国に帰ればきっとニコがどうにかしてくれると確信していたし…やたら突いて取り返しが付かなくなっても困るのだ。

なんかもう、自分の手に負えないことが多すぎて力の無さに落胆する。

しかもそれが二つとも男性問題ってどういうことなんだか……？
エリシャが広めの部屋のレイドとの間に仕切り板を借りてきて立
てた。

一番の問題はこの失敗してしまった結界術にあると言うことも分
かっているのだ。これがあるお陰でなかなか彼と距離を取ることが
出来ないのだから。

仕切り板の向こう側で見張りの近衛兵と打ち解けて賑やかに話す
レイドのことそんなに嫌いではない。でも何を考えているのか分か
らないときがあるから少し怖い。

溜息を漏らすと室内が少し静かになった。

「ハク？うるさかったかあ？」

「え？あ……大丈夫です。考え事してただけ」

すっかり彼と話すときの口調が丁寧さに欠けてしまっていること
とか……ペースを乱されてることとか……。

自分の事で手一杯なのに、色々考えることが多すぎて嫌になる。
拘束具で繋がれた彼のことは重荷以外の何ものでもないのも事実。
抱え込む許容もないのに、それでも自分は見栄っ張りの如く『ナン
デモナイ』って言い続けてしまうのだ。

ふと腕が軽くなったと思ったらカーテンのすぐ側に気配を感じた。
距離で自分への負荷が変わってくるこの術のお陰で、マイナス思

考気味になっているのかもしれない。

「ハク〜？」

まるで犬ころでも呼ぶようにレイドがこちらに話しかけた。ちょっとムツとしながら返事代わりに腕を引く。

「おっ！威勢が良いね。まあ……元氣なら、良いんですよ？」

「なんですか？」

「そっちから負のオーラが漂ってくる。ハクはフェーンで走り回ってたときのが元気で良いカンジだった」

「……そんな、人を脳天気みたいに言わないで下さい」

「なんでそんなツンケンしてるかね？何？あの男のせい？」

そうレイドが言った瞬間に、部屋の隅で控えていたエリシヤが目を輝かせてサササツとこちらに四つん這いのまま駆けつけた。かなり下世話な侍女に呆れてしまう。だがそんな自分にも構わずエリシヤはレイドに質問した。

「レイドさん！それって背の高い白金の髪の毛の男の人ですか？」

「そうそう。目つき悪い人」

「え〜、あの人は普通に愛想良いですよ。レイドさんはいきなり嫌われたんですね」

「え〜！俺初対面の人から受け良いのヨ」

「でも多分……」

エリシヤは唇に指を当てて「う〜ん」と唸った。首を傾げてこちらを見る侍女の視線と会話の内容に肩身が狭くなる。

だがエリシヤが何か答えを出す前にレイドが今度は質問した。

「あの人……ニコって言うんだっけ？何者？」

「名乗る暇もなかったんですか？」

「毛嫌いされたのかなあ？最後まで存在無視されたカンジだったけど」

「ああ、そういう意地悪しそうです。あの人は女王付きの補佐官ですよ。護衛官の役割も果たしてます」

「婚約者の一人とかじゃないの？」

「フェーンでは知りませんが、メリウス皇国内で約束であっても重婚をしたら罰せられますねえ。だからレイドさんもまんまとハクア様の婚約者にのし上がるためには、まずキリヤ様に降りて貰わないと………っ」と

エリシヤはそこで言い過ぎたことに気付いたらしい。「キリヤを傷つけたのは自分だ。罰してくれ」と言っていたエリシヤの立場としては少し気を配らなければいけない柔らかい部分なのだ。

口許を抑えて「申し訳ありません、軽口が過ぎました」と小さくなっていた。

本当は誰がどうか、あんまり関係ない。

「レイド、私は今のメリウスが好きなんです。何度誘って頂いてもフェーンに行く気はありません。以上。オヤスミナサイ」

そう言い切って外部と遮断するように周囲に目眩ましの結界を張った。

こんな状況で寝られるわけないと知りつつも………。

再び国境の街・エルラド。

独りになって一つ集中しなくちゃいけないモノが減って、意識は拡散されていく。

こんなに炭の匂い立ち込める街だっただろうか？昔から知っていたはずのこの街も、初めて来たような感覚を味わった。この街にも国にも良い思い出は無い。早くメリウスに帰らなくては。自分の帰る場所はメリウスの………彼女の元にあるのだから。

ハクアが口付けた右手の甲に彼女を思い出しながら唇を重ねてしまい、後悔した。

彼女はきつと………そんなつもりでやったことではないから。

あのお姫様の行動はただの天然なのだ。あんなの一つ一つ真に受けていたらこちらの身が持たない。

首を振って早足で宿の方へ戻った。こうなったら荷物を引き上げてさっさと帰国をしなければならない。

馬をレイバード領に取られてしまったのが最大の失敗だ。だが馬が二頭あるからこそ、ハクアを行かせた。もしもハクアに一頭しか馬がなかったら……あの男と二人乗りなんて事になったら………

グシャ……と音を立てて街の地図を握りつぶした。

苛々してしまうのは何の感情だかあんまり気付きたくない。

もう一度首を振って宿の部屋の扉を乱暴に開いた。

「うわっ！」

と、中から三人の子供達が自分の荷を囲んで立っていた。

置き引き犯にばったり出くわしてしまったのだ。これだから治安の悪い宿をとるのは嫌だ。

だが自分達は結界王国・メリウスの人間なのだ。何も無しに部屋を空けるような事はしない。

恐らくさっさと荷物を持って逃げる気だっただろうが、結界に阻まれてどうするか困っていたところに出くわしたのだろう。「やっべえ!」「逃げろ!」と口々に言っただけで逃げようとするのをちゃっちゃとお仕置きすることにした。二度とこんな旅行者に手を出す気が起きないように再教育してやる。今ちょうど虫の居所も悪い。

持っていた護身用の短剣を壁に投げつけ、それを中心軸に術を發動させる。

三人はその術の中にちゃんと引っかかり、剣から放たれる炎に叫び声を挙げた。

もちろん子供相手に（十分に大人げないが）そんなに無茶はしない。火力は衣服が多少（!?）焦げる程度だ。

手を出す相手を間違えてしまった不幸な子供達にじつくりと説教をしているほど時間もないのでそれで十分だったが、丸坊主ぐらいにはしてやろうかと壁の短剣を抜いて持ち替える。その仕草で不必要に恐怖心を煽ってしまったようだ。二人の子供が一番体格の小さ

な子供をこちらに突き飛ばして叫び声をあげて逃げ出した。

(あーあ……………)

残された子供は恐怖で歯の根がかみ合っていない。カチカチと鳴る歯の音で嫌な記憶区が蘇る。自分の昔の記憶を掘り起こされるように、その少年の怯える瞳を見ているのが辛かった。

(あれ?)

ふと気付いた。この少年、見覚えがあったのだ。

ハクアが少年が売りをしていたとショックを受けていた。その時に見かけた覚えがある。

「お前……………」

「ひゃあっ！打たないで！」

女の子のような甲高い悲鳴を上げられてしまい興ざめた。溜息混じりに結界を解いた荷からハクアの服を差し出す。

「悪かったね、少しやり過ぎたよ」

と微笑むと彼は掠れた小さな声で『天使様?』と呟いた。フラッシュバックする……………ハクアが自分を見つけたあの瞬間。痛かった、辛かった、怖かった生きてること全てが嫌だった時代。気分が悪くなり、その場に膝を付いた。

しばらく胸のつかえが取れなくて、何も吐く物なんて無いのにずっと嗚咽感に悩まされた。まだ全然過去に囚われている自分にも吐き気がする。

どれくらい時間が経ってしまったのだろうか?

あの子供だってもう逃げただろう……………そう思っていたときだ。

絞りの甘い布巾を自分の頭に乗せてきて心配そうに首を傾げる小さな手。

目を見開いて問いかけた。

「お前まだ居たのか？」

「……………帰る場所、ない」

そうだ。先ほどこの子は仲間に捨てられたのだから。

帰る場所をこの子供から奪ったのは自分以外の何者でもないのだ。

「悪かったな」

「な、にも……ようふく、ありがとう」

「ああ、それはやるよ」

布巾を絞り直して顔を拭くと、すぐに荷物を纏めて旅立とうとする。急ぐ旅だ。彼に構っている場合でもないし、ついでに長居したくないのだ。

だが何か後ろ髪引かれる思いをして、彼に問いかける。

「荷物持ちの従者がいても良いと………思うんだが、来るか？ 私は人使いが荒いが………」

「い、いいの？」

「ああ。しっかり働けばちゃんと金も出そう」

至福の笑顔っていうのはこういうのを言うのだろう。眩しいほどの笑顔を子供は見せて自分の手から身体に余る荷物を受け取ろうとした。

言っている意味は分かっているらしい。ちゃんと頭の回る子供だ。

「名前はなんて言うんだ？」

「セン」

「良い名前だ。私はニコ」

「ニコ様？」

「ニコで良いよ」

そう言いながら彼の頭を撫でた。撫でて、固まる。

「お前………なんだこの頭はっ!!?」

ベツトベトに泥やら汗やらで固まりつつあった頭をガシッと掴んでその場にあった布巾でゴシゴシと擦る。まさかと思いつながらハクアの服に身を包んだ身体も剥いてみると垢にまみれていた。

「新しい服を着る前に身体を洗え!!」

服のままセンを浴室に放り込むと念入りに身体を洗い流した。手の掛かることこの上ないものを拾ってしまった気がする。だが彼は自分で身体を洗うと言うことも出来ないのだ。結構目の粗いブラシでゴシゴシ擦ってもまだ出てくる垢に驚いた。立ちんぼをやっつい

たぐらいいだ。身体を売って生きていたはずなのに……それだけこの国は荒んでいると言ふことなのだろう。ウリの少年なんて別に洗う必要もないのだから。

ハクアじゃないが涙が出そうになさった。縛った後や行為の跡が体中に付いている小さな身体に、行き場のない怒りが吹き出してくる。

「ニコ？　なんか痛い？」

「え？」

「痛そうな顔してる」

「痛いのは」

お前だろ？　言おうとしてやめた。痛みが麻痺して分からないならその方が幸せかもしれないのだから。

もう一度新しい服を着せて、持っていたパンを彼に与えると顔色が少し良くなったようだった。

元々きれいな顔立ちの少年は、磨くと更に美しかった。汚れてくすんでいた白金の髪の毛も、白い雪のような肌も、これなら確かに多少汚くても客は付くはずだ。

ただウリをするにしても、もう少し相手を選んでも良いと思う。それすら判別が付かないくらいに彼は教育を受けていないのだ。

「行くぞ、セン」

「は、はい」

大きな荷を持つとうとする彼から鞆を奪うと、元々のハクアの持っていた小さな鞆を投げやった。ハクアの服しか入っていないので置いていこうと思っていたが彼の着替えに丁度良いだろう。

くれてやるつもりでそれを渡すとキョトンとした顔で首を捻った。「……それを、持て。大事なものだから無くすなよ」

と、仕事の責任感を持たせるための嘘を吐いた。

嬉しそうに、大事そうに鞆を抱えるとチョコチョコと後ろをついてき始めた。

いったいどうしたものかな。

自分一人の方が絶対楽なのにワザワザお荷物抱え込んで、自分は
何をしたいのだろうか？

それでも見捨ておけなかったのだ。

女王の遠征軍は次の日の午後にメリウス城に戻ってきていた。

お淑やかなドレスを着用したまま入城すると諸侯達が少し驚いた
顔をした。そういえばこのところ城でドレスを着ていない。

更に自分の手に繋がれた男を見て一番驚いたのだろう。

下世話な人はこう噂するかもしれない。

『女王が隣国から犬を繋いで帰ってきた』……と。本当に繋が
れて大人しくしているような犬ならそんな噂も我慢して受け入れよ
う。残念ながらこの男は肉食獣の部類だ。

そしてそんな事よりも自分には大問題が積み上げられていた。

「え……………？もう一度初めから言って下さい」

「はい。ハクア様からは先にご連絡頂きましたが、申し上げたとお
り、まだニコ様は帰っておられません。そして一度もこちらへの連
絡ありません」

ゴクリと咽が鳴るのが分かった。

早馬を寄越さない理由は分かる。ニコは自ら馬を走らせて帰って
くる方が伝令よりも早いと思ったのだろう。特に兵を連れて行って
いるわけでもないし…………。

帰国出来ないその理由は…………。

ちらっと手に繋がれたままのレイドを見やった。

「レイド、あなたが基地から消えて問題はありますか？もしかして
既に開戦準備をしていたのでは？」

「開戦準備…………とまではいえないが、結界に異常が出ていたのは
本国に報告が入ってる。加えて部隊長だった俺が行方不明だ。戦争
を吹っ掛ける要素は揃ったのかもな」

「そんな……あ」

「あの男なら大丈夫じゃないの？ ついでにこの国が戦争吹っ掛けられる心配もないでしょ？」

「何を根拠に……」

「あるでしょ？ 根拠！」

「無い！」

「ハク、結界張り直してたじゃん。あの男はフェーン帝国の人種によく出る身体的特徴を持ってるからそうそうメリウスの人間だとは疑われないだろうよ」

なるほど……と納得いった。この件ではなく、ニコがスパイ活動のような行為をしていた理由だ。確かにニコの身体的特徴は、赤毛・茶目の多いメリウスではなく、白金髪・碧眼のフェーンの人種。こればかりは生まれたときに貰ったものだ。

ニコのこと何も、知らない。でも少し気付いてしまった。

「ニコは……フェーン帝国の人間なのですか？」

古参の文官が自分の問いに複雑そうな顔で頷いた。

「覚えておられませんか？ ハクア様が小さな頃、レイバードの地方に慰問へ向かったときにニコ様を見つけられたのです」

「え??」

「今回向かったエルラド辺りの交戦地帯で負傷したニコ様を見つけたのはハクア様です。そのままメリウスへ亡命し、ディセール子爵の元へ養子に行きました。我が国に長く仕えていましたが……」
彼は、もう戻っては来ないのかもしれない。文官は敢えてそこまですわらずに目をそらした。元々ニコはそこに居たのだから焦って戻る必要もない、と。

肩の震えが、止まらない。

「ハク！」

気付くとレイドの顔がすぐ近くにあって、心配そうに自分を覗き込んでいた。それだけ自分が参っていると言うことを自覚する。

「迎えに……行きます。私が……私のせいでフェーン側に置き

去りにしてしまったのだから」

自分の言葉に大臣や文官達は口々に反論し、味方する者は誰一人いない。

「女王が自ら向かうなんて有り得ません！」

「ニコ將軍はちゃんと戻ってきます」

「ハクア様の代わりにちゃんと迎えの者を出しますから、冷静になつて下さい」

当然だ。こんなの我が儘以外の何ものでもない。国のためになることは一つもない。公人は自制をしなければならないのだ。

自分を抑え込んで微笑むと、ワカリマシタ……と言った。

なんかマリオネットにでもなった気持ち。メリウスの国のプレッシャーが言わせてる感覚。

未だに出てくる『良い子』の自分に、吐きそうだった。

幾ら考えても納得なんてサッパリできない。

自分の責任でニコに負担を掛けたのにどうしてここで黙っているのだろうか？

彼が帰って来なくなるなんて事態は、女王ハクアにとっても、一個人のハクアにとっても有り得ないのだ。

腕に付いてる拘束具を思いっきり引っ張った。すでに城が静まり返っている深夜帯だ。レイドだって寝ているだろうとは思ってた。

だが同時に今絶対連れて行く必要もある。だって自分達は今一心同体なのだ。変な意味じゃないけど巻き込まれて頂く。

「あれ？起きてたの？」

隣りの部屋から出て来たレイドはすでに身形を整えていて拍子抜け。しかも今から寝る、ではなく今から出掛けるような雰囲気だ。

「行くんだろ？」

「うんうん！ついて来て欲しいの」

「チラッと会ったけどあの時一緒にいた男だろ？」

「うんうん！ニコって言うの」

「補佐官だって？」

「うんうん！」

「で？ハクの何？」

「：補、佐官？」

「じゃあちゃんと俺のことを婚約者として紹介しろよ。そしたら黙ってついてってやる」

「黙ってついてきてくれるんですか？」

「ちゃんと約束守れば」

「そんなの簡単です！婚約は後から解消しますし！」

「お前何にも分かってないな」

彼の吸い込まれてしまいそうになるくらいの漆黒の瞳が妖しく光った。

カタン：と物音がして振り返ろうとした瞬間身体ごと持って行かれる。

「っな！」

唇を無理矢理奪われて、鳥肌が立った。我に返って彼の頬に手をあげる。

彼はそれをあえて避けずに受けて、ニッと意地悪そうに笑った。

思い知らされてしまう、男女の力の差。これは貞操の危機だ。

「さーて！手付けも貰っちゃったし行きますかね！」

「いや：やっぱり」

「今更後込み？」

「だ：誰が！？」

そう来なくっちゃ、とばかりにレイドは自分の身体を担ぎ上げておもむろに窓から飛び降りる。そこは二階とはいえ、普通の家屋よりは高さのある城のバルコニーから飛び降りたのだ。突然のことに悲鳴を上げそうになるが、必死に堪えて口を押さえた。

確かに外へ出る最短ルートだし、自分を担いで飛んだ割にへっち

やらの顔をして歩き出すこの男は間違いなく最強の協力者になり得る。

地面に降ろして貰うとそのまま手を繋いで走り出した。

手と手を取り合つての脱走なんてすぐく懂れていたが意外と内情はきれいでない。

手を握つてると走り辛い。見つからないようにしなければいけないし、レイドとの体格差も、体力差もあるが彼は全然手を抜かない。はあはあ、と息が上がっているのを見ると彼はニヤニヤして「キス一つで担いであげよう」とか「お姫さん、スピード落としてあげようか?」とかいちいちからかうし。

こちらに文句を言ってる体力が無いのを良いことに、言いたい放題やりたい放題のレイドをニコと合流したら絶対に殴ってやる!それが自分の原動力の一つになっていた。

レイドは城の馬屋から華麗に馬を拝借。もう一頭自分用に馬を連れようとする引張られて同じ馬上に乗せられた。

「自分で乗れますけど」

「知ってますけどね、これは俺の役得ってヤツ!お触りフリー!」

「そんなわけ無いでしょ!」

自分がどんなに喚いたって構わずにレイドは身体を抱きしめた。だが彼はそれ以上をしない。さすがに『姫』育ちの自分だってキスや抱きしめる以上先に何があるのかだって分かつてる。だからこの密着が自分の為だって分かった。

腕に付いた拘束具は馬上ならやはり距離が離れてしまう。わざわざそこで体力を消耗することは無い、と言うことなのだろう。

でもニコイは嗅がれる。

首筋に、髪の毛に、クンカクンカと鼻で嗅ぎ回る様は犬みたいだった。

「それ……やめて下さい」

ニコのニコイを嗅ぎ回ってた自分を棚に上げて言った。でもニコのニコイ……好きなんだもん。

「気になる女のニオイを嗅ぎたいって言うのは男として当然なんだよ。やっぱりお前、イイね」

「気になる……異性？じゃあやっぱり自分はニコを親愛じゃなく……」

「フェロモンって知ってるか？あれは求愛行動の一種なんだろ？」

「私はあなたに求愛なんてしてません！」

「そう？すごい強い花の香りするけど？くせになる香り。じゃあ何に発情してんの？」

「……香水です、きつと」

誤魔化しながらも、今日は香水なんて付けてない。

そわそわした。浮き上がるような彼の言葉は自分を酔わす。それもこれも彼の身に纏っている衣服がニコの物だからだ。香りが求愛だというなら、ニコの香りに惑わされている自分はいったい何なのだろう？ニコの香りで自分の中の花を咲かせてるというのなら……。

泣きそうになりながら、むせ返るような甘い香りに酔わされていく。

「私……好きなんだわ」

自分で言っすーっと納得していくのが分かった。

好きなんだ。

だから迎えに行くんだ。だからこの人やキリヤと結婚することに前向きになれないんだ。

恋してたんだ。きつと会った瞬間から。

父が紹介した瞬間……いやちゃんと覚えていないがニコを拾ったその時から。

天使のようなその姿は誰もが愛せずには居れない。

勝手に涙が出てくるのを止められない。

そんな自分の様子にレイドが首を捻っているのもお構いなし。彼の腕の中で「よっし！」と気合いを入れた。

「もしもし、お嬢さん？もしかしてなんか結論出ちゃった？」

「出ちゃいました。ありがとう」

「いや、お礼言われると複雑。マジで口説いてたんだし」

「レイド……女性経験豊富な人と話していると勉強になります」

「何その勝手な決めつけ！俺超マジメ！超実直！浮気とか全然したことないし！」

「別に複数交際してるかを疑った訳じゃないですし」

「悦ばした女の数なんて男の勲章だろ？」

「……それは……どうなんでしょう？私は自分だけの方が嬉しいです……多分」

「じゃああの『情けな坊ちゃん』のが良いの？」

「キリヤの事だ。ラキスと長く付き合っていたキリヤが女性経験無いなんてあり得ない気がする。そんな風に冷静に思考が巡る自分に呆れた。その感情に結論づける。

「キリヤはビジネスパートナーなんですよ。この国を治めるためには彼以上の婚約者は居ないんです」

「ふーん……王族って大変だな」

「私自身に力がないので仕方ありません」

「力……無いの？ハクはあれだけ走り回って、外交だってちゃんとキリヤがいなくなったらできてたじゃん？なんで？」

「なんで？……って」

自分がなるはずじゃなかったから……と言おうとしてやめた。

いつまでそんなことに拘っているのだろう。自分が座るべきじゃなかった椅子でももう座ってしまったのだ。

もう座り心地も覚えてしまったのだ。ちゃんと自分は女王をやっている。統治出来ているのだから。

「うん。なんか元気でした。レイド……ありがとう」

と彼の顔を無防備に見上げたらまた彼の唇が降ってきた。額を吸い上げられて今度こそ悲鳴を上げる。

「しーっ！静かに。まだ城の側なんだから」

「だ……っ！レイ……っ！もう！次やったらフェーン帝国

領行きの船に貨物として積み込みますからねっ!!」

「照れちゃって! カッワイイ」

馬上で手足をバタバタさせていると自分の気性に煽られて馬が暴れ出してしまう。それをレイドが宥めて続きを走らせた。

狭い半島国家だ。すぐ港の灯台が見えて、レイドも呆れるように「近いな」と零した。

地図で見たって本当に親指の先ぐらいの広さなのだ。もしかしたら彼の持っていた領地の方が広いのかもしれない。

女王なんて、肩書きだけで…………。

「私、まだ若いんです。18歳」

「ん?」

「やりたいことしなきゃ」

「俺も…………とりあえずちゃんと亡命だ」

と彼が破顔した。ゆつくりと馬の上から降りして貰うと港の事務所に行き、フェーンに渡れる船を手配しようとした。

ちょうど荷を降ろしたらすぐに折り返す船が港に着いているとのこと。その船に乗せて貰えるように依頼するとすぐに外に出た。

明け方であるために船は一隻しか停まっておらず、すぐに分かった。

金を積み、また強行軍でフェーン帝国に入国することとなる。

少年ギャングの落ち零れ、センとの旅は一向に進まない。

エルラドを出て三日。

ろくに馬に乗れないセンを連れての行軍はハクアとのそれより遙かに大変なものだった。

よくよく考えてみればあれだけ手の掛からない主人を持って自分は幸せだ。ハクアは自分で馬に乗るし、荷物もさっさと自分で運んでしまう。ちゃんと警戒心もあるから一人にしてもある程度は安心

だが、センは違う。

馬は自分の馬に二人乗りだから速度を出せないし馬も休み休みになる。荷物はブーツとしてすられそうになってるし、警戒心が薄いのかそういうのを引き当ててしまうのかは分からないが、何度か『客』が引つかかっているのを見かけた。お金を出してるところを自分が払い除けるのがある程度の日課になっている気がする。余程お姫様なセンを抱えての旅は難色を示していたが、今更ここに置き去るなんてことも出来ずここまで来た。

唯一の役立つことと言えば、ハクアよりは家事が出来ると言うこと。パタパタと走り回って洗濯したり、簡単な炊事をしたりしている様を見ると無碍に扱えなくて……この国から連れ出してあげることも出来ないくせに自分は酷いことをしているのかもしれない。せめて別れるときに、困らないぐらいの常識を教えたい。自分の道を自分で選べるぐらいに困らないぐらいの金子を持たせたいと考えていた。

自分と同じ世代、三十代半ばぐらいの男だろうか？その日に取ろうとしていた宿の側で男は話しかけてきた。軍人風の男は周りの人間よりも明らかに裕福そうな身なりをしていた。センはその男を見るなりビクリと身体を震わす。

「おい、セン？センじゃないのか？」

「ご、主人様………」

か細い声でセンが言ったのを聞き逃さなかった。

自分は何故考えなかったのだろうか？センはウリをしていたのじやなく、誰かの愛人だったのでは……？と。

「貴様！俺から逃げられるとも思っているのかっ！！」

そう言って手をあげようとしたその男の手を反射的になぎ払ってしまった。

（まずい……）

ハクアじゃないのだからもう少しうまく立ち回らなければいけないのに……。

無理に落ち着かせるように、大きく息を吐き、それでも怒りは収まらずに男を射殺すように睨み付けた。自分の眼光はどれだけ鋭かったのか……？その男は簡単に怯んで何も言わずに立ち去った。

自分が男をなぎ払っているところから見て、武術でも勝てる。魔法でも負ける気がしない。金銭で契約をするにしたって一軍人に動かせる金子なんてたかがしれてるだろうし。

大きく溜息を吐いて顔を顰めていると、センが自分の周りで機嫌を取ろうとしてか彷徨く。日の時にちゃんとフォローできていればセンは変なことを考えなかったのかもしれない。傷ついている子供達がどんななのか、そしてセンの傷の深さを自分は嘗めていたのだろう。

その日の宿のベッドはスプリングの音が少し五月蠅かった。

柔らかめに作られたそれは、明らかに安物の音がする。そんなに良い宿では無いので仕方ないが隣の部屋の音が筒抜けで寝付くのも一苦労だ。

何せ運が悪いことに隣の客は娼婦とその客らしく、音は深夜まで続いた。

部屋の明かりを落として随分経っていたかなかなか寝付けずじいた。

だが、その軋む音はすぐ近くで鳴った。

センがこちらのベッドに潜り込み、自分の下半身に手を掛けようとしていたからだ。

「なっ！」

小さな手の慣れた手つきに彼の今までの生活を垣間見た。

そのまま絆されてしまいそうになるが魔法でランプに灯りを点してセンの身体をはね除ける。

「悪いが……私は男とどうなる趣味はない」

センは驚いた顔をして突き飛ばされたベッドの下で呆然とした。彼の中の常識は覆されてしまったのだろう。どうしたら良いのか分からない、と言うような怯えた瞳。自分はそんなことをさせたくて

連れてきたのではないと…………どうやって伝えればいいのだろうか？

「セン、よく聞いて？」

「ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！」

「大丈夫。私は怒っていないし、センにはそういうことを望んでいない。ちゃんと従者として、昼間に働きなさい」

「昼、間……………」

彼はそれを聞くと恐慌状態になったのか涙をホロホロと流してやがて泣き叫ぶように泣いた。泣くことは子供の仕事だと言うが、ここまで彼は一度も泣いていない。怯えた瞳が常時周りを観察しているだけだった。

ようやくセンの気は緩んだのだろう。

「ほら、セン…………もう寝よう？」

そう言って微笑むとコクンと頷いて、そのまま一緒に布団に潜り込んだ。

父親にでもなったような気分だった。

そんな翌朝は、すっきりと起きられた。

センはよく笑うようになったし、泣いたり怒ったり感情もちゃんと出すようになっていた。どもるのが何よりも少なくなった。

色々な抑圧が感情を出さなくなっていたのだろう。主従関係なのだからなかなか好き勝手にさせてはあげられないが、それでも自分との旅は彼にとって良いモノでありますようにと願わない日はない。

メリウスまでの旅自体は少し時間は掛かってしまうが、彼とゆっくりこうしているのは自分の古傷も癒えていくようで大切な時間になっていく。

そう思っていた矢先、事件は起こった。次の街の宿でのこと。

深夜帯、ふと目を開ければ宿が凄惨な勢いで燃え上がっていた。ガバツと起き上がり、センを起こすと脱出の方法を画策始める。多分自分だけなら簡単だ。結界を張って外に出ればそんなに問題無い。

だが、もう酸素も薄くなりつつあるこの部屋からセンの身体は強行突破を耐えられるのだろうか？

そしてこの火の回りの早さ。普通の火事ではない気がして周囲を見渡した。逃げ遅れたのは自分達だけなのだろうか？

窓を開け放ち、その先に見えたのは軍の大部隊だった。一瞬自分の正体がばれたのかと思ったがすぐにその考えはかき消される。

昨日のセンの主人がこちらを指さして立っていたからだ。彼はセンを取られた報復に來たのだろう。あり得ない……こんな事態。

個人的な怨恨で宿自体を焼き払うなんて……。

迷う暇は無い。外に出ても彼は攻撃してくるだろうがここで煙にまかれてあげる筋合いもない。センを抱き上げると外へと逃げ始める。

「ニコ！」

「セン、あんまり煙を吸うな！ハンカチで口を押さえて」

「はい」

そう威勢の良い返事をして小さい手が口を覆うのを確認した。

弱めの結界を体中に張り巡らせて崩れる天井や炎の中を走った。

途中第二波なのか建物自体がドンッと衝撃に震える。

こんな……軍を相手にして、一人ならドサクサに紛れて逃げることも可能だが子供連れで逃げ切れるのだろうか？

自分はどうしても戻らなければいけない場所があるのに。

宿の中の逃げ遅れた客が何人も自分の足下に命乞いをした。人の焼ける油のニオイが鼻につく。何を思えばこんな強硬手段を軍が許すのだろうか？

表口の方に飛び出すと自分を確認したあの男は、フェーン軍の増幅魔術の発砲命令をこちらに出した。火事によって集まった民衆の前で自分と元愛人の公開処刑を行う気だったのだろう。

流石に瞬時に軍隊が遣うような大人数での魔法に対する対抗法が見つからず、ただ自分の腕で必死にセンを抱きしめていた。

だが、衝撃はいつまで経っても自分には伝わってこなかった。

「……………何？」

代わりにその放ったはずの魔術が軍の方に跳ね返っていた。自分の周りを薄く巡る銀色の光。

それが何なのか、自分でも分からず呆然としていると民衆達が周りを取り囲むように立つ。センがはつきりと口にした。その言葉は民衆達の高揚した心を煽る。

「神様……………」

と。

民衆は自分を急に讃え初め、恐ろしい内容を口にした。

「前王朝の復活だ」

「王子が生き残っていた！」

「神の力を持つ男が現れた」

神の力なんてあるわけ無い。だが、確かに前フェーン王の家系は魔法の一切に対する大きな抵抗力を持つ。多分自分の姿にそれを見たのだろう。

だがこの銀色の波動は違う。

民衆の中をかき分けて入っていった。

絶対居るはずだ。自分がこの波動を間違うはずがない。

「退いて！退いてくれ！お願いだから、ハクア！ハクア様！」

必死に、必死に……………必死に。その瞬間はもう他のことを考える余裕が無かった。

小柄な少年の姿に扮したハクアの姿を人混みの中に見つけたときには、何もかも余裕が無くなっていた。

ただ、愛しくて……………。

ただ抱きしめていた。

どういう反応をして良いのか、彼の腕の中で困っていた。

でも会えて嬉しいという気持ちだが、手を伸ばしていく。彼の汗ば

んだ身体を、筋肉質の胸板を確かめるように手を回した。
すぐにニコはしまった、という顔で自分の身体を引きはがす。

「ニコ……………」

「ハクア様、どうしてここに？」

「迎えに来たに決まっています。それ以外にこんな場所に来る理由はありません」

「なんでそんな危ないことをっ！」

「なんで？……………置いてきてしまった忘れ物を取りに来る理由は大
事だから以外にあるんですか？ 愚問ですね」

「ハクア様……………」

困った顔をする彼の頬に触れて微笑んだ。

今更だ。さっき自分の名前を呼んで必死に手を伸ばした彼を見たら
確信してしまった。彼はきつと自分のことが好きだから自信を持
って笑おう。

「ニコ、一緒にメリウスに帰りましょう」

「はい」

愛しくて、仕方ないこの人にもう一度手を伸ばす。いっぱい触っ
て、確認するように抱きしめて、もつともつと……………その先を期待
してしまう。

ニコの手がそんな自分に酔ったように、顔に、首筋に、腰元に、
唇に、触れて確認する。周りも一切見えず、背の高いニコにしがみ
つくように抱きついた。

そんな中、クンと右手の拘束具が引っ張られる。

もちろん、ここまで連れてきてくれた彼によるモノだ。

腕が引き摺られてレイドの元に強制送還。自分の身体を受け止め
てニヤニヤニヤニヤと……………彼は約束を果たされるのを待ってい
た。

「ニコ……………新しい婚約者候補のレイドです」

恨めしそうにそれを吐き出すとようやく彼の手から解放された。
更にニコの前に出て握手を求める始末。ニコはジロジロとレイド

を上から下まで見定める。

「……ハクア様の補佐官を務めているニコ＝マルス＝ディセールで
ございます」

「お噂はかねがね。レイド＝ハワードです。あっ！服借りてます」
「サイズ、なかなか無いですから。お互い身長が高いと苦勞します
ね」

と微笑んだ。だが二人とも口許しか笑って無いし。薄ら寒い気が
して肩を摩った。

ニコはすぐ自分の腕に填った拘束具を見つけて嫌な顔をする。

「ハクア様、まだ結界解けてないんですか？」

「あ……ニコが戻ってないって聞いてこっちにトンホ返ししちゃ
ったので……」

「女王がそんなでは駄目です」

「女王としてじゃなく、ハクアとして……一個人として来たんで
すよ」

「ハクア様、あまり困らせないで？貴方は国のトップなのですから
人を遣うことを覚えて下さい」

「大事な人を迎えに行くのに人を遣うなんて嫌です」

「大事な人っ……って」

困った顔をするニコに、それでも触れたくてもう一度手を伸ばし
た。

ただ触れたくて……。

それが自分の叶えたい自分の為の我が儘だ。

「ハクア様……そこまで心配して下さいありがとうございます。
無事戻りましたので」

「ニコ、私ね！」

「城に、戻りましょう。皆心配してますよ」

貴方のことが好きなの！今にも伝えたいのに彼の背中が全て拒否
していた。

そんなことを聞くために戻ろうとしていたんじゃないって。

言葉は呑み込んでいくほど自分の中に大きく、深く残る。これ以上募らせたら溢れだして止まらなくなってしまうそうで……。

周りの騒がしさにそこで言葉を切った。

自分達を取り囲んで神の再来を謳う民衆達の高揚した瞳は異常な熱を帯びている。多分この国を変えられる唯一の手段を見つけたとみんなが確信したのだろう。

ニコが走って戻り、小さな男の子の手を取った。

こちらに引き寄せ、走り寄ると、全員で走ってその場を撒く。

街中が神の再来に沸き返ってしまい、興奮は冷めず戻れる様子がなかった。街から次の街までの街道の外れでようやくお互いに落ちて着いて話することが出来た。

港は次の街だから、ゆっくりではあってもニコは自分の足で確実にメリウスを目指していたことが分かる。そしてゆっくりにならざるおえなかった理由は、ニコの連れているこの子供にあるのだと確信していた。

少し腰をかがめて目線を合わせすとニパッと微笑んだ。

「お名前は？」

「センです！ニコの従者です！」

いっばいいいっばいと言った感じの自己紹介に苦笑しながら、こちらでも自己紹介をする。

「私はハクアと言います。ニコの……友人です」

女王と言っても伝わらないだろうし、ニコの主人と名乗るのには少し憚れた。もちろん恋人と名乗るほどの関係じゃないことも重々承知しているため、こんな微妙な表現になってしまう。それを聞いてニコが複雑そうな表情をするのも感じた。

薄い主従関係にケリを付けたいのは自分だけではないはず。でもそれ以上を求めることの困難さはワカッテイル。

センは嬉しそうに目を輝かせてこちらに歩み出た。

「ハクア？」

「はい。ハクアです。よろしくお願いします」

「可愛いね！オナナノコ？」

「はい。女の子です」

自分の格好を見てもすぐに性別に気付いた良い子だ。ウンウンと頷いてかなり長いこと気付かなかった後ろの男にプレッシャーを掛ける。

まあ、前回来たときほど念入りに扮装をしていないというのは一番の原因だろう。正直急いでいたのでカツラを用意できなかったのだ。赤い髪を適当に後ろに結い上げただけ。そんな状態だからすぐ勘付かれたのかもしれない。

ゴホンゴホンとわざとらしい咳払いでレイドは前に出て、センを抱き上げた。

「俺はレイドだぞ！ハクアの恋人！分かる？」

「……………いつ恋人になりましたか？」

「えー？恋人じゃない男と口付けを交わすほど女王様はアバズレなんでしょうかあ？」

と悪びれないレイドの足を思いつき蹴り上げた。

口付けどうのこうのの件を聞いたニコは表情を全く変えない。まづい……………このまま気持ちを閉ざされてしまえば自分が入り込む隙が無くなる。

「ニコ？」

「ハクア様、取りあえずその拘束具を外しましょう。ちゃんと見せて下さい」

簡易的に張った人除けの結界に焚き火をたいてその日は初の野宿を取るようになった。

レイドはつまらなそうに焚き火を見張り番。燃料を切らさないように投入しながら、疲れて眠るセンを膝に寝かしつける。すぐに打ち解けてしまうと、面倒見の良いレイドはフェーン帝国内であってもきつと良い上官だっただろうに。

二人の腕に詰められた拘束具に触れること小一時間。結界の解析を行うニコはすぐ冷静だった。結界の専門家である彼の腕は国の

お墨付きだ。ちゃんとした『女王結界』ではないこの絡み合っただけの拘束具なら彼に任せておけば簡単なことだろう。

やがて術式を解き始めた。

「ニコ……」

「はい？」

「大変ですか？」

「まあ……私としてはその男の手首を切り落とす方が楽ですよ」

「ニコ……それは流石に」

「私は貴方が無事なら良いんです」

昔から一貫してその姿勢は変わらない。自分の我が儘は、きっと彼の元でしか通らないような事ばかり。彼は自分の我が儘のために何もかも出来るようになっていった。

「誰かに……言ってから来たんですか？」

「誰にも。みんなには大人しく待てと言われました」

「当たり前です。ハクア様を私のために来させた人間が居たなら直々にクビにしてやります」

「じゃあ……ニコ、私をクビにして下さい」

と真っ直ぐ彼の目を見ていった。ニコは目を見開く。

自分がここに来た原動力は、自分の中にあるニコへの気持ちだ。

貴方が好きです、ってそれだけを伝えたくて、メリウス以外の場所ならもしかしたら聞いて貰えるかもって甘い考えだけ。

「……なんて、ね」

あからさまな困り顔に負けて、茶化すように笑った。辛いのは……誰なのだろうか？

自分もニコも黙ってしまった。

「ハク、今日は大人しいね？」

「……レイドがどう思ってるのか知りませんが私はいつもこうです」

「ウッソー！結構お茶目な子だって俺は知ってます」

「レイド……いいかげんにしないと本当に手首斬りますよ」

「いやん。部下が部下なら主も主だったわ」

彼の軽口は慣れつつあったが、ニコはレイドが嫌いなんだろう。そんな自分の思い人ニコの前でレイドと仲良くおしゃべりできるほど器用になれなかった。

だがこの男はとことん邪魔しに掛かる。

「拘束具が取れなくても良いんだけどね」

「困ります」

「なんで？ちゃんとトイレ行かせてあげてるし、風呂の時だって外で待っててあげてるじゃん？婚約者になっちゃえば一緒に入ってもオッケーだ！」

「オッケーじゃないです！」

「俺の嫁になりなよ。ハクは女王に向いてないって」

って簡単に言う。向き不向きで選ばれてるのなら確実に女王になっていない自分に向かって。

嫁になるのが向いているっていうのなら………今までの自分の努力は間違ってたなかったのだろうか、今はあんまり嬉しくない。

ニコが眉を顰めて溜息吐いた。

「申し訳ありませんが、レイドさん。うちの女王を誑かさないで下さい。貴方がどう口説こうがこの人はもう女王なんです」

「ハクに選ぶ権利無いの？」

「選ぶ………ですか？」

「女王じゃなくなる権利は無いの？俺の嫁になってフェーン帝国と一緒に治めた方が幸せかもしれないじゃん？」

「まだレイドさんがフェーン帝国で皇帝になれるかどうか分からないのに？」

「なるよ。俺はフェーンを統治する」

「じゃあハクア様との婚約は諦めて下さい。申し上げたとおりハクア様はすでに我が国の女王です」

「ん？俺がメリウスにいるなら婚約しても良いわけ？？」

「良いですよ」

「ふーん」

とレイドはつまらなそうに頭をかいた。

そんなニコの言葉を聞かされたこっちが凹む。レイドとの婚約は良いってさ。

肩書きと結婚する訳じゃないのに。

こちらを全く見ようとしないうニコにも悲しくて、無理矢理レイドに話しかけた。

「女王には……向いてませんか？」

「向いてると思ってるの？」

「全然」

「……全然向いてない訳じゃないけど欠けてるんじゃないか？頭も良いと思う。国や民のことを思ってるし……でもそんなの宰相にでも任せておけばいい」

「女王が宰相と同じでは駄目ですか？」

「女王は国のトップ。舵取りだろ？何の野望も無く舵なんて取れるのか？みんな路頭に迷うぞ」

「野望……私はみんな平和なら良いと思います」

「何処の宗教家だよ」

はーあ、とわざとらしい溜息を吐いてレイドは言う。

「キリヤってヤツのがまだ見込みあるぞ！あいつは手に入れたいモノがあつてギラギラした目をしてる！」

「キリヤじゃ誰も付いてきません」

「よくわかってんじゃん。国のトップに必要なのはカリスマ性と野心。それを実行するブレーン。お前野心以外は全部持つてるよ！でも野心が足りないなら野心家に嫁に來ればいい」

「野心……」

なんだろう。確かに玉座に座ってどうしたいか、ここまで考えたことが無くて頭は真っ白になった。

カチャリと音がして、拘束具が腕から抜け落ちた。

久々に軽くなった腕に二人とも手首を動かして解放された喜びを

味わう。

「あーあ、取れちゃったあ。でもそろそろ俺も一人で色々やりたいことあるしねん♪」

レイドはいたずらっぽくぺろっと舌を出して言った。

「レイド……私ね」

「うん？俺に先に言うの？」

そう言うレイドの唇にグイッと顔を近づけた。触れるか、触れないか……一瞬。やり方が分からなくて、ちょっと触れるだけ。

「あのここまで連れてきてくれてありがとう……、あ、後払い分精算で」

「ハク、足りないよ」

そう言ったレイドの目が怪しく光る。持ってかれる一瞬。

容赦無く食らおうとする獣の手が自分をさらう前に、ニコがレイドの首筋に剣を当てた。

「わぁお♪噂に勝る有能な護衛官だね！むしろ番犬？」

「私のハクア様に触らないで下さい」

「俺、今は彼女の婚約者だよ？」

「私が認めません」

「だってさ。ハク……良かったな？まあ……俺は慰謝料ってことでこの従者を貰って御和算にしよう」

そう言いながらレイドは寝ているセンの身体を抱き上げて結界の外へ出て行った。外は危ないから、って声を掛けようとしたらニコの腕が自分の身体をさらった。

さっきレイドに触れた唇の感触を上書きするように重ねる唇に、夢でも見ているかと思うてしまう。こんな、メリウスでだったら絶対に誤魔化されきっていた。

だが、もう思いはあふれ出して垂れ流しになっちゃってる。

髪の毛を結んでいる紐を解かれて、髪の毛を絡めながらする少し乱暴な口付け。絡み合う思いは、いつかどちらのモノか分からなくなるぐらいに解け合って流れ出す。

ずっと……長い間、お互いにこの時を夢見っていて、本当にどうしたらいいのか分からないぐらい。

どのくらいの時間顔を摺り合わせていたのだろうか？正氣に戻るような感覚を覚えて彼を見ると、包み込むような優しい笑顔が自分に降ってくる。

何がしたいのだろうか？自分にはまだ婚約者がいて……。

「ニコ、なんか私……順番を間違えました」

真剣に言った言葉にニコは苦笑した。

「ええ。でも大丈夫。今、国外ですから」

「ええっ!？」

「貴方は、ハクでしょ？」

「え？ええっ!？」

別人として行動してたら浮気して良いって言う免罪符は出ないと思う。……が開き直ったニコに怖いモノは何もなかった。

いつも通りのエンジェルスマイルで自分を誘惑する。形の良い薄い唇を指さしてニコは言った。

「ほら、ハク？もう一度キスをしてよ？」

その碧い瞳に勝てないで、もう一度自分から唇を重ねた。

背の高い男と子供の二人連れがこの国を変える使者だ、という噂が流れ始めたのは良いタイミングだった。

港町に着く直前でその噂を耳にしたニコはレイドにこう話を持ちかけた。

「レイドさん、白金に髪の毛を染めませんか？」

「はあ？」

「センが君に懐いているのでこのまま従者の件はお願いしたいです。実際彼を国外に連れ出すわけにはいかないと思いますし」

「……………で？」

「レイドさんの背丈は私と同じぐらいですから。あなたはそのまま噂の『背の高い男』のふりをして革命軍を率いれば良いのでは？私が出て行くよりも、本物の王族なんですから丁度良いでしょう？どっちにしたって神様の力なんてありませんけどね」

レイドは少し驚いた顔をしたが決心をしたようでセンと少し話し込んでいた。巻き込んでしまう子供の意志だって確認するレイドは絶対に良い王になる。

そしてセンも頭の良い子だ。良い従者になるだろう。

みんなが走り回って、ニコが帰国準備をしたり、レイドが髪の毛を染めたりしている間、自分はずっとレイドに言われたことを思い返していた。

何がしたいのだろうか？

結婚相手も自分でどうにか出来ず、大国の命令に流されるままの女王でいてはならないって事しか分からない。

野心……空っぽなのかしら？

自問自答はなかなか上手いなくて、それでも自分は譲れないモノがあってここに来たんだって気付いた。国と天秤を掛けても彼を取ってしまったんだ。

（そういえばラキスと天秤掛けてもニコが勝ってたんだわ）

ほくそ笑むエリシャの顔が思い浮かぶ。きっとキリヤは自分をまた罵倒する。貴族達や大臣を説得するのは一苦労だろう。それでも、自分は……ここに来て正解だったと。

乗船チケットを持って帰ってきたニコが隣に座っていつも通りの事務口調で説明する。その机の下では絡み合う指だけが熱を帯びていた。

それだけで、大丈夫だと信じていられるから。

「ではそろそろ帰りましょう」

完全に魔法で髪の毛の色を脱色したレイドがこちらを向いた。時折感じることがあったが、ちゃんとしてればやはりこんなにニコに似ているのだ。

「ニコ……………あなた何者？」

「え？それを訊かれるのは私の方なんですか？」

「えゝ？レイドと骨格とか……………そういうパーツパーツが似てるから親族なのかなあ……………」

「私の親族はメリウスにある里親だけですよ。血縁という意味ではいませんから」

そう笑う彼はやはり秘密主義のまま。

レイドも少し腑に落ちないような顔をしたがその後と言う。

「ニコ、オニイチャンって呼んでも良いんだよ？」

「……………私は三十一歳ですよ。あなたはせいぜい二十代でしょ！年下のオニイチャンは要りません。ついでにこんな無精髭はやしたムサイ弟も要らないので今すぐ記憶から抹消して下さい」

「うええゝっ！オヤジ！？？若作り？年の差ありすぎじゃね？ロリ……………」

五月蠅く騒ぎ立てて余計なことを言いきる前にレイドに別れの回し蹴りをかましたのだった。

蹴られながらもめげずに笑う彼のことも、少し好きなんだ。

自分とは違う道を歩み、交差することのない運命を持つ君へ。
行く先に幸多かれと海の上から祈る。

自分のことは何一つ上手く行かなくなたって、政治には関係ないってこと。

時は過ぎていく。城を勝手に抜け出したことによって、自分の溜まりに溜まった仕事の決裁だけで、バタバタと日々の業務に明け暮れた。

もちろん自分のやった行為は複数の部下を含み、懲罰動議にまで及びそうになったが、結界の修復にしてもレイバードの外交にして

も自分の功績という事で数日のフェーン帝国へのバカンスだったと言ふことにして不問となった。

外交の旅に出る前と変わらない仕事というわけにも行かず、仕事量のせいでまともにニコの顔も見えていない。

部屋をノックする音が聞こえて恋心にふたを閉じる。

「はあい」

「ハクア様、キリヤ様がいらしてます」

「お通してして」

タイムリーにやってきた現婚約者様にはすごく大切な用事があるのだ。出頭令状を出してから十日間も経っているがようやく応じる気になったらしい。

色惚けてる場合じゃないのだ。

野心を探して辿り着いた答えを実行するためにも、この儀礼は通らなければならぬのだ。

だが部屋に入ってきたキリヤは少しふらついてた。

立ち上がり怪訝そうに彼を見つめていると、漂うアルコール臭がそのわけを教えてくれた。

（エリシャ……何故こんな状態の人間を通したの？）

これでは話にならない。

フラフラと、そしてヘラヘラと笑いながらようやくここまで来たという様子。女王直々の出頭令状を持っていたら通さないわけにはいかなかったのだろうが普通なら門前払いだ。

みんな揃いも揃って逃げてばかり。

ボサボサでセットされていない長めの髪の毛も、薄めではあったが無精ひげも生えている状態も、グシャグシャにシワの寄っているシャツも、こんなちゃんとしていないキリヤは初めてだった。そんなにラキスが好きならたとえ家のためでも自分と婚約するなんて駄目だろう。そんなのは上手く行きっこないのだから。

「キリヤ」

「なんですかあ？」

「私と婚約解消しましょう。その上で聞いて欲しいことがあります」
「婚約無くしちゃって良いんですかあ？ハクア様、今あのレイドつて男追いついたんでしょお？行かず後家になっちゃいますよお？」
船を漕いでるように前後に落ち着かない動きを見せるキリヤだが、言われていることも今の自分の状態も分かっているようだ。

酒癖が悪くても本当に酔うことが出来なくて、だからこんなになるまで呑んでいるのだろう。

「キリヤ、酒を抜いてまた来なさい。続きは素面の時に話しましょう」

「…………まだ分からないんですか？ボクはあなたの顔が見たくなくて出頭令状も無視したんです。いくら言っても無駄ですよ」

「なんだ…………ちゃんと喋れるんじゃない」

じゃあ手加減はしない。

椅子から立ち上がり、キリヤの前に立つとおもむろに腰を落として脇差しを抜くと右側の髪の毛を短く切り落とした。

「なっ！何するんですか！？」

「キリヤ、今決めなさい。出家して坊主になるか、私に忠誠を誓って一生王家に仕えるか…………それともレイバードでお姉様に仕えるか。私はそんなに汚い格好の部下も、酒の抜けない部下も、頼りない部下も欲しくないのだからちゃんと出来ないなら要りません！良い寺院紹介してあげます」

鞘に脇差しをカチャリと戻しながら宣告した。キリヤはワナワナと怒りに震えながら言う。

「貴方は！ライダー家の力が必要だったのではないのですか！」

「酒に逃げる次期当主の家の力なんて必要ありません。せいぜい酒代で家を潰さないように精進なさい」

「貴方なんか嫌いだ！大嫌いだ！ボクの欲しいもの全て持つてくるせに！」

「私は…………自分の欲しいものを手に入れるために努力は惜しみません。これは女王になる前から変わってません！」

ドンっと思いつきキリヤを押し倒し、初めから用意しておいた出家をする旨の書状を出してキリヤの右手を掴んだ。

ライダールの親族連中に文句を言わせないために、この文書は重要なのだ。瞬時に親指をナイフで切り付けて、血判を押させようともし合う。さすがに嫌がるがこちらもう後には退けない。

「貴方は出家した方が色々楽です。楽しいご隠居生活をお送り遊ばせ」

「ボクのことは放って置いて下さい！ハクア様に決められたくありません」

「放っておきたいけど貴方が政治から退いてくれないと、こちらも自由になれないのです。こっちだって貴方が邪魔なんです！」

「普通そこまではつきり言いますか！？」

「協力してくれないなら邪魔に決まってるでしょ！」

と、もみ合うこと数十分。いいかげんに疲れてきて、それでもみ合ってるせいで物音にも気付かなかった。エリシャが再び覗いて怯えている。

「……………ハクア様あ」

「エリシャ！加勢しないならあっち行ってなさい！」

「ニコ様がいらしてますう」

「え？」

と言った瞬間、キリヤはその隙に自分の手を振り解いて乱暴に突き飛ばすと、物凄い勢いで部屋の外に逃げていった。舌打ちして逃がしたか、と呟くとエリシャが呆れたように首を横に振った。

後ろからニコが現れる。

「キリヤ様と仲良くやってますね」

「何処に目を付けたらそう見えますか？」

憎まれ口を叩く自分に顔をクシャクシャにして笑うのだ。乱れる髪の毛にニコの手が通り抜けていく。

その様子を見て、エリシャがニヤニヤと嫌な詮索を含んだ笑いを浮かべた。

「エリシャ、下がって」

「ふふっ、ハクア様私の言ったとおりになった♪」

嬉しそうに笑うエリシャの前で顔を赤らめると、手加減ってモノを知らないニコは自分の身体を掴んで首筋をパクリと噛みついた。

「ふひゃあ!」

「うわあ……ハクア様その叫び声は色気無い。スミマセン、次までにはちゃんと教えておきますからお手柔らかに。ウブな子なんですよ、ニコ様」

と勝手に謝罪をした。それに負けずにニコはいう。

「大丈夫です。色恋に関してはこれから本腰入れてこちらで仕込みますから♪」

「あー、ですよねえ♪お任せしますう!」

ガツクリと肩を落としている自分を終始無視して、エリシャが賑やかに退室していった。

急に二人きりになると少し緊張してしまう。

今が執務中と言うこともあってニコはちゃんと距離を取っていても、何かあるんじゃないかと期待してしまう自分が居て……見透かされているようで恥ずかしい。

「キリヤ様……」

「え!？」

「なんか乱れてたみたいですが何かあったんですか？」

「ん……婚約解消してもらおうと思ったたらなかなか上手く行かなくて」

「まあ、彼は彼なりにあなたとの関係が無になるのも困るんでしょうね？」

「え?……なんで？」

「だってラキス様と全く繋がりが無くなることは彼にとっての死の宣告なのでは？」

「……じゃあキリヤの残された道はコレですね。レイバードに外交官として飛ぶ」

と、別の書類を用意して次戦に持ち込まれた決着への道筋を模索する。さすがにもう真っ向勝負を挑んでもキリヤが応じないだろうし。

だが思惑外れてニコが言った。

「いや……キリヤ様はハクア様の婚約者でいて貰った方が良いでしょう？」

「え？」

「……その方がきっと良いです。貴族同士の婚姻なんてそんなに意味のないモノだって知ってるでしょう？でも家と家同士には有効ですから」

「ニコ……」

その先が聞きたくなくて、耳を塞いだ。
目をギュッと瞑った。

「ニコ、私は決めたんです」

「ハクア様」

「女王としての野心。何がしたいのかって……。私はキリヤの家やレイドの血筋に頼らなければならないような不完全な女王は嫌です。ちゃんと一人で女王になってみせますから」

「ハクア様……ですが貴方はいつか跡継ぎを産まなければならないのです。私ではその相手として相応しくありません。今しているような恋人ごっこぐらいはお付き合いできますが……」

彼の言葉に自分の理性が切れる音が聞こえた気がする。

自然に彼の手を掴んで、流れるような動作でソレを彼の腕に装着させた。

白金のニコの髪と同じ色をしたブレスレット。

「………なんですか？これ？」

「拘束具……です。でも距離規制は無いのでとても安心！」

「ハクア様という……」

「これで私は貴方が何処にいても居場所分かりますから！まあ、婚約指輪みたいなものですよ。あっ腕輪だった」

ニコは顔色を変えて解除魔法を唱え始めるが、そんなものが効くように作ってはいない。仮にも免許皆伝して貰ったし、仮にも女王なのだから女王結界を応用すれば普通の術者に解けるような術は掛けないのだ。

逃げるなら追うって決めた。

ちゃんと欲を出して良いって、レイドも言ってた。

「私、何度考え直したってあんなキリヤと結婚できないし、レイドと結婚するのも嫌です」

「ハクア様……あんまり困らせないで下さい」

「責任は私が取りますから、ニコ……私と悪いことをしましょう!」
「はあ?」

「ニコ以外の伴侶は要りません。ニコが伴侶になってくれないなら私は独身のままで良いです。でもこの国のために内緒で跡継ぎは作る手伝いもして下さいね?」

と、人差し指を口許に持ってきて微笑んだらニコは絶句して後退った。

でももう逃しません。

この国の女王としてやっていくこと。

それは国民に誓おう。でもやり方は自分次第なのだ。

迷ってる顔をしていた天使様の胸に飛び込んで、少し慣れてきた口付けを交わす。共犯者選ばれたニコは少しずつ緩むように顔を綻ばせて自分を受け入れた。

この国は後、半世紀に渡り史実上一度も結婚をしない独身女王が治めていく。

神との婚姻をしたと言われているその女王は、未婚のままにそれは美しい子供達を産み、国にかつてない繁栄をもたらしたと言われている。

独身女王の側にはきつと、いつまでも碧い目をした守護天使が付いていたのだろう。

死が二人を分かつまで……。

女王と家臣（後書き）

私はこの話、好きです。

髪結いと姫君の次に書いたからとにかく明るい話を、と思って作った設定でした。泣いたり喚いたり笑ったり叱られてびくびくしたりでもやりたいことやれる主人公を…….と思い作られたのがハクアです。

ニコは美形のドSという私のツボ（…….他の作品見ても分かると思いますが好きなんです。そういうヒト）。

ストーリーはなかなか二人をくつつける設定に持って行くのに苦労しました。普通に書いてくとレイドやキリヤとくつつけた方がやりやすく…….

だってニコ…….大人なんだもん。なかなか上司部下の関係から一線超えてくれないから。

お姫様なのに庶民派。しかしお姫様…….って感じが伝わると良いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192u/>

女王様の言うとおりに！

2011年7月2日03時11分発行